

K Mの停車場、更に遠くT町に行つて見ると、今までの此處の繁華な渦が忽ち其處に移つたやうに、人は集り、犬は走り、林は伐られ、土手は崩され、誰も彼も皆な莞爾してゐるのにも拘はらず、此處では、昨日の榮華は全く一場の夢であつたといふやうに、誰も皆な元氣のない顔をして、羨ましさうに、妬ましさうに、また悲しさうにさうなつて行く土地の運命を眺めた。俄かにあたりはさびしくなつた。驛長の顔にもさびしさが見えた。

『驛長さん、まさか、川向うの小さな停車場へ行くんぢやあんめい……』

かうかれ等の一人が言ふと、

『何處にやられるかな……。何うせ、碌なところにはやられまいよ。何ならぐつと遠くの方が好いな……。それにしても、此處は面白いところだつた。』

こんなことを言つて驛長はさびしく笑つた。

Hといふ驛員は、『T町の停車場には、もうちゃんときまつたものがあるんです……。何處にやられるか。餘程好いところにやつて貰はなけれや割に合はない……。此處は忙しかつたから……。鐵橋の材料を運搬するんで、その勞力は一通りぢやなかつたから……。うんと手當でも呉れさうなもんだな。』と、もう一人のBは、

『此處は好い處だが……。折角これだけ發達したものをそのままにしてふといふことは惜しいこ

とだがな。矢張、この土地より上州の方が人物があるんだな。』

など、言つた。若いAにも、何となくさうして滅亡して行くこの驛前の凋落が悲しく映つた。

もう其頃には、鐵橋をつくるために入込んで来た工夫や土工も大方はなくなり、それと共にT街道の方に開けて出来た小さなだるまやの家屋なども逸早く取毀され、女達も時期に由つて南から北に行く渡り鳥のやうに、散々にあちこちに散つて了つた。さうしたさびい悲しい空氣の中に、やがて賑やかなT川の鐵橋開通式の日は來た。

## 二

しかもいつの間にか、繁華の渦はT町の方へと全く移つて行つてゐた。鐵橋の開通式と言つても、此處は形ばかりで、賑かな儀式や宴會やは、T町の停車場でやることになつてゐた。

此處での重立つた人達は、M屋にしても、Y屋にしても、K屋にしても、皆な主人はT町の方へと行つて了つて、お玉やお常までも一時狩り催されて行つた。停車場には、まだそれでも人々は残つてゐたけれども、誰も皆氣の乗らいやうな詰らなさうな顔をして事務を執つてゐた。

鐵橋にはそれでも紅白の旗が交又せられ、酸漿提灯が晴れた日の空氣の中にくつきりと無數に飾られて、いかにも賑はしさうな光景をあたりに呈した。最初の試運轉は、午前の八時に試みられたが、その



時には、流石にめづらしいので、そこらの人達は老若男女を問はず、皆な土手の上に登つてそれを眺めた。

客車と貨車との混合列車を五六臺つけた汽車は、ところどころに開通の祝ひの小旗を靡かせ、汽鐘車のところには大きな國旗を交差させて、そして静かに、新しく出来た鐵橋の上へとかゝつて行つた。

白い黄い黒い煤烟はもくもくと簇りわたつて、やがて鐵橋をわたつて行く轟といふ音が長くT川へと轟き渡つた。

『萬歳！』

といふ叫びが、そこに集つた子供等の口ばかりから出た。

つゞいてその日の三番列車は、今度は大勢のめづらしさうな乗客の顔を列車に満載して、そしてその鐵橋を渡つて行つた。晴れた静かな晩春の好い日であつた。

## 三

その川沿ひの停車場に汽車が寄りなくなつたのは、それから猶ほ十日ほど過ぎてからであつた。驛長は東京に近いある大驛につとめる身となつた。AもHもそれと一緒に行くことになつたが、あとの四五人は或は新しく出来たKM驛に、或はT驛へと皆な好いやうに割り振られた。

丁度其の頃、M屋の主人もK屋の主人もT町から此方に来てゐたので、その送別會らしいものがM屋の二階で開かれた。驛長は莞爾しながら立つて『兎に角、こゝは面白いところでした。このまゝ元の草原になつて了ふといふこともなまじひに小さく貧しく榮えるよりは好いことだと思ひます。私は諸君のためにも、さう深く根を張らない中に、壊すにしても容易に壊すことの出来ない空氣の醸して來ない中に、銘々に元のところにお歸りになるのを結構だと思ひます。それは資本を澤山におつぎ込みになつた方も御座いませうが、それは人生にはまゝあることで、何うも致し方が御座いませぬ。兎に角、汽車が出来たために、かうして諸君と相識り、また、停車場がなくなつたために、諸君と別れて行くといふことも意味のあることだと思ひます。それに、一番愉快だつたのは、その間を非常に活躍して、生々として暮したことです。三年の間には、随分いろ／＼なこともありました。中でもDとS子の情死などは世間を動かすやうな騒ぎをしたでは御座いせんか。面白かつたと思ひます。意味があつたと思ひます。これで諸君にお別れしても決して遺憾は御座いせん。何うか、諸君も御健全に、またお目にかゝる時があると思ひます。』といふ演説をした。

誰も彼も隔てなく話し、快活に笑つた。Hは、お玉を捉へて、

『お玉さんと僕とが此處は一番先きだつたね。もうとうに、何うかならなければやならない人が、まだかうして此處にゐるんだから不思議だね。』



など言つた。Bがふと思ひ出したやうにKの話をして、『それにしても、Kは何うしたかさ……。あれがあのこのだるまに夢中になつて困つたけがな。』

『さうく……。今ぢや何處にゐるかわからないだらう。A君知らないか？ 知らない？ 何うしてるかさ、先生。あのだるまの死んだのも知らないんだらう？ あんなに夢中になつた女がもう此世にゐないのも、まだ知らずにゐるんだよ、屹度……。』

『あの女は可哀相だつた、しかし……。本當にKに惚れてゐたらしいからね。』

『何つて言つたつけない名は？』

『お袖つて言つたアね。』

『さうくお袖だ……。』

こんな事を言つて人達は笑つた。M屋は折角此處に出した旅館をその儘つぶして了ふのも惜しいし、T町には本店があるので必要がないから、あらためてそのまゝH町の停車場前に持つて行く権利を會社側から得てゐた。そして矢張、お常とお玉とを置くらしかつた。Y屋はT町の方へ移轉する計畫を着々實行してゐた。

煉瓦の竈は、もう烟を立てないやうな日が多かつた。政はもうとうに其處にはゐなかつた。

『失敗だな？ 矢張、あそこも……。』

かうM屋の主人が言ふと、

『だつて、無理でさ……。自墮落な眞似ばかりしてゐるんですもの……。あれぢや、とても成立たない。先代の死んだ頃にや、奴も少しはしつかりしてゐたつげが、何うもあの家ももう駄目ですな。』とY屋は合はせた。

枕流亭の話なども出た。噂によると、妾は益田からそれを貰つて、猶ほ依然として營業をつゞけて行くか、でなければ誰かもつと東京の經驗のある料理屋か何かに譲り渡してやつて行くらしいといふことであつた。益田の話なども出た。

(もう、この裏田圃にもお別れだな。好いところだつたのに……。)若いAはこんなことを思ひながら、獨り欄干に立つて、けんけの一面に咲いてゐる、またはところくゝ転ひ返してある水田を眺めた。湧くやうにきこえる蛙の聲、明滅して飛んで行く螢、涼しい夜風の入つて来る夏の夜などは、何んなに若いかれを慰めたか知れなかつた。かれは今度の變遷も自分の讀んだ外國の小説のシインか何ぞのやうな氣がした。

驛長は既に二三日前、家族を新しい任地の方へと送つて置いたので、家財道具ももうその社宅には残つてゐなかつた。送別會から歸つて來ながら、かれはちよつと立留つて、錆びた沼に夕日の赤く映つてゐるのを目にしたが、(忙しくつて、碌々釣魚もやれなかつたが、沼にももうお別れだ。)こんなことを



腹の中で言つて、そしてがらんとした停車場の方へと歩いて行つた。

T町の躑躅は、今が盛りで、来る汽車も来る汽車も、それを見に出かけて行く都會の乗客で一杯であつたが、汽車がそのがらんとした停車場を掠めて、轟々としてT川の鐵橋にかゝつて行くさまが、あとに残つた人々の眼に映つた。

去年來て知つてゐる乗客達は話し合つた。

『ホ、この停車場はなくなつたんだな……。あんなに賑やかであつたところだつたがな。成ほど鐵橋が出来たためだな。』

『さうだね。不思議な氣がするね。随分、家もあつたんだがな。一時的の町ぢやなかつたやうだがな……。これは困つたものがあるだらう？』

こんなことを言つて、人の往來の少くなつた、戸の閉つた家屋などの多い、または戸を明けてゐる小料理屋の店先にさびしさうに一人ぼつねんと立つて此方を眺めてゐる酌婦などを眺めた。

『ホ、現金なもんだな。すつかり土手もさびれちやつた……。去年なんか、あの土手の上は賑やかなもんだつたがな。桑島の中に女の蝙蝠傘がつゝいて行つてゐるやうだつたがな。』かう言つて考へて、『それに、石油エンジンが通つてゐるぢやないか……。あれなんかも何處かへ行つちやつたんだね。汽車と

競争ぢやかなはないからな。これも優勝劣敗の眞理を表はしてゐるやうなものだね。』

『本當だ……。忽ちルウィンになつちやうんだね。色々な人達が考へたり、思つたり、泣いたり、怒つたりしたことが、すつかりあとになつて了ふんだね。ロウマや、奈良や、ブルウジだつて、これに違ひやしないね。ひよつとした動機とか、あるものゝ意志とかの下に、忽ち崩壊されて行く繁華のさまをまざんぐと目に見せつけられたやうな氣がするね。』

こんなことをその乗客達は話し合つた。鐵橋の上からは、その中に枕流亭の埋れたやうにしてある松原が眺められた。

## 四

洞落と破壊とは既に其處にあつた。早くも家屋の取崩しに取懸るものもあれば、家はそのままにして置いて、さつさと移住地へ移轉して行くものもあつた。もう一人としてかうしたルウィンに踏留まらうとするものもなかつた。今日も一軒取りこぼたれ、明日また一軒取壊されるといふやうにして、次第に元の荒野原にならうとしてゐた。大工の破壊する手に従つて、壁の崩れる埃は、をり／＼白くあたりに颯つた。

ある日は、M屋の女達が、主人の指揮のもとに、取敢へずそこから家財道具をH町の停車場の假宅へ



運ぶと言ふので、手拭をかぶつたり、塵拂や箒を手にしたりして、せつせと其處で働いてゐるのが見えた。折角新築した大きな二階屋も、今はすっかり雨戸が閉められて、形の好い松も街道の埃にまみれてイヤに白くなつてゐるのがあたりに際立つて見えた。

お玉やお常がせつせと家財をそこに運び出すと、運送車の人足は一々それを受取つて、そしてそれを車の上へと積み上げた。箆筒、長持、戸棚、鏡臺、寢道具、次第に車は一杯になつて、それが立つて行くくと、今度は別の運送車がまたそこに引寄せられて来た。

『これだけの設備をしたんだから、引越すだけでも中々大抵ではありませんな……』

ふと通りかゝつた人は、これも矢張眞黒になつて働いてゐるM屋の主人にかう聲をかけた。

『やア……、もう御難でさ。……何しろ永久築城のつもりでやつたんですからな。』

M屋の主人はかう言つて手を留めた。

『えらい騒ぎさな。』

『何うもしやうがねえ。』

『それでも、向うの家は、もう着手しましたかな。』

『いや、まア、ほんの小屋でさ。』

『誰れだつて、此處がこんなにならうとは思はねえだでな。』

『本當ですよ。』

隣のY屋では、二三日前、既に家財をT町へ運んだが、それでもまだ残つた仕事があるので、今日も上さんはそこに來て、女中を相手に何かせつせと働いてゐた。停車場前の通りはすっかり荒廢して、塵埃は積むに任せ、紙屑は飛んで散らばるに任せ、壊した家の壁は崩れて倒れるのに任せて、誰もそれを片附けるものもなかつた。軒を並べた家並は既にあらゆる方取壊たれて、齒の抜けたやうにがらんと裏の田圃まで見通しになつて了つた。

『今日は何うしても向うに行くかね？』

上さんはかうお玉に聲をかけた。

『何うしてもすませて、向うに行くつもりですよ。もう、お別れだ……此處にも……』

『本當だねえ。お名残が惜しいね。』

などと上さんは言つた。

この二軒に限らず、今日引越して行く家は、猶ほこの他に三四軒はあつた。折角村から此處に移つて來た土手下の溜りの車夫達の家族達も、不平を散々並べた末は、いくらそれを言つたつて仕方がないといふ風に、てんでに、車を持つて來て、そして家財をそれに載せた。午後の日影の照つた土手には、今日もさうした車が續々通つた。



日の暮れる頃には、それでもM屋ではあら方移轉の片が附いた。疊を二三枚積み重ねて、そこで握飯などをつくつて、働いてゐる人達はそれを夕飯の代りにしたが、主人は、

『それぢや、お常……お前は、お玉とあとの一臺について來い。』

『え、よう御座んす。』

で、一臺の車について先づ出かけて行つた。

そこへお玉の情人のSがひよくり顔を出した。

『おや、お前さん、來たの……？』

かう言つてお玉は莞爾した。

『Sさん、もつと早く來れば好いの……手傳に來るなら。』お常も笑ひながら言ふと、

『もつと早く來るつもりだつたけれど、ついおそくなつちやつた。少し手傳はうか。きまりがわるいから。』

『もう好いのよ。この車について行きさへすれや好いのよ。』

『さうか、もうそんなに早くきまつたのか？ 早かつたなア。』

細々したものを山のやうに積んだ運送車の最後の一臺、それにはバケツを載せたり、ランプを壊れないうやうに紙屑籠に詰めたのを動かないやうに結はへたりして、そして靜かにそこから發つて行かうとし

てゐるのであつた。

『ぢや、行かうね、お常さん……』

『忘れ物はないかえ……』

『もう、何にもない積りだがね。』かうお玉は言つて、Y屋の上さんの方を向いて、『ぢや、お上さん、さやうなら。』

『さやうなら。』

運送車のがたがたと動いて行くあとから、お玉とお常のかぶつた手拭の白く動いて行くのが微かに夕暮の空氣の中に見えた。Sはあとから續いた。

五

梅雨は晴るゝ間もなく降つた。

半ば壊されたまゝに残された家屋、腸の無残にあらはに露出してゐる破れた壁、處々に積み上げたまゝに放つてある塵埃、人が住まなくなつてがらんと見透しになつてゐる停車場、青苔で一面に蔽はれた儘に放つてある汽車の送水機、路には何時生えるともない草が既に緑に繁つて、鐵橋を架ける時に使用した下ロコの線のまだ取外されずに縦横に残つてゐるのも半ばそれに蔽はれて了つてゐるのが見られた。丸い



トロン、ティブルの中には、赤く錆びた鐵に雨水が溜つて、そこに金氣がきらきらと浮び、短かい長い草が罅隙を求めて縦横に蔓つてゐるのが佗しく覗かれた。あの大勢の群集や車掌見習達が終日忙しげに事務を執つた大きな賑やかであつた室もガランとして見透され、乗客の出口であつた柵の上の屋根は、半ば破壊されたまゝに放つてあるので、雨はそこからびしょびしょと降つて洩れた。

煉瓦を焼く竈も、今はすっかり荒廢されて了つてゐた。其處にはもう煙も立たなければ、人の住んでゐる氣勢もなく、唯、赤い半ば崩れかけた煙突が小高く恨めしげに降頻る雨の中に立つてゐるのを見るばかりであつた。否、もし人があつて其中に入つて行つたならば、更に荒涼としたそのあたりの眺めに驚かすにゐられないであらう。ところ／＼に散らばつた未製品の煉瓦、一かたまりになつて残された材料の土、竈の中には雨水が一杯に満ち溢れて、半ば燃えかけの石炭のそこらに散らばつてゐるさまは、人に竟に不成功に終つた人間の事業の悲しさを語らずにはおかぬであらう。其處にも草は既に一面に繁り合つてゐた。

でも、何うかすると、その降り頻る梅雨の中を、僅かに一條だけ残つてゐる路を求めて、番傘にばらばらと雨の音を立てながら、土手からRの渡頭へ行く村の人達の姿などがをり／＼見えた。

面瘍を病んで一夜の中に死んで行つた酌婦のゐた家のあたりは、既に全く空地になつて、壁の縦横に崩れ伏した中に、厠のあつたあたりの路がそれと残つてゐるばかり、そこから向うには田植を終つて十數

日を経た水田が青々として連つてゐるのが、次第に元の野に戻つて行くやうなさまを見せた。半ば壊しかけて梅雨に逢つたらしいM屋の二階建の旅館の片庇からは、凄じい雨が日に夜に小さな瀧津瀬のやうに亂れ落ちた。

そしてこのルウインの傍を、ルウインとも何とも思はないやうに、時間毎に汽車は沼のほとりから來て、緩い勾配にかゝつて、その荒れ果てたさまを眼下に見つゝ、斜めに雨を繪のやうに車窓にあしらひながら、いつも轟々としてT川の鐵橋へとかゝつて行つた。

## 六

教員のSは、枕流亭が出來てから間もなく轉任を命ぜられて、同じ郡中ではあるが、四里ほど離れた村にやられたので、いろ／＼な噂は耳にしながら、遂に此處にやつて來たこともなかつたが、ある日用事があつて、ふと其處を通つて見た。かれはその時の感じをその例の日記に書いたが、それは是非とも此處に引いて見なければならぬやうなものであつた。

(六月一日、晴、

予は驚愕と悲哀とを抱いてそこを過ぎたりき。否、悲哀なしに、何人かこゝを過ぎ去ることを得ん。

これ、單なる一光景にあらず。單なる田園の一出來事、または一消長にあらず。これ皆すべて、われ等



の人生に、歴史に常にをりく起り来る一大光景ならずや。否、人生の歴史とのみにはあらず、われ等の心のシインの中にも、常に日毎に起伏し來れる大なる光景ならずとは誰か言ひ得ん。榮枯盛衰の理、否々、單に榮枯盛衰の跡として一過眼し去るには、餘りに予には生々しく且つあまりに重大なり。予は煉瓦の竈の中を覗き見たりき。また予は停車場の寂としたる塵埃の中に彷徨したりき。また予はトロコの縦横に引残されたる跡をさまよひたりき。此處に於ては、一本一草と雖も、予に取りて深き意味を語らざるはなかりき。否、深き人生の意味のみにあらず、われ等の細かき心理の起伏をも示さざるものなかりき。此處に住みし人達は如何にせし。お玉や驛長やY屋の主婦やまたM屋の主人や、それ等はすべて如何にせし。更にまたそこに起りし悲喜劇はいかに。かの天下を騒がせしDとS子の情死はいかに……。予は不幸にして當時此地にあらざりしと雖も、その物語は當時いかに予に人生を暗示したりしぞや。更にまた今日のこの荒涼たるルウインは、いかに一層深き人生を暗示しつゝあるぞや。

予は一二時間そこを去ること能はざりし。予はロオマの廢址をさまよふ詩人以上なりき。奈良、ブルウジの廢墟と雖も、いかでかくのごとき生々とした印象を予の心に與へ得べきや。予は涕泗の横流し、悲哀の胸を塞ぐを留め得ず。現に今、これを記するに當りてすら、滂沱として涙流る。何となれば、これ人生なればなり。人間の運命なればなり。また予もつひに赴かざるを得ざる人生の歸趣なればなり。

り……………。

記念すべきこの日よ。

## 七

松原の中にある枕流亭の所在を示した廣告板——人の指で指さしたり何かしてあるペンキ塗に黒く字を書いたその廣告板は、あたりがさうしたルウインになつても、猶ほ處々に半ば傾いたり、曲つたり、また場所に寄つてはすつかり倒れて地に委して了つたりしてゐたが、それでも割合に月日の経つまでのあとを留めてゐた。その年の秋になつても、まだその板は一枚や二枚は土手の上に残つて見られた。勿論その女中や料理番はとうにゐなかつた。女將は役者と構曳してゐたことが知れて、一時、益田と手が切れたやうになつたが——何でもその家屋を手切の代りに女が貰つて、それを女が他の經驗のある女將に貸して、秩父の長瀬のやうにあらためて經營すると言はれてゐたが、それは矢張第三者の噂で、益田と女との間は今猶ほ切れず、その家屋は益田の所有で、女は打たれたり虐まれたりして後、此頃では東京の妾宅の方につれて行つて置かれてあるといふことであつた。枕流亭では、その隅の六疊の間だけ明けて、村の老爺がそこで自炊の留守番を長い間してゐた。

ところが、秋になつて、更に新しく別な人に由つて、矢張つれ込宿が營まれることとなつた。それに



は川向うのKM驛の方が距離にしては近いけれども、川を渡らなければならぬ不便があるので、主としてH町驛の方からの交通の連絡で保つことにして、一里半には少し遠い處を、路を直したり、新たに廣告の立板を處々に立てたりして、一時はツとするやうな開業祝をした。H町驛の前には、人の眼を惹くやうな美人を描いた大きな廣告板が押し立てられたりした。

しかしその結果の思はしくないことは、やがてあたりに知れ渡つた。月に五組六組では、いかに經驗のある人の經營でも、何うすることも出来ないらしかつた。二月ほどしてまたその家は閉ぢられて了つた。ほごしてT町へ持つて行かうなどと益田が言つてゐるといふ噂なども傳へられた。

もうその時分には、そこには、停車場も社宅も、その他の家屋も一軒も残つてゐるものはなかつた。塵埃の腐つた上には、草が繁り、トロコの線路やロウリングホンドを取去つたあとには、唯、地が低く残つてそれと指さされるばかりであつた。家々の礎の跡も何も彼もわからなくなつて了つた。すべて皆な埋もれ盡された。一時その持つてゐる土地を汽車の倉庫に使用するために借りられて、借りられた方ですら驚くほどの高い地代を月々拂はれるのを、思ひもかけない好い報酬として喜んでゐた寺の和尚は、それもすつかり駄目になつて了つたので、『それから思ふと、分福茶釜を持つた寺なんか好い。豪氣なもんだ。』などと頻りに愚痴をこぼしてゐたが、しかも、もしかひよつとかして、別荘地にでも借りるやうな東京の好奇者もあるかも知れないと思つて、一年そのまゝに寝かして放つて置いたが、さうした

目も遂に出さうもないのに斷念して、またもとの通り門前の小作に麥をつくらせることに約束した。

で、再び鋤を入れて見た小作の農夫は『いゝ地代も取上げたんべいが、何をやつたんだか、えらく堅い地所になつちやつて、あれぢや元のやうにするにや、一二年肥料でもうんと入れねえぢや駄目だ……。矢張あぶ蜂取らずだな、和尚さん。』などと言つて愚痴をこぼした。

## 八

一二年経つた後には、誰ももう此處が一度さういふ風に繁華な町であつたなどといふことに氣が附くものはなかつた。知つてゐるものは、益々其處が昔の一部に復歸しつゝあるのを見た。また知らないものは、此處は昔からこのまゝかうした野であつたとのみ思つた。

草は益々繁つて、残つた路も細く、果てはその路すら半ばそれに埋めらるゝやうになつた。唯、煉瓦を焼いた竈——煙突は既にひとり手に崩れて了つた——が赤く草原の中に、ある時ある人の事業の跡を語るものゝやうに夕日にあらはれて見えてゐるばかりであつた。枕流亭ももうなかつた。

時はまた靜かに經つた。

土手の上からは矢張美しいT川の流が見えて、冬は遠山の雪が金屬のやうに閃々と輝きわたつた。春はその草路の中のさゝやかな赤い花に露が置いて、天上の星の光が夜毎に來ては接吻した。雲雀はその



變らない戀の唄を高く空にうたつた。

河ぞひの春



## 河ぞひの春

一

『あそこにあの時るたんぢやないかしら？』かう思ふと、色々な疑惑が起つて、お園は頭の眩惑するやうなを感じた。と、つゞいて汚ない山の宿屋の間が見え、破れた襖が見え、日當りの好い暖い二階の欄干が見え、確かに旦那のものに相違ない見覚えのある鞆が見え、きら／＼と眩く日に光る山の雪が見えた。』しかし、矢張來てゐなかつたのかも知れない。いくら薄情だつてゐないといふ筈はない……折角、わざわざ遠くから山の中まで逢ひに行つたのも、いくら捨てられた身にしても……』かうつゞいて思つたが、しかしさうばかりは言つてゐられなかつた。いろ／＼なことがそれを裏切つた。それは旦那が失敗してかの女を十分に構つて呉れる餘地がなくなつたのも、今度のやうになつて行く原因の一つではあつたが、それよりも此方の山の中にあの色の生白い女が出來たのが、むしろその大きな原因であつた。お園はこの前やつて來た時始めてその女に逢つたことを思ひ出した。赫となつたことを



思ひ出した。あとで旦那の前で泣いて泣いて泣き盡したことを思ひ出した。

自分は好きであの旦那を持った譯ではない。初めは厭で、厭で爲方がない位であつた。それを何の彼  
のと言つて、すかしたり誑したりして、かうして離れ難い心になるまで引張つて来て置きながら、今  
更、捨て、了ふとは餘りに薄情な仕打である。と、不意に死んだ兒が思ひ出されて来た。『あれさへ生  
きてゐて呉れ、ば、旦那だつてかうまで私から離れて行きやしまい。』涙が急にお園の胸に押し上げて來  
た。

お園は山から平野の方へ出て來る小さな汽車に乗つてゐた。それは平野が細長く山の中に入り込んで  
ゐるやうなところで、夏は麻の畑の緑が行人の肩を没するやうな土地であつたが、今は二三日前に降つ  
た雪がところどころに、丘の巒やら、人家の屋根の裏やら、日蔭やりに残つてゐて、いかにもさびしい  
冬枯の眺めであつた。川原石原の潤くあらはれた谷に流れてゐる水の瀬が見え、半ば山に凭つた寂しい  
町の人家が見え、更に續いて淡竹の藪に午後一時過の日影のさしてゐるのが明るく見えた。汽車はガタ  
ガタ動きながら走つた。

お園の周圍には、此處等に住む荒れた唇をした女だの、荒くれた大きな手をした男だの、口の周圍に汚  
く、くさの出來てゐる孫をつれた婆さんなどが、ごたくと、貧窮と艱難と辛酸の縮圖を見るやうにして乗  
つてゐた。いろ／＼な話——そこから出來る石灰の話、段々押詰つて不景氣な年の暮であるといふ話、東

京も二三日前は大雪であつたといふ話、さうした談話が前からも後からも盡きずに聞えて來た。其間を  
寒さうに水燙をすゝる襤褸を着た老爺などもあつた。

お園はかなりに大きい信玄袋を抱へてゐた。その中には着替が二三枚、化粧道具が二つ三つ、講談本が  
二三冊、外に手廻りのものと、死んだ兒の寫眞とが入つてゐた。お園は一昨日の夜、多年世話になつた  
大きな温泉宿の上さんに散々意見をされた。

『お前がさうした勝手なことをするなら、もう私は知らないから、』と言はれながら、それをも振切つ  
て出て來たことを思ひ出した。雪の積つた中を、誰にも見送られずに、ひとりほつねんとして、あの停  
車場までの道を歩いて來たことを思ひ出した。僅かな旅費と、旦那に對する半ばは嫉妬、半ばは戀ごゝ  
ろ、またその他には兎に角行つて見なければわからないといふ心とを抱いて……。『もう國には歸れな  
い。』かう思つてお園は下唇を噛むやうにした。汽車は山合の小さな停車場に來てとまつた。

## 二

『兎に角もう一度あそこに寄つて聞いて見よう。ことに由ると、山の中には旦那はまだ來てゐなかつ  
たことが本當で、今日あたり東京から來てゐるかも知れない。來れば屹度旦那もあそこに寄るに違ひな  
いのだから。』



かうお園は續いて思つた。と、人の好い年寄夫婦の小商賣をしてゐるちんまりした日當りの好い店が眼の前に浮んで來た。お園は昨日もそこに寄つて旦那の消息を聞いたのである。山には旦那はまだ行つてゐないだらうといふのを、強ひて彼の女は出かけて行つたのである。その正直な年寄夫婦の言葉を信ずることが出來ないほどそれほどかの女は旦那を疑つたのである。お園は去年から今年の春にかけて、旦那に伴れられて、山の中に出懸けて行く時に、いつもきまつて其處で汽車を下りて、その年寄夫婦の店と一緒に寄つて行つたことを思ひ出した。

それは荒物などを商つてゐる小さな、庇の低い店で、旦那は昔からこの年寄夫婦を知つてゐて、——或はある物質上の力にも旦那がなつてやつてゐたことのあるやうな人達で、旦那が行くと、『Sさん、Sさん、』と言つていつもちやほやした。S町の停車場から、柵つたひに裏路を少し行つて、ごたぐした人家の間を抜けて行つたやうなところにその店はあつた。

昨日その年寄夫婦の言つた言葉などをお園は繰返した。『お前さんは矢張、國にちつとしてゐる方が好くはねえかね。何しろ、Sさんは此頃失敗つゞきなだから。』かうその老主婦が言つた言葉の中にも、自分に對する旦那のさめ心地や、薄情や、冷淡な態度やらがそれとなく窺はれるやうな氣がお園にはした。『旦那は一體、何う思つてゐるんでせう。私なんかもう邪魔物にしてゐるんでせうか。』かうお園はその老夫婦に訊いて見たりしたことを思ひ出した。

『兎に角、もう一度寄つて聞いて見よう。』

かう思つてゐる中にも、小さい汽車は、停車場に二つも三つも寄つたり、山裾のやうなところをぐるりと廻つたりして、次第に地平線の廣く見える平野の中にあるS町の瓦葺のごたぐと重なつて指さされるあたりまで出て來た。ところどころに残つた雪の上に、午後の明るい日は麗らかにさした。

それから一時間ほど經つた後には、お園は矢張昨日と少しも變らない停車場の柵に添つた路や、あづま下駄では拾つて歩かなければ通れないやうな泥濘の深い路の奥にある小さな店や、ごたごたと車や荷馬車の通つて行く裏街道や、小さな丸髻に結つたにこくした主婦や、日光が十分にさし込んで來ないのでそこらの物がすべてはつきりと見えないやうな暗い奥の六疊の間や、長火鉢の周圍のきちんと片附いてゐる向うに大きな佛壇の見えるやうな陰氣な空氣の中に、何うすることも出來なく行詰つたかの女を發見した。旦那は矢張今日もそこに來てはゐなかつた。またいつやつて來るといふあても得られなかつた。疑へば矢張山の中にあるかとさへ思はれた。

『もう出て來るには來なくつてはならない用もあるんだけど、何うしたかさ……。年内には是非出て來るだんべと思ふんだけど……。』かう慰め顔に主婦はお園に言つた。老主人は、今日は商用があつて、A町まで行つたとか言つて留守であつた。

『まア、ゆつくりして行かつせな……。折角國から出て來て、逢はねえでは行かれめいから。』



かう主婦はやさしく言つて呉れた。しかし、お園はさうしては居られなかつた。お園は困つて了つた。溜息がひとり手に出て來た。

## 三

お園は何うすることも出来ない身の上を感じた。此處に何時までもかうしてゐるわけには行かず、さうかと言つて今更國に歸つて行くわけにも行かず、旦那のあとを追つてこのまゝ東京へとも思はぬこともなかつたけれども、捨てられてゐるかも知れない男に縋るのも腹立しいやうな氣がして、そこに坐つたまゝぢつと深く考へ込んだ。

『いざとなれば、さうするより他爲方がない。』

かう思つたお園は、國を立つて來る時の最後の決心を繰り返した。いざとなれば、茶屋奉公でも何でもする。酌婦にでも何でもなる……かう決心してかの女は國を出て來たのであつた。大きな東北の温泉宿に十五の時から勤めてゐたかの女は、客扱ひには馴れ切つてゐるし、客の機嫌の取りやうも十分に知つてゐる。さうした境涯には大した苦勞もなしに入つて行くことが出来る身の上だつた。しかし、それは最後の、萬止むを得ない時の決心で、さうなるまでには、飽まで旦那の心をも探り、その話をも聞き、顔をも見た上でなければと思つてやつて來た。またさうした行詰つた境遇に陥ることを決して望んでゐるのでもなかつた。溜息がまた出て來た。

主婦は店が忙がしいので、碌々お園の相手になつてゐなかつた。慰めて呉れて、一日二日は泊つて行つても好いやうな口振は見せて呉れるやうなものゝ、さてその底には何處かさうはならないやうな冷いものが横はつて、或はやがて來る旦那のためにも、此處にかの女を泊めておくのは迷惑らしいやうなところもあつた。何うしてもかの女は此處から出て行かなければならなかつた。

『兎に角、私はT町へ行つて見ますよ、お上さん！』

かう言つてお園は立上つた。

『でも、一晩泊つて行つたら何うだね？ さうすれや、旦那も來るかも知れないし……。』  
かう主婦は愛想よく言つた。

お園はしかし出かける支度をした。かの女はもう少し前にふとT町を思ひ出した。そこには國から來てゐるお鶴といふ女がM屋といふ茶屋に奉公してゐる筈である。

『兎に角、其處に行つて相談して見よう。さうしたら、好い智慧も貸して呉れるかも知れない。それに、T町は此處から二里しかない。汽車で一町場だ……二三日してまたやつて來るのもわけはない。』かうお園は決心したが、出かける前に、ちよつと筆と硯とを借りて、かなり時間を費して、東京の旦那に宛てて手紙を一通書いた。



『ぢや、また、來ますから、旦那が來たら、私が來たことをよく仰有つて下さいな、お上さん。』  
『え、好いともな……。年内には來るにや來る筈になつてゐるぢやでな。』  
強ひて引留めもせず、主婦はお園を送り出した。

お園は漂浪の身の辛さを染々と覺えた。しかし何うすることも出來ないので、かなり重い信女袋を抱へるやうにして持つて、泥濘の裏路を元の停車場の方へとやつて來て、その前のポストの中にその手紙を投函したが、上りの汽車の時間には、まだ一時間ほど間があるのをかの女は見た。急にかの女はまだ午飯をすましてゐない身の空腹を感じた。かの女は外に出てあたりを見廻したが、その向うに『うどん、そば』と大きく障子に書いてある家のあるのを見出してそのまゝ其方へと歩いて行つた。

## 四

註文した鰻鮎の出來て來る間、お園の頭には種々の光景が掠めて通つた。旦那や、大きな温泉宿や、情の深いその上さんや、義理に責められて始めて旦那に逢つた夜のことや、懐妊して七月のお腹をしてゐた時、ゆくりなく旦那の細君がやつて來て、厭でも應でも逢はなければならぬハメになつて行つたことや、いよくその細君に逢つた時の辛さや、その細君が寛容で金を澤山呉れてお腹の子を大事にせよと言つた言葉や、かと思ふと、旦那と一緒に東京に行つて、大きな旅館に泊つて、春の花の賑やか

な夜を、あちこちと見物して歩いて行つたことなどが、今の辛い、さびしい、または腹立たしい不安な心と一緒になつて雜り合つた。傍の小さな硝子窓からは、いかにも停車場前らしい廣場に午後の日さしてゐる中を、商家の番頭らしい男が自轉車を軽く走らせて行くのが指さされた。

此處の亭主や上さんの働いてゐる厨の大きな釜からは、蓋を明けると共に、湯氣がぱつと白く颯つた。

『お待遠さま!』

汚れた前かけをして、髪をぼさぼささせてゐる十五六の娘つ子は、かう言つてやがて出來た鰻鮎を一つそこに運んで來た。

空腹であるのに拘らず、種々思ひ出してほんやりしてゐたお園は、これで漸く我に返つたといふやうにして箸を執つたけれど、しかも思ひ出せば出すほどその身の上が悲しくなつて來て、満足にはその鰻鮎すら咽喉に通らないやうな氣がした。お園は半ば食ひかけた鉢を下に置いては、人に怪しまれないやうに脇を向いて、ソツと手巾で涙を拭いた。

銘仙に絲織の羽織を着て、羽二重の腹合せの帯をしめて、流行おくれのフロラアショオルをして、信玄袋を抱へて、かうして一人此處にゐるといふことがお園には堪らなく悲しくなつて來た。

『もう一度、山の中に行つて、捜して見ようか?』など、突詰めてお園は思つた。

しかし何うやら鰻鮎を食つて了つた頃には、いくらかその悲哀は過ぎ去つて、『兎に角T町までは行つ



て見よう。』と決心した。

『なアに何うにかなる……。いくら思ひ詰めたところでしやうがない。止むを得なければ、お鶴さんに頼んで奉公口をさがして貰ふばかりだ。……旦那だつて、さうしたら、ちつとは可哀相だと思つて呉れるだらう。』かう思つてお園は帯の間から小さな財布を出してそして勘定をした。

お園は腹の中で、自分の持つてゐる金を数へて見た。かの女は十圓と少しばかりの金を懐にして國を出て來たのであつたが、汽車賃と、昨日山の中で泊つた旅籠賃と、その他にも何の彼のと言つてつかつてゐるので、もう八九圓しか残つてゐないのをかの女は思つた。此處等で、猶ほ一日二日、三日とぐづぐづして旅舎どまりをして居れば、もう國に歸つて行く旅費もなくなつて了ふのである。勿論、かの女にしては、國に歸つて行く考へはないのではあるけれども……。

そんなことを思ひながら、お園はその小さな財布を靜かに帯の間に戻して、そして出かける支度をした。

『難有う、お歸んなさい……』

かう後からかけられる賑やかな聲も、かの女に取つては、何だか悲しいやうなさびしいやうな氣がした。お園は信玄袋を抱へて、しほくとして停車場の方へと行つた。

## 五

S町からT町に來る間には、岸の淡竹の藪に日影の淋しくさしてゐる川があつたり、次第に潤くなつた平野を取巻いた山巒の雪のきら／＼と光り輝くのが遠く指さゝれたりした。お園は今朝出て來た山の雪の方を振り返つて眺めた。

やがてお園は田舎にしては大きい停車場を發見した。ペンキ塗りの新しい工場の煙突から盛に煤煙の渦巻き上るのを發見した。停車場から出て行つた眞直な路が、兩側に新開らしい人家を並べて、町の大通りへと突當つてゐるのを發見した。信玄袋を停車場に一時預けにして來たかの女は、いくらか身輕になつた氣分で、一町ほど此方まで歩いて來たが、そこに、店先に出てゐる牛乳屋の男がゐるので、M屋といふ料理屋の位置を訊いた。

『M屋？ それは此方から行く方が近い。』

かう言つて、その男は丁寧に裏道の方を教へて呉れた。

大きな寺の山門の前のやうな處を通つてお園は右に折れて行つた。冬の日影はもうかぎりひつゝあつた。淡竹の藪、小さな菜の畑、その向うに大きく高く聳えてゐる樺の大樹、M屋は丁度その樺の樹のかげになつてゐると言ふので、それを目當てに歩いて行くと、藝者屋の軒を並べてゐるやうな新道があつ



て、白粉の斑になつた、寒さうな顔をした若い妓が二人づれて何か笑ひながら向うからやつて來た。お園は立止つて訊くと、

『そこですよ。』

かう言つて一人の丸顔の方がその向うの二階屋の裏口の見えてゐる料理屋を指して教へて、そしてそのまゝ素氣なく笑聲をつゞけて行つた。

却つて裏口の方が都合が好いと思つたお園は、そのまゝ靜かに入つて行つたが、風呂場の細い赤い煙突から煙が眞直に颯つてゐるのと、物干棹に女の腰卷や足袋が干してあるのと、狭い野菜畑に淡く夕日が残つてさしてゐるのとの他は、しんとしてあたりには誰の姿も見えなかつた。案内を乞ふにも何だか氣がさしたといふ風にして、お園は暫しそこに躊躇してゐるが、やがてひよつくりそこに矢張女中の一人らしい銀杏返の女が出て來た。

『あの……。』

と言つてお園は近寄つて行つた。

『あの、此方に、お鶴さんツていふ人がゐる筈ですが……。』

女中はじろくくと捜すやうにお園の方を見て、

『お鶴さん？ もう、あの人はとうに居りませんよ。』

『え？』

『先月の初め頃までゐましたが、暇を貰つて行きましたよ。』

お園はがっかりして了つた。困つた顔をして立つてゐるが、

『國に歸つたんでせうか。それとも、此の近所にゐるんでせうか。』

『さア。』

と言つてその女中はまたお園の顔を見て、『つい、此間まで足利の方にゐるツて言ひましたけども……何うしましたかね。』問を置いて、『しかし國には歸つたんぢやありませんまいよ。此處を出るにもわけがあつたんですから。』女中はかう言つて家によく來る客と出來て、その客に伴れ出されて行つたらしい話をした。

お園は困つて了つた。漂浪の運命はいよゝゝかの女に近寄つて來た。

## 六

お園はその夜自分を停車場前の旅舎の一間に發見した。

それはかなり大きい新築の旅舎で、そこには瘦せた神経性の顔をした上さんや肥つてでくぐした女中などがゐる。思ひ餘つて止むを得ず一夜はそこに過すべく決心したかの女は、廊下から二階に上つて



その突當りの室に案内されて、『なるやうになれ』とは思つたが、しかもじつとして落付いてゐることは出来なかつた。かの女はその櫛の木の蔭の料理屋でその上さんからもお鶴の話を書いたことを思ひ出した。その上さんが莞爾したお世辭の好い女であつたことを思ひ出した。餘程その時その上さんの情に絶つて、奉公口をさがして貰はうかと思つたことを思ひ出した。しかし勝手にさういふことをしては、假令此方に反抗の念は燃えるやうにあつたとしても旦那に對して濟まないといふ心が口まで出かゝつたその言葉を押へさせた。

旅舎に來ると、すぐに、かの女は電報用紙を女中から貰つて、『スグコイ』といふ文句に旅舎の名を入れて、そして旦那にあて、打つて貰つた。しかしことに寄ると、旦那の細君がそれを中途で奪つて了ふといふ懸念があつたので、旦那の常に行くその乾兒見たいな男の許へも、わかるやうに、またすぐそれを旦那に知らせて貰ふやうに、金のなくなるのを氣にしながら、かなり長い電報を打つた。

兎に角此處で待たう。かうお園は決心した。勝手に茶屋奉公などをするのはいかにしても旦那に對してよくない。あてつけがましい仕打である。捨てられたものなら、邪魔物に此身が本當になつてゐるなら、それならそれで、ちやんと一度逢つて、綺麗に話をつけて別れるなら別れる。それが本當である、自分はまた旦那のものである。旦那から暇が出たわけではない……。かう思ふと、それが未練であると、一方にはそれを打消す考へが熾んに起つては來るけれども、しかも力強いある捉へどころを得たやうな

氣がして、いくらかかの女はほつとした。今の場合、専念に旦那に絶る方が本當だと思つたが、さう思ふと、あつい涙がほろ／＼とかの女の頬を傳つて流れた。

『これほど私が思つてゐるのに……』

お園はあとからあとへと涙が盡きずに溢れて來るのを禁じ得なかつた。脇に人目がないのを幸ひにお園は泣いて泣いて泣きつくした。

しかしその悲哀もやがて過ぎた。かの女は自分の顔を廊下のところにある大きな鏡に映して見たりしてゐるが、今度は手拭を取つて、女中に案内して貰つて、奥の梯子段の下のところにある風呂場へ行つた。狭い風呂場には、白い湯氣がぼうつと籠つて、冷たい體をその中に浸けると、焼けた鐵砲に湯の染みる音がジイとした。

扉をあけて、さつきの肥つた女中が、

『流しませうか。』

と言つて半身をそこに現はした。

『好いですよ。』

『でも……。』

『好いの、好いのよ。』流して貰へばいくらかやらなければならないといふ腹もあつて、お園は強ひて



それを断つた。

『では御のつくり。』

扉を閉めて女中は出て行つた。

ふと氣がつくと、戸外には此處等に名物の西風が急に吹き出したとおぼしく、庭の木の葉のガサコソする音や、雨戸や硝子戸のガタガタと動く音が凄じく且つさびしくあたりに聞えた。

## 七

十五までは大きな城跡と、四面を遶る山巒と、雪の深い人家の庇の長い街道とを持つた町に何も知らずに生ひ立つたが、それから他郷に出なければならなくなつたかの女は、次第に種々な人情の厚薄や、表裏や、欺騙や、淫蕩の空氣などに浸るやうになつたことを思ひ出した。それから二十四の今日まで、考へて見ると随分種々なことがあつた。三味線や鼓の音の夜中まで聞える温泉場、袂を取つて町の通りを急ぎ足に歩いて行く藝者達、無邪氣な娘心について知らずに扉をあけて入つて行つた狭い浴槽の中にゆくりなく見た二人の若い男女、いやらしい話ばかりをわざと面白がつてするやうな中年の按摩、かの女のゐた大きな温泉宿の主人にも、妾が隠して圍つてあつて、始終上さんが嫉妬をやいてゐるやうな空氣の中に娘から女になつたが、上さんに可愛がられてゐた爲めに、内々には客を取つたこともあり、男に惚れたこ

ともあつたにも拘らず、そこらに見るやうなひどい女達の群にも入らずに、何方かと言へば堅い女中の一人としてそこに勤めてゐることが出来たが、しかし、かの女にもいろいろ戀の經驗はなかつたか。男心の浮氣で、厭きつほくつて、それで女を自由に玩弄具にしないで置かないやうな悲しい經驗、またはいくら此方から情を見せて惚れて見ても、何うにもならない様な辛い經驗、厭で厭でしやうがないやうな男に執念く追廻されて金も何もいらなくなつて遁げ廻つた怖しい經驗、ちよつと惚れて一夜身を任せてそしてまたすぐ互ひに忘れて了つたやうな經驗、さうした經驗はかなりに多く身に纏はり絡み附いてはゐるなかつたか。旦那を持つやうになつてからも、始めの中はその情だけでは物足らなくて、ひそかにかくれて男に逢ふやうなことはなかつたか。またはかの女のために身を持ちくづして朝鮮くだりまで落ちて行つた男はなかつたか。かの女は長年一緒につとめてゐたお廣といふ體を男に貸すことなどは何とも思つてゐない女中の言葉などを今でもをりくは思ひ出した。『お錢にさへなれば好いんだよ、生中、人情を持つたりするからいけないんだよ。』かうそのお廣は常に言つた。

しかしその人情は、細かに、絶えず、一のものなら一、二のものなら二、三のものなら三といふ風にかの女の心に、體に蘇つて來てはゐるなかつたか。酬いられて來てはゐるなかつたか。かういふ風に旦那の情が忘れられなくなつたのも、又かうして知らぬ他郷に突詰めた心を抱いて悲しく彷徨ふやうな運命に陥つたのも、皆さうした細い心と體の反射乃至報酬から來てゐるのではなかつたか。捨てた男の恨みが



そこにあるのではなかつたか。また旦那の細君に辛い思ひをさせたその嫉妬が同じく其處に渦を巻いてゐるのではなかつたか。かう思ふと、其處にも此處にも、好い加減にやつたことが一つ一つ蘇つて来て、今のかの女を執念く取巻いて来るやうな氣がした。

山を越してやつて来る羽二重屋さん達の豪華な大氣な風俗、近いF市から自動車でやつて来る仲買商の賑やかな豪遊、女でも男でも、言葉から氣分まで何も彼も同じなつかしい國氣質で、カと言へばツウと通るその温泉場の空氣に比べて、この知らない平野の人達の生活は、いかにかの女に疎々しく且つ冷めたくは感じられなかつたか。かの女は今更のやうに、夜の更けゆくにつれて賑やかになつて行く大湯のさまなどを繰返した。

ふと廊下を通つて襖をあけた女中は、一通の電報を持つて來た。お園は急いで受取つて封を截つたが、それは旦那の乾兒に當る人の方からやつて來たもので、『ユクヘチサガシテシラセル』と書いてあつた。矢張、結句何うにもならないやうな電報であつた。しかしこれで見ると、山の中に旦那の行つてゐないのは事實らしく思へた。

## 八

旦那の方へ打つた電報の返事は竟にやつて來ずに、夜は朝になつて行つた。終夜吹き荒れた平野の西

風、硝子戸のガタガタと動く音や、屋根の庇にひゆうひゆう鳴る響や、そこはかたく枯葉が轉がつて行く氣勢などに雜つて、辛い悲しい心や、腹立しい思ひや、戀心や、これからの生活に對する不安や、何うにでもなるやうになれと言つたやうな自暴氣味に近い氣持や、時々赫と燃えるやうに起つて來る嫉妬や、さうしたものが渦のやうに亂れ合つて、眠つたと思つては覺め、覺めたと思つては眠つたといふ風に幾度か轉輾反側して、曉近く疲れてぐつすり眠つたが、再び目が覺めた時には、もうちゃんと兩戸が明いて、日が明るく室内にさし込んで、火鉢にはもう火がちゃんと來てゐた。あれほど凄しく吹き荒れた風もいつかすつかり落ちて、裏の田圃には、霜が白く置き渡してゐるのがひろくと靜かに見渡された。

氣は氣でなかつたけれど、しかし待つて見るより他爲方がなかつた。

朝飯をすませてから、かの女はもう一度電報を旦那に宛て、打つた。しかしそれでもまだ安心が出來ないので、二番の汽車で荷物を旅舎に置いたまゝにして、S町の老夫婦の店にまた出かけて行つて見たけれども、しかし矢張旦那の消息は遂に得ることは出來ずに、お園はそこから引返して來た。

旅舎——その停車場前の旅舎は、今はかの女の運命の窮まる場所としてその前にあらはれて來た。『留守に何にも來ませんでしたか。』歸つて來るとすぐ、かうお園は女中に訊いて見たが、電報も手紙も何も來てゐなかつた。旦那はいよくかの女を捨てた。十に八九まで。かうしたことになりはしないかと危



ぶみ且つ惑はれたが、今はそれが疑ひなき事實としてあらはれて来た。何うにもならないからと言つても、何うにかしなければならぬハメになつて了つた。

お園は信玄袋の中にある着類を頭に浮べた。金がいよく足りなければ、しやうがないから、譯を話して着物でも何でも實に置くより外爲方がないと思つた。お園は漸く決心した。恥辱を忍んで、旅舎の上さんにその話をした。次手に、何處か茶屋奉公をする好い口はないかとも訊いて見た。

『そんなことをしないで、何とか東京から便りがありさうなもんですがね。』  
かう旅舎の上さんはお園の顔を見ながら言つた。

『でも來るか來ないか知れない便をいつまでも、待つてゐるわけにも行きませんから。』

『堅氣の茶屋奉公は、ちよつと、此處等では面倒で……』かう言つたが、お園が身の生立やら、大きな温泉場の旅舎に長年つとめてゐたことや、その上さんのことや何彼を話してきかせると、いくらか上さんも信用して來たらしく、後には、『まア、もう少し便りを待つて御覽なさい。』など、深切に言つて呉れた。

お園は満更ではない自分の容色が、また茶屋奉公をした経験があるといふことが、かの女のためにある新しい道を開く有力なたつきとなることを思つた。その話を上さんに打明けてから、かの女はいくらか重荷が軽くなつたやうな氣がした。

一日はまた經つて行つた。廊下を掃除する女中などにもいくらか懇意に口をきくやうになつた。入口のすぐ傍になつてゐる廣い厨や大きな釜から白く颯る湯氣や、そこらに散らばされてある膳椀や、赤い襷をした女中や、廊下の突當りにある大きな鏡や、上さんとは大分年が違ふらしい半禿げた主人や、さうした中に、かの女は何うなつて行くかわからない自分の運命を眺めた。冬の日の寒い街道を馬や車や運送馬車などがガタガタと通つて行つた。丁度市日で町は賑やかであつた。

## 九

其處でお園は三日暮した。

半ばは旦那からの便りを待ち、半ばは何うしても新しい道の方へ出て行かなければならない身の運命を覺悟するやうな心持で、或は燃えたり、或は沈んだり、時には却つて浮々するやうなこともあつて、わざわざM屋まで出かけて行つて、その上さんに奉公口を頼んで見たりなどしたが、旦那からの便りは竟に竟にやつて來なかつた。

お園は後には、旅舎の上さんの處に行つて、かうしたハメになつた身の一伍一什を話したりなどした。幸ひに旅舎の人達は思つたより深切で、拂ふべき旅籠賃すら十分に持つてゐないかの女をも、別に厄介扱ひにはせず、待てるだけ待つなら待つが好いし、いざ何うしても茶屋奉公に出るといふなら、その口



のあるまで落附いてゐる方が好いといふ口吻で上さんも主人も話した。かうした稼業をしてゐる人達だけに、お園の身の上話もすぐ眞面目に飲み込んで呉れて、『困つた時はしやうがないよ。矢張お互ひつこだもの……。旅でさういふ眼に逢ふ位困ることはないもんだからね。』など、上さんはやさしく言つた。懐に入つて來た窮鳥ではあり、それがまた美しい何うにでも役に立つ毛色を持つた小鳥であるからではあらうけれど……。

『それやね、家にゐて貰つても好いにや好いんだけど、今ぢや、手も十分あるし、もつと好いところもあるかも知れないからね。』など、上さんは言つた。

お園は自分の生ひ立つた土地とは違つて、スラングにも一種の調子があり、性急にやつて來て、性急に酒を飲んで、そして濁聲に唄をうたふ人達を見た。また女は女で、しやしやきと尻をからげて、廊下の拭き掃除をやつたり、臺所を働いたり、泊り客に向つて、立つたまゝ早口に物を言つたりするやうな人達を見た。『色氣なんかありやしないよ。もう食氣だよ。』さうした女達は、こんなことをづかづかと客の前で平氣で言つた。一夜は隣りの一間に藝者が二人も三人も來て、機屋の日那らしい中年の客を取巻いて、ガチャガチャ三味線を弾いたり、酒に酔つたり、唄をうたつたりしたが、二階のはしごのところでは微醉機嫌になつて、袿をほらほらさせて、『お上さんそんなことは厭だよ。』など、捨臺辭で上つて來るその藝者の一人にお園はぱつたりすれ違つたりした。

三味線にも何にも合はない唄を平氣で唄つてゐる肥つた金の有りさうなその客のうしろ姿をもお園は見た。

それとなく女中に訊いて見たところでは、そのあたりでは、茶屋の女中で一面だるまであるものが多く、それもわづかの金で客の意に従ふものが多いらしく、さういふ奉公なら、いくらでも右から左へと口が澤山にあるけれども、堅い女中をさがすやうな旅館は滅多にないらしかつた。それに、此處等あたりでは、大抵の旅館は、料理屋を兼業にしてゐて、藝妓は皆な袿を取つて平氣で入つて行つた。

『それでも此處の家なんかまだ堅い方なんですよ。』  
などと女中は言つた。

年の暮の既に眼の前に迫つて來てゐるのもお園にはある焦燥と不安とを感じさせた。若し日那がひよつくりやつて來はしないか、そして今までの心配がすっかり跡方もなく拭はれて了ひはしないかといふやうな氣が絶えずして、お園は下りの汽車の來る度に、煤煙をひろい野や松原に靡かせてやつて來る長い列車を何遍となく眺めた。

## 十

A町から客を乗せて來た四十先の車夫は、賃錢を貰つてから、汗を拭きながら、上さんのゐる帳場の



方に入つて来たが、

『頼まれて来たんだが、お上さん、好い女中が一人なかんべか。』

『何處だえ？』

『N屋だがな。此間から一人しかるねえんで、困つてゐるんだが、今日もそんなことを言つてゐたがな……。』

『さうねえ。』

『暮と年始を控へてゐるでな、何うしても早く欲しいつて言ふんだがな。』

『いくらもありさうなもんだがね。A町に……。』

『ところが、だめだよ。それも、何でも御座れなら、いくらもあんべいが、矢張、家風に合はねえぢやいけねえもんだで……。』

『それはさうだねえ。』

其時、丁度外から入つて来たお園は、それに耳を留めて、

『何處です、それは？』

『A町つて、これから三里ほど田舎だけでもね、』お園のことが丁度上さんの胸にも浮んで來てゐたので、『さうさね。お前さん、本當に茶屋奉公する氣なの？』

『だつて、しやうがないんですもの……。もう東京からの便りも當てにはなりやしないし、年の暮ではあるし、いつまでもかうしてお世話になつてゐるわけにや行かないし、兎に角一度さうでもしなければしやうがないんですもの。そこはこの町のやうなところですか？』

『此處とはぐつと小さな、もつと田舎の町だけでも、却つて靜かで好いにや好いかも知れないがね。』

『では、お世話をして戴かうかしら？ 證人には、S町の人でも、また國の温泉場の上さんでも何でも立てますから。』

『さアね。……お前さんが、さう決心がついたら、好いかも知れないね。』

上さんはかう言つて、車夫にその話をした。

車夫はじろく〜とお園を見てゐたが、上さんの話を聞き終ると、『さうけえ。お前さんが行くつて言ふんけえ。温泉場にゐて、客扱ひにも馴れてゐるんだね？ それはよかんべ。』

『しかし……。』お園にはちよつとその旅舎のことが氣になつたといふやうに、『しかし、だるま屋ぢやないんですねえ？』

『だるま屋？』正直な車夫は意想外な質問といふやうな顔の表情をして、『だるま屋？ そんなところにや、俺だつて世話はしねえ。なア、お上さん。A町のN屋ツて言へや、こゝらでも通つてゐるやうな堅い家だアな。それに上さんだつて、旦那だつて、また隠居だつて、皆な好い人ばかりだアな。なア、



お上さん。誰だつて知つてるア。だからあそこにや、昔から長くつとめてゐるやうな女中が多いや。それや、心配はねえ。そんなところには、この俺だつて世話はしやしねえから……。」

『N屋なら、家には不足はないけれどね。』

かう傍から上さんも言つて、『唯だ、さびしいのはさびしいね。此處からくらべると、ぐつと田舎だから。』

『でも、お上さん、A町は好いところだぜ……。田舎は田舎だけでも、世間離れがしてゐて、圍ひものなんかがあるには好いところなんだから……。存外、あれで面白いところだよ。』

『さう言へばそれもさうさね。』

意味あり相に上さんは笑つた。

## 十一

『客筋は？』

お園はつゞいてきいた。

『来るお客様え。さア、何うツてきまつたこともねえが、居まはりの旦那衆がおもだんべい。』

『おもに、百姓？』

『百姓ばかりぢやねえ。不思議なところだよ、A町は——。あつちこつちから好い客が遊びに来るやうな處だアなア、お上さん。K町からも川を渡つて来るし、I町からも来るし、あそこは何でもかくれて遊ぶには好いところかも知れねえ……。だから、藝者なんかでも、あそこに行きや大騒ぎをされる。そら、この町に出てるた田舎廻りの女優なんかをしたことのある、そら、何ツて言つたつげな、さうさう、松葉、あの姐さんなんかでも、ちゃんとした旦那があつて、それでゐて、あそこでは賣れるんだからな……。色氣ぬきて賣れるんだからな。それに、町の旦那衆方もさびしいんだんべ。宴會でもしやうといふ時に、そのお酌でもさせやうツて言ふものが、だるまぢやしやうがねえんで、堅けれや堅いほど大騒ぎをされる處だアな。この姐さんなんかだつて、堅くせえしてゐれや、好いことが屹度うんとあらア。この町や、足利や桐生あたりぢやちよつとねえことがあらア、なア、お上さん。』

『それはさうだね。容色さへよけれや、珍らしがられるところだね。何しろ、妾新道なんて言ふところがあつて、彼方此方の旦那衆が女を圍つておくやうなところだから。』

『それに、そんなことを言つちや何だが、そのN屋つて言ふのは、川魚料理が旨いんで名代な家だな。ちよつと、この町なんかには、あそこ位旨くつて安い料理を食はせる家はあるやしねえ。何しろ、隠居も、今の旦那も、若い時は、研究に、あちこちの料理を食つて歩いたやうな人だてな。』

『家としては申分はないよ。』



かうまた上さんは言つた。

『それぢやお世話をして頂くことにしませうよ。』かうお園は言つたが、何となく淋しい悲しい氣がして、いよく旦那と離れて、一步別に踏み出すといふことが大きく胸を塞ぐやうにした。しかし、今になつては、何うすることも出来なかつた。

『で、お金は貸して呉れるでせうか、少しは——』

いくらか躊躇したやうに、顔を少し赤く染めてお園が言ふと、

『それや、話せや少しは貸して呉れべいと……大抵は女中はさうだてな。』

かう車夫は言つた。

『澤山もいらなけれど……。此處の勘定もしなければならぬし、少しは小遣だつて持つてゐなければならぬから。』

『さうどこぢやねえ……。』車夫はかう言つて、更に上さんに向つて、『好かんべな。』

『お前さんが、それで好むなら、別に苦情はありやうはないよ。』

かう上さんはお園に言つた。

『ぢや、さうしませうよ。證人はS町の人でも、誰でも立つて貰ひますから。』

『ぢや、いくらべい、借りていんだな。』

など、車夫は訊いたりした。

暫くして、なた豆のやうに叩き潰した烟管を煙草入に藏ひながら、

『これは好かつた。N屋でも、旦那が喜ぶだんべ。好いところに來合せた……。なあに、相談つて言つたつてわけはねえ……。すぐまとまらア。何しろ、なくつて困つてゐるんだから。ぢや、姐さん、好いね。話がきまれや、明日、俺が一人でか、それとも旦那を伴れてかして迎へに來るア。好かつた、好かつた……。』かう言つて車夫は喜んで出て行つた。お園はさびしいやうな氣がしてそのあとを見送つた。

## 十二

その翌々日の朝早く、お園を載せた車は、T町からA町に通ずるさびしい街道をしづかに轆つて行つた。

兩側の松林には、朝日が晴れやかにさし透つて、霜に伏した草藪や萱原にはをり／＼小鳥の靜かに枯葉を踏む氣勢がした。並んで立つた林の途切れた間からは、雪に光る遠い山々がさながらパノラマでも見るやうに美しく見渡された。

お園は昨夜までも、今朝までも旦那からの電報なり手紙なりの來るのを待つたことを思つた。たうと



うそれがやつて來なかつた時のさびしさと悲しさを思つた。かの女は竟に旦那から離れて、自分ひとりて自分の運命の道に上つて來たことを思つた。

『随分、さびしいところね。』

かうお園は車夫に聲をかけた。

『一體、そこまで何里あるの？』

『三里にはたつぷりだんべ。』

『その間に、町はないの？』

『村はあるが、町はねえ。』

『T町の半分位はあるの？ それでも……。』

『とても、半分なんかねえ。三つ一つも何うだか……。何しろ、戸数が二百軒位しかねえんだて。』

かう言つてお園は黙つた。風はない日であつたけれども、車の走るにつれて、朝の寒氣は刺すやうに顔やら手足やらに染みだした。コートを着てゐない身の、フロラアシヨオルを何遍も首に巻きつけるやうにしても、それでも寒さに體が震へた。

昨日、A町のN屋の旦那がやつて來た。そして一緒にS町に行つて、荒物屋の老夫婦に無理に頼んで

證人になつて貰つた。その時にも、もしも旦那が來てゐるのではないか。此處に寄つて山の中に行つたのではないか。かう疑つて、注意していろ／＼あたりを見たりしたが、矢張さうした様子は何處にも見出されなかつた。『まア、しやうがねえ。そんなことをして、あとでSさんに何とか言はれるかも知れねえけども。』かう言ひながら、老主人は澁々ながら判を捺して呉れた。

『旦那が私のことをまだ少しでも思つてゐて下さるんなら、かうして私が困つて奉公に出たことをよく言つて下さい。決して勝手に、さういふ眞似をしたんぢやないんですから。』かう言ひ置いて出て來たことを思ひ出した。

今日はもう暮も押し詰つた二十九日であつた。それにしても、國を出てから他郷に行き詰つた身の上が、何うにもならず、かうして悲しい奉公の身となつたことを思はずにはゐられなかつた。いつかの女はかうしたところにかうした思ひを抱いてさびしく車に揺られて行くと思像したであらうか。またかうして浮草のやうに他郷から他郷へとさまよつて行く身にならうと思像したであらうか。その前途には何がかの女を待つてゐるであらうか。幸福かそれとも不幸か、それとも益々漂浪の深みにと落ちて行く運命か。それとも亦行き違ひで旦那は知らずにゐて、折角そこに行つてまだ幾日も経たないのに、金を持つて迎ひにひよつくりやつて來るやうなことはありはしないか。

松原が盡きて、朝の烟の低く靡いた、ところ／＼に藁葺屋根の點綴されたさびしい村落があらはれ



て来たと思ふと、路は次第にその村の中に入つて行つて、矮びた大根の繩につらねて干されてあるくづ屋の軒(たばこ)と書いた赤い小さな板の看板が出てゐるばかりで、びつしやりと大和障子の閉められてあるやうな店、鐘が一つさびしうに吊されてある半鐘臺、朝日の日當りに二三人子供の出て遊んでゐる村のお宮、それが盡きると、再びまた前と同じやうな美しい日影のさし透つた松原が長く長く續いた。

## 十三

その松原の中を近路をして行くやうなところを通つたり、それから潤々とした麥畑の方へ出て行つたり、遠い路を朝早く小學校に通ふ子供の群に逢つたりして、次第に車はA町の方へと近づいて行つた。

『町には茶屋は何軒あるの?』

かうお園はまた車夫に聲をかけた。

『大きな茶屋はまア、N屋一軒だアな。他にT屋といふのに、松澤といふのがあられるけれど、だるま屋だてな。』

『そのだるまは餘程ゐるの?』

『だるまは随分ゐるな……。あの町にしては多すぎる位ゐるな。十五六人もゐるべいかな。』いくらか足

をゆるめるやうにして、『でも、皆な百姓相手でしやうがねえのさ。』

『お上さんは何んな人?』

『い、上さんだ……。名代の働き者だアな。あそこちや隠居夫婦に旦那夫婦に、それに今年の春、總領の娘つ子に養子を取つたで、三夫婦揃つてむつまじく暮してゐる家だてな。もとはな、町は船附でな、御維新前なんかには、江戸に行くには皆そこから川舟で下つて行つたで、賑かな處だつたんだな。N屋はその時分からある舊い家だアな。今の隠居なんか、それは通人で、酸いも甘いも何も彼も呑み込んでゐるやうな人だアな。若い時は芝居の囃し方をして、あつちこつちを打つて廻つて歩いたさうだが、太鼓なんか實に旨かつたさうだ。三味線でも何でも上手なもんだ。今でも、何うかすると、若いものと一緒に唄ふが、聲も節も旨いもんだ。』

『いくつ位になるの? その隠居さんは?』

『七十二だんべ。それから思ふと、今の旦那はまア堅い方だ。これはまたしつかりしてらア。』

『車屋さん、昔からA町のものなの?』

『なアに、このちよつと先の在のものだよ。中年にいろくくなことをしてすつちやつてな。もとはそれでも田地の一二町はあつたんだがな。何うもしやうがねえんさ……。でも、A町に来てから、皆な可愛がられてな。今ちやそんなに苦勞もなしに、かうして何うやら彼うやらしてるだ。』少し走りながら、



『姐さんなんか、地道に堅くやるだよ。さうすれやA町は好いところだて……。』  
次第に松原は開けて、ひろくとしたさびしい野があらはれて来た。もうA町も近くなつて來てゐるのがそれとお園にも知れた。村落の所在を示したこんもりした杜。その中に一本際立つて高い樹があつて、鳶が二三羽のんきさうに舞つてゐるのが見えた。

『もう、ぢきね？』

『もう、あそこに高い樹が見えべい。あそこの傍に竹藪があらアな。あそこを出ると、もう町の入口だ……。』

段々その竹藪は近寄つて來た。赤い腰巻を見せた田舎娘の二人づれが、車上のかの女を振返つて見て行つたり、小學校の先生らしい脊廣姿が自轉車を走らせて行つたりしたが、やがて町の入口らしい人家がほつ／＼その前にあらはれ出した。

お園の眼にはやがてさびしいさびしいA町が映つた。成程T町やS町とは比べものにならない、これでは町と言ふよりも大きな村といふ方が好いやうな、藁葺と瓦屋根との交錯した、ところ／＼に齒の抜けたやうに野菜畑や空地などのある、さうかと思ふと、大きな塀を取り廻した田舎の金持の邸宅らしい家のあつたりする町が……。お園はさびしいと悲しい心持が簾々と胸を塞ぐやうに集つて來るのを感じた。

車はそのさびしい町の通りを少し行つてそして右へ曲つた。

## 十四

草の枯れた大きな堤防のやうなものが眼に映つた。續いて家並の外れにさう大して立派でない二階屋と、その入口の大和障子と、松の緑の靡いてゐる古い門に軒燈の出でゐるのが映つた。そしてその門には新しい年を迎へるための松竹の注連飾が既に立てられてゐるのが映つた。

その門のところまでは行かずにそこで梶棒を下した車夫は、汗をも拭かずに、其まゝ大和障子を明けて入つて行つた。と、女の顔やら男の顔やら、上さんらしい人や、その隠居だと一目でわかる肥つた莞爾した人や、めづらしさうに此方を見でゐる小僧やら、上櫃のところにおいてある自轉車やら、野菜の一杯入れてある大きな籠やら、客を迎へるための眞鍮の火鉢やら、壁にかけてある三越の美人の古い廣告のビラやらが、一緒になつてごた／＼とお園の眼に映つた。そしてその入口の左の方には、柵と板の間と釜とを持つた廣い厨がそれと指さゝれて、鮪の半身の吊してある向うに湯氣が白く颯つてゐるのが覗かれた。

そのごた／＼した中から、やがて主人の顔があらはれた。お園はその顔をのみたよりにするやうにしてやがて全く知らない旅舎の人達の中に入つて行つたが、次第にその一緒にごた／＼とした人達の中か



ら、隠居は隠居、上さんは上さん、召使は召使、養子は養子といふ風にはつきりと映つて來た。かの女がいろいろに挨拶したり何かしてゐる傍を、十八九位の赤い襷をかけた女中がじろく横眼で見ながら通つて行つたりした。

車夫は自分が口入れをしたものだけに、何彼と中に入つて挨拶したり、お園の爲めにその身の上話の一部を話したり、『本當に、此處の衆は、皆ない、人ばかりだから、安心して、堅く勤めなさい。』と言つたり、後には將來一緒に働く筈のその女中のお光に引き合せたりした。

『俺が家はすぐ通りを右に曲つたところだ、親元のつもりで、用があつたら何でも言つてきさつせい。』と深切に言つたりして、そして空車を曳きながら歸つて行つた。

店から大きな階梯の下を通つて客の室の方に出て行かうとするところに、障子などのところ／＼破れた、畳もさう大して新しくない六疊の間があつたが、そこはお光や旅舎の遠い親類に當る十五になる娘ツ子などのゐるところで、客もなく用事もない時には、養子をした此家の娘なども交つて裁縫をしたり何かするやうな一間であつたが、お光に教へられて、お園はその押入の中にその持つて來た信女袋を入れたりなどした。

『正月になれや少しや忙しいだらうけれども、今ぢやそんなに客はねえよ。』  
かうその女中のお光は、矢張りくらか訛のある言葉で言つた。

『お前さん、この近所？』

『いゝえ、私は沼田……。』

『沼田ツて、聞いたやうだけでも……、遠いところなの？』

『なアに、一日あれや行ける處だよ。』

段々室のさまや家の様子などもお園には飲み込めて來た。長い日當りの好い廊下に面してあつさりとした庭があり、その庭の向うに四目垣があり、そのまた向うに野菜畑があつて、それを隔て、大きな高い堤防らしいものが長く續いて見られた。離れ座敷は奥に一つ、野菜畑に添つて一つあつて、客が其處に來ると、女中は踏石づたひに膳や何かを其處に運んで行くやうになつてゐた。お園はお光に訊いた。

『あれは土手？ あの向うには何があるの？』

『あの向うは川だよ。大きな川だよ。』

『さう？ 川なの？』

お園は始めて知つたといふやうにして明るく日影の當つたその堤防の方を眺めた。

十五

田舎は大晦日もさびしく、町では松竹を立てたり注連飾をするけれども、近在は多くは月おくれの正



月をするので、町に買物に出かけて来るものとてもなく、朝の霜が白く小注連に置いてあるばかりで、さびしく年は暮れて行つて来た。

隠居の上さんが若いので、それを主人の上さんと間違へたり、またその上さんが召使ひに雑つて、身装も構はずせつせと働いてゐるので、来たてには、知らずにぞんざいな言葉をかけて、お光に注意されて、『まあさう、あの方が旦那のお上さんの？』と言つたりしたが、次第にさうした空氣にも馴れて、旅舎の人達の生活にも段々はつきりと浸つて行くやうになつて来た。

臺所の一隅にある二つ並んだ大きな竈、その傍の大和障子をあけて外へ出ると、そこにはポンプ仕懸けの井戸があつて、それを押す度に、綺麗な水が、瀧津瀬の様に手桶やら流しやらに亂れ落ちた。午前の十時頃には、いつもきまつて、風呂の水を汲むことになつてゐるので、そこから竹の樋を長くわたして、そこを通つて客間のある長い廊下に面した庭の方へ行くには、何うしてもその下をくゞつて行かなければならないやうにして、女中達が代る代るせつせとポンプを押すのであつたが、来た翌日からは、お園は襷がけになつて、赤い腰巻を見せ、色の白いすらりとした姿をあたりに見せて、お光や親類の娘つ子と一緒になつて、そこでポンプを押した。竹の樋からは、水が漲るやうに風呂場の中にあふれ落ちた。

かと思ふと、小さな丸鬚を結つた隠居の上さんが、籠と庖丁とを持つて野菜畑から霜にしもげた菜を

持つて来て、それを午前の日影の暖かにさし添ふその井戸流して丹念に洗つてゐるさまがくつきりとなりに際立つて見えてゐたりした。時には主人が『もう、鰻も、鯉もねえな。一つ出して来なければやねえ……。』こんなことを言つて、ざるとたまを持つて、前の大きな堤防を越して、河岸の方へ出かけた。そこには生洲舟があるのであつた。

鴨や雁は減多に持つて来なかつたけれども、其附近の松林や雑木林の中でよく獲れる寒鳩は、よく村の獵師達が打つては持つて来た。来た翌日にも、主人や隠居が店先でそれを値切つて買つてゐるのをお園は見た。『鳩なんかは、昔はこんなに珍重しなかつたんだが……。何うもしやうがねえ。鳥が少なくなつちやつたで……。』隠居はこんなことを言つて昔を憶ふやうにした。

お光の言ふやうに、客はさう大して多くはやつて来なかつた。泊り客の方はそれでも夜になつてからかなり多く集まつて来たが、飲客は来た日には三組か四組しかなかつた。それに、少くとも色白のお園の姿は、此處等にはめづらしいものとして客の眼に映つたらしく、『えらい別品さんが来たね。』など、いふ聲をそこでも此處でもお園は耳にした。

二階には、郡役所のあるT町から出張して来てゐる耕地整理のための屬吏が二三人ほど滞在してゐるが、さういふ人達にも、新に来たお園の姿は目に立つて美しく見えるらしかつた。お園は彼方からも此方からも、めづらしさうにして自分を見てゐる眼に出會つた。



しかしお園はさびしかつた。来た日の夜に、暇をぬすんでちよつと手短かに此處に來たことを書いて目那にまで、手紙は出して置いたが、とてももう目那は自分には戻つて來さうもないやうな氣がして、涙はひとり寝の冷たい夜着の襟をぬらした。

## 十六

目那に對する戀心は絶えずお園の體に絡み付き纏はり着いた。何とか言つて來さうなものと思つてその便りを待つ心と、とてももう目那は自分に戻つては來ないといふ心と、山の中にある色の生白い女に對する嫉妬とが、常にやつて來てはかの女を悩ました。時にはかの女はぼんやりして廊下の日當りの處に立つてゐたり、流し元で物を洗ふ手をとめてそれとなしに考へてゐたり、客の前で銚子を持つてお酌をしながらも、心は其方の方に行つてゐたりした。目那に縋らずに勝手に自分の運命の路を辿つて此處にやつて來てから、一層その戀心が辛く重荷になつて來るのをお園は感じた。時には、何うしても此まま目那は捨て、了はれないやうな氣がした。今頃は山の中で、かの女のことなどは忘れて、その女といちやつて戯れてゐるなど、想像すると、赫と體中が火のやうにあつくなつて、居ても立つてもゐられないやうな焦躁を覺えた。

と思ふと、目那に強ひて圍はれた頃にまだ切れずにゐた男のことなどが、をり／＼かの女の胸に浮んだ。その頃は目那の眼を忍んで媾曳の歡樂を重ねたこともあつた。またある時は、それが目那に知れて、目那はそれを荒立てなかつたけれど、温泉宿の上さんにひどく叱られたこともあつた。お園はその頃目那に味はせた苦惱が、今は的確に自分の身の上に酬つて來てゐるのををり／＼考へた。つゞいて子供を懷妊した頃から、目那の情が次第に身に染みて忘れられなくなつて來たことを思つた。(あの兒さへ生きてゐて呉れたら)(目那が失敗して此方の山に來るやうにさへならなかつたら)かうしたことが繰返して考へられた。

しかし、かうした悲觀ばかりではなしに、目那の身の上、運命、事業の失敗から押して、それと言ふのも、今は東京にゐてさへ身を躲してゐなければならぬやうに目那がなつてゐるためだといふ風にも考へられないこともなかつた。従つて山の中にある女に對する嫉妬は單に空しい影の様なもので、或ひはいくらかなりとも、その失敗を恢復したならば、目那は決して、此身をこのまゝ捨てきりに捨て、了ふやうなことはないなど、強ひて自ら慰めることなどもあつた。

時にはまた、かうしたさびしい田舎が、田舎の旅舎が、前に長く續いた大きな川の堤防が、または野菜畠の霜が、世離れた境遇が、かの女の戀心を埋めて了ふところのやうにも思はれて、堪らなくさびしい悲しい氣もした。段々さうした旅舎の人達の生活にも睨み、よく酒を飲みに來る周圍の目那衆の空氣にも浸り、明輩のお光の此處にやつて來た戀物語にも同情し、上さんの機嫌の好し惡しの細かい氣分に



も、隠居の人の好い莞爾した顔にも、親類の娘ツ子の働くには働いてもいやに底意地のわるいやうなところのあるのにも、娘の養子のやさしい弱々しい氣風にも、二階の郡役所の屬吏のKがいやにかの女にからみ附いて來るのにも、何にも彼にも馴れて來てはるるけれども、それ等はすべてかの女の今まで經て來た生活や境遇とは丸で變つた縁のないやうなものに思はれて爲方がなかつた。何處を見渡しても、國で見たり聞いたり、また逢つたり離れたりしたやうなもの、なつかしい人達もなかつた。朝毎に白く寒く置き渡す霜、井戸流しに冷めたく凍つたまゝに残された青い菜、四目垣の下に黄ろくめぐみ始めた水仙や福壽草、裏の精米所から終日響いて來る臼や杵の地響きするやうな轟き、くつきりと晴れた冷たい空氣、さうした中に、戀の痛手を負つたかの女が、ひとりほつかりとさびしく浮べて置かれてあるやうな氣がした。

## 十七

『お園さん、手紙!』

廊下のところでお光が手を振つて聲を立てた。丁度その時、お園は襷がけになつて、朝日の當る離座敷の縁側の拭掃除をしてゐるが、それを聞くと、そのまゝに雑巾をそこに放つたまゝにして、急いで此方へとやつて來た。

『待つてゐた人?』

半ば問ふやうに、半ばからかふやうにして、お光は笑ひながら、今、店で受取つたばかりの一通の手紙をお園に渡した。

果してそれは待ちに待つた旦那からの手紙であつた。『さうでせう、待つた人からでせう。』お光は猶ほ追懸けてこんなことを言つたが、こんなことには頓着せずに、お園はそのまゝ、此方に来て、離座敷の縁側の處で、後姿を此方に見せて、そして呼吸をはずませるやうにしてその手紙の封を切つた。

旦那は頭からかの女の國を出たことを吐つてよこした。また勝手にさうした行爲に出たことを吐つてよこした。かれが事業に失敗して何うにも出來ないのはかの女も知つてゐる筈である。東京でも身を躲してゐなければならぬのは知つてゐる筈である。それなのに、宅に電報を打つたり何かして、ちつとも此方のことは思つて呉れない。お前は勝手にさういふことをしてゐる。さういふ積りなら、此方にも亦此方の考へがある……。總てが、かうした調子で、田舎の旅舎などに身を沈めたことを、見捨て難い罪過でも犯したやうに、または此方が好きでさうした處に入つて行つたやうに書いてよこした。お園は黙つてそれを見てゐるが、その手紙の文句のかげにかくれてゐるいろ／＼の事情、山の中に新たに出來た女、その爲め離れ氣味になつてゐる旦那の心、その心を押しかくしてわざと此方がわるいやうに責めて來た言葉、さうしたことが渦のやうにお園の頭に簇つて集つて來た。



これが待ちに待った手紙？ かう思ふと電報に電報を重ねて打つてやつたその返事すらよこさなかつたことも、自分が捨てられて邪魔にされてゐたといふことも、S町の老夫婦が自分に素氣なかつたのは旦那がさういふ心であつたからであるといふことも、何も彼も一つ一つはつきりわかつて来たやうな氣がした。流石に手紙の終りの方には、やさしい言葉が書き列ねてあつて、いづれそのうち機會を見て迎へに行くとは書いてあつたけれども、またそれがかの女の心をいくらかは繋ぐやうな情緒を起させなければ、それと知つたなら、すぐにも迎へに來なければならぬやうな熱い心のそこに燃えてゐないのかの女には非常に物足らなかつた。それも皆な山の中にあの女が新たに出來た爲めだとお園は思つた。

お園は手紙を帯の間に挟んで、そのまゝやりかけた拭掃除を始めた。雑巾を絞るバケツの湯の中をりをり涙が雜つて落ちた。

其處にやつて來たお光は、

『迎へに來るつて？』

『……………』

『お見せな、手紙を？』

『見せたつて、しやうがないよ。其の中、來るとさ。』

『その中つて、何時なのさ？』

『何うせ、薄情なものだよ、男は——。捨てるとなると、平氣で捨て、了ふんだからね。この位なら、もつと先に、此方から捨て、やれば好かつた。』

『何うしたのさ……』見ると涙がこぼれさうになつてゐるので、お光はあやしむやうにしてお園を見た。お園は黙つて、長い廊下に雑巾を當て、行つた。四目垣の外では、此處の養子が日雇取と一緒になつて、絲を引張つて、桑苗を栽ゑてゐるのがそれとはつきり見えた。

## 十八

日當りの好いその長い廊下で見ると、その前の大きな堤防の上を種々な人達が通つて行つた。額髪を手拭で巻いて朝早くから日當りをさがして歩く子守の群、毎朝川を渡つて河川の工事場につとめに行く脊廣姿の若い技手、小學校の先生、かと思ふと、桑苗の束を三つも四つも脊負つて、面白い恰好をして、自轉車を走らせて行く近在のの百姓、時には長い路を西風に寒さうに吹かれて、町から町へとさまよつて歩く旅藝人の群なども、土手を通ると近いといふので、其上を通つて行くのなどが見えた。

ある時、お光はお園に指さした。

『そら、今、歸る……。』

『誰が？』



『そら、歸つて行くぢやないか、Sさんが、そら……。』  
かう言つて、更に聲を張上げて、

『Sさん!』

と大きく呼んで見て、

『憎いね。知らん顔をして行くよ。きまりがわるいんだよ。』

更に大きく、

『Sさん!』

と、今度はきこえて、ちよつと此方を振返つて、またすたくくと土手の上を歩いて行つた。それは色變りの外套を着た中折の焦茶の帽子をかぶつた若い男であつた。

『誰さ? あれ?』

『知らないの? 静枝さんのSさんぢやないか。』

『静枝ツてこの間來た藝者?』

『さうさ……。』

『あの人、旦那があるんぢやないの?』

『さうさ……。ちやんとこの裏に家を借りて、世話をしてゐて呉れる旦那があるんだよ。ところが靜

枝さんの方ぢや、あのSさんに惚れてるんだから。』

『ぢや、旦那の來ないやうな時に來るんだね。』

『さうだらう、屹度……。』

『罪ね。』

『だつて、靜枝さんだつて、その位のことではなくつちや——。旦那ツて言ふのはもうお爺さんだもの。』

『でもね、』かう言つたが、『あの人何處から來るの?』

『川を渡つて二里ほどあるM町から來るのよ。靜枝さんがK町に出てる頃からの色だつたのを、それを、今の旦那が此處に伴れて來て置くやうにしたのよ。あの人にだつて金はあるんだけど……。』

『さう——』

丁度、客がやつて來たので、番に當つてゐるお光は話を中途でよして、『入らつしやい、』と言つてばたと向うに行つた。お園は猶ほもひとりて土手の方を眺めた。と、此處に來た三日目の朝、始めて小僧と一緒にその土手に登つて、思ひもかけない大きな美しいT川を見たことを思ひ出した。またその土手の上から、平野の三面を繞る山の雪が銀のやうに閃々と眩ゆく日に光つて見えたのを思ひ出した。T町の停車場の前の工場の煤烟からかけて、S町のある位置、つゞいてかの女の旦那が鑛脈をさがしに行つてゐるA山群の深い細かい巒が半ば以上雪に埋れてゐるのを指し示したことを思ひ出した。土手の向う



側には、近所の雑木林から伐り出した粗朶が一杯に山のやうに積まれてあつて、をりく傳馬が一二艘そこに寄つて來ては、船頭と船頭の鼻とが、それを一生懸命に舟の中に運んだ。その下流五六間を隔てて、碧い寒い水の中に全く沈み果てたやうになつて、その旅舎の牛洲舟は繋がれてあつた。小僧はざるとたもとを傍に置いて、持つて來た鍵でその舟の錠前を明けた。やがて大きな鯉や鯰や鰻がそのたもの中に躍つてすくはれた。

十九

ある夜、その靜枝の箱を持つて、六十五六にもなる婆さんが頓狂な聲を立て、入つて來たが、用を濟ますと、暫し店の火鉢のところに坐つて、主人や隱居の上さんを相手にいろく世間話をして行つた。あとでお光は言つた。

『箱屋の婆さん見て?』

『あゝ。』

『あの婆さん、今でこそあんなだけでも、昔は別品で鳴らしたんだとさ。此町でも評判な女だつたんだとさ。』

『あの婆さんが?』かう言つてお園は驚くやうにして、『藝者でもしたことがあるの?』

『藝者も屹度したことがあるのかも知れないよ。三味線は旨いよ。それにね、猶ほ面白いのは、宅のコレが一度大騒ぎをして、親類なんか不承知だつたのもきかずに、上さんにしたことがあるんだとさ。』

『コレツて?』

『お爺さんさ。』

『まア……。』

『それもね、一年位一緒にゐたさうだけでも、矢張りけなくつて、出て行つて了つたんださうだけでも……。今でも、その時の話なんかしてることがあるよ。』

『隱居さんと?』

『隱居ともしてゐるけども、隱居のお上さんと話してゐることが多いよ。もう、あゝなると、色戀のことなんか何でもなくなると見えるのね。夢か何かのやうになつて了ふのね。屹度――』

『さうかねえ、まア……。私なんかには、とてもそんなことは考へられないけれども。』

『可笑しなもんだね。』

『それで、お爺さんなんかも、何とも思つてゐないのかしら?』

『何とも思つてゐるやしないよ。あはゝなんて笑つて話してゐることがあるよ。』

『さうかねえ!』



お園は不思議さうに、また深く考へるやうにして、暫し黙つてゐるが、『私なんかにはとてもそんなことは出来さうもない。』

『私だつて、今はさう思ふけれども、年を取ると、さうなるのかも知れないのねえ。』

『それであの婆さん、子供があるの？』

『このお爺さんの種ぢやないけれど、今年四十になる立派な息子がこの近在にゐて、いつまでもそんなことをせずに歸つて來いつて言ふんださうだけれども、矢張、道樂で、あゝして箱でも持つて歩くのが面白いんだとさ。』

『へえ。』

かうお園は言はずにはゐられなかつた。

お園は次第にA町の空氣や、そこに住んでゐる人達のことを知るやうになつて行つた。成ほど一時は榮えた町であつたといふことは、種々な昔の歡樂の跡がさういふ風に残つてゐるのでもそれと想像された。雜貨店の上さんがいやに意氣だと思つて見ると、それは元K町で藝者をしてゐてそこに旦那に圍はれてゐるものであるといふことがわかつたり、通りから曲つて行つたところに、しやれた構への家があると思つたら、それはT町の物持の愛妾の家で、三日おき位には旦那が車でやつて來るといふ噂を耳にしたりした。表面は何處でも靜かで何事もないうやうに見えてゐながら、底は存外男と女の色の濃い世界

であるものではあるが、此處は一層さうした空氣が濃やかであるやうにお園には段々飲み込めて來た。國で散々男で苦勞して來たといふお光にさへ矢張男があるらしく、それと思つて見れば、二階の屬吏の年の若いFとさへさうした關係があるかも知れないやうに見えた。お園は旦那に對する戀心がさうした空氣の中に深く埋められて行くやうなさびしい氣がした。

## 二十

お饒舌をしながら、仕舞湯に長い間浸つて、お園が出て來たのはもうかれこれ十二時過であつた。店では誰も彼も寝て了つて、縦横に敷かれた蒲團の上には、高く吊されたランプの五分心の半ば引込められたのが、薄暗くあたりをぼんやりと照した。

好い心持に湯に暖まつた體には一日立働いた疲勞が出て、赤くのぼせ上つた顔を手で押へたりして着物も着ずに、恍惚としてゐると、あとから出て來たお光は、『何してゐるのよ。もうお寝な……。湯ざめがするよ。』かう言つて、自分から先に六疊の夜着の中に入つて行つた。

暫くしてから、お園も此方來て、寢卷に着替へて、冷めたい床の中に入つたが、その時はもうお光は顔を向うに向けて、いつもする習慣になつてゐる話もせず、微かな呼吸を規則正しく刻んで、早くも眠つて了つたやうに見えた。



今日は客が多く、忙しかつたので、疲れたと見えるなどと思ひながら、お園もやがて眠つて行つたが、それから何の位経つたか、十分経つたか、二十分経つたか知らないが、ふとある音に眼を覺したお園は、傍に今まで熟睡してゐるとばかり思つてゐたお光が、ソツと靜かに半身を起し、少し考へてあたりを見廻し、お園が熟睡してゐるのに安心したといふ風にして夜着を元のやうにそつとかけて、もう一度此方を見て、後の障子を音のしないやうに靜かに明けたが、思ひ附いたといふやうにまた二三歩戻つて來て、今度は障子の隅に置いてある臺ランプをフツと吹き消した。で、あたりは闇になつたが、それでも店の方のランプの餘光が微かに此方まで來てゐるので、お光の黒い姿がソツと障子を閉めて廊下に出て行くのがそれと見えた。

『何處に行くんだらう?』

かうお園は思つたが、それと同時に、一階に滞在してゐるFのことが急に頭に上つて來た。

お園は黙つてその氣勢に耳を傾けた。果して想像した通りであつた。お光は障子を傳ふやうにして、靜かに階段のある處までたどりついたらしかつたが、その板敷のギイギイ鳴るのを氣にするやうにして、やがてこつそり階段を上つて行く軽い足音がした。

お園は半ば起き返つた身を再び元のまゝに蒲團の上に横へたが、そのためにすつかり目は覺めて了つて、暫くは再び眠ることが出來なかつた。お園は旦那のことを思ひ出して、體中が赫とあつくなつて來

たりした。戸外には西風が吹き始めたらしく、庭のあたりで、木の葉や紙屑の散らばる音がガサゴツときこえた。

お園はいろ／＼なことを思ひ出して、軽いしかし辛さうな溜息などをついたりなどしてゐたが、それも一時の時計をきいたゞけで、二時も三時も知らずに、いつか靜かに眠つたらしく、お光がソツと障子を明けて戻つて來たのも、夢現に知つてはゐたが、しかもすぐまた眠つて了つて、今度眼の覺めた時には、隠居がもう雨戸を明けてゐた。

お園は急いで起きて着物を着て店へと行つた。

竈の下に出來たオキを十能に入れて、早起きの旅客の枕元へそれを持つて行つたり、廊下の此方の隅にある手水に使ふ湯のテツバウの火の加減を見たりしてゐる中にお光は漸く眠さうな眼をして起きて來た。しかし、お園は何も言はなかつた。お園は唯ちつとお光の顔をめづらしやうに見詰めた。

箒と掃塵を持つて、一階に掃除に上つて行つた時には、とつつかの室に、Fは夜着を頭からかぶつたまゝ、まだ熟睡してゐた。

西風の寒く吹く日であつた。お光は日當りの縁側に立つて、土手の方を見てゐたが、



『ちよつと、ちよつと。』

かう室の中にあるお園を呼んで、

『この間の人ぢやないかしら？』

『この間の人ッて？』

『そら、私が前橋の銀行の旦那に肖てると言つた——』

お園はそれを聞くと、急に爲事を止して此方へと立つて來た。

『どれさ？』

『そら、今、土手から、此方へ下りて來ようとする？』

『さうね、さうらしいね。』

『さうだよ、さうだよ。』

『だつて、あの方、東京の人だもの。さう度々やつて來る筈がないよ。』

『だつて似てるもの。外套だつて、帽子だつてそっくりぢやないか……。さうだよ、さうだよ。』  
段々近附いて來るのを見て、

『さうかしら？』

『さうだ……。あの旦那だ。』

『さうらしいのねえ。』

かう言つたお園はいくらか胸が騒ぐやうな氣がした。其客を再びこの旅舎に引寄せたのは、川の眺望、山の雪の眺望、または日當りの好い世離れた旅舎ばかりではなく、かの女も興つて力があるやうな氣がした。それは今から十日ほど前であつた。丁度お園が此處に來て漸く新年の宴會を二つ三つすまして、ほつと呼吸をついた頃のある日の午頃であつた。その客は車を門のところを下りてそして此方に入つて來た。お園はその時襷がけて井戸流しのところで菜か何かを洗つてゐたが、『いらつしやい、』と言つて、そして手を前垂て拭き乍ら出て迎へた。一目見た時から旦那らしい好い旦那だと思つた。顔や扮装にも此處等あたりでは見ることに出來ない客だと思つた。

丁度お園の番だつたので、客の選ぶまゝに、中の日當りの好い四疊半に案内して、そこで一時間ほど晝飯の相手をした。『好いところだな、こんなところとは思はなかつた。』など、も言へば、『何しろ、暖かて日當りが好くつて好い。』など、も言つた。午飯の支度のまだ出來ない中に、下駄を穿いて出かけるから、何處に行くのかと思つたら、『川を見て來るんだ。』と言つて四目垣の小さな扉から、野菜畠に沿つて、急いで前の土手に駆け上つた。見てゐると、その姿は彼方へ行つたり、此方に來たり、または川に面して立つて後姿を見せたりして、山の雪やら川やらを熱心に眺めてゐるらしかつた。お園はその時旦那のことを胸に浮べたことを覚えてゐる。旦那のゐるあの山の雪を見てゐるなどと思つたのをも覚えてゐる。



暫くしてその客は土手から下りて來たが、下りる時、餘りに急な勾配を飛び下りたので、下駄の齒を抜いて了つたと言つて、それを拾つて持つて來て、自分で入れさうにするのを、お園が取つて深切に踏石で叩いて入れてやつたりした。客は、『好いな、何とも言へないな、山の雪と、川の眺めは——』など、口を極めて褒めた。『こんなところにこんな好いところがあるとは思はなかつた。』など、言つた。否、そればかりではなかつた。お園のすらりとした、脊の高い、色の白い、取なしの素直なものにも、川魚料理の旨いものにも、寒鳩の小鍋にも、すべて氣に入つたらしく、段々話してゐる中に、お園のいくらか訛のある言葉から、『あてて見ようか、君は何處だか？ 此處等ぢやないね。東北だらう。會津、福島、てなければもう少し遠く仙臺、それより先ぢやない。』かう圖星を中てたやうな觀察をした。それからしてお園にはなつかしかつた。

## 二十二

その時いろ／＼な話をしたといふほどではなかつたけれど、かの女のゐた温泉宿にも泊つたことがあると言ふし、その東北地方のことも詳しく知つてゐるし、かの女の生れた會津のことなども何彼と話が出て、『それなのに、何うしてこんな田舎に來たんだえ？ 矢張、男のために苦勞をしてゐるんだね？』など、笑ひながらその客は言つた。お園の眼には、その客はかなり苦勞人らしく映つた。色戀のことに

も、深い理解があるやうに感じられた。お園は無論、自分の身の上話などはしなかつたけれども、また僅か一時間ばかりの對座では、さう打解けて話をする暇もなかつたけれども、何となく氣の置けない人のやうな氣がした。客は大島の襲ねに揃の羽織を着て、派手な羽二重の長胴着を袖口の間から、チラホラ見せてゐるやうな人だつた。

それに、年恰好が丁度山の旦那位で、その話振りにも何處か似通つたやうな氣分があつて、早口な、何でも物事を早くきめて了ふやうな、さつぱりしたところと、笑ふ時、顔を少し上に向けて、あは、といかにもやさしげに笑ふさまとは似てゐるといふ程ではないにしても、同じ年輩に共通した一種のなつかしい類似を持つてゐた。何をしてゐる人かしら？ 役所勤めをしてゐる人ではなし、さうかと言つて商人ではなし、銀行員らしいところがあるにはあつても、何うもさうとは點頭けないところがあるし、客に馴れたお園にもちよつとそれを判断することは出来なかつた。

しかしその時にも、このあたりの川や、山の雪や、または旅舎の靜かなさまは、十分にその客に氣に入つてはゐたらしく、『これは好い、これは好いところだ……。生中、つまらぬ温泉場などよりも却つて此處の方が好い。十日ほど來てゐたいな。その中、ひとつ出かけて來よう。』など、言つて、滞在の費用や、一日いくらで賄つてもらへるかといふことや、郵便や交通の便不便や、その他いろ／＼なことを詳しくかの女に訊いた。お園はわざわざ店に行つて、主人に室のことや滞在費のことを訊いてやつたりした。



否、そればかりではなかつた。その日は一夜泊つて行きたいらしく、『用さへないなら、今夜一晚是非泊つて行くんだがな。』などと、名残惜しさうにして、待たせた車に乗つて、皆なに送られて出て行つた。待つてゐた車夫にも、『晝飯に一本つけてやつて呉れ給へ。しかし、一本だけにして置いてくれ給へ。餘り酔つばらはれて車が輓けなくなつても困るから。』など、言つて、膳の上に猪口を一つ載せさせた。歸つたあとで、お光に、

『好い旦那ね、さつぱりしてゐるのね。矢張東京でなくつては駄目ね、田舎ではとてもあゝした氣分の旦那はないわね。』

かう言ふと、お光も點頭いて、

『前橋の銀行のAさんといふ人にそつくりよ。あの人よりはてつぷり肥つてゐるけれども……。だから、私入つて來た時、てつきりAさんだと思つた——』

『何をしてゐる人だらう?』

『さアね、ちよつとわからないね。矢張銀行か會社あたりの人ぢやないかしら。』

それきりその客の噂はしなかつたけれど、お園の胸には、をりくその姿や言葉や氣分などが浮んで來て、それから自分の旦那のことを思ひ、あの客のやうにして、旦那が迎へに來て呉れ、ば好いと思つたりした。昨日も四目垣にさびしい夕日のさし添ふのを見てふとその客のことを思ひ出してゐた。

## 二十三

やがて土手を下りて、野菜畠を突切つて此方にやつて來たその客を、『入らつしやいまし、』と言つて女中達は迎へた。

『またやつて來たよ。』

などと客は言つて莞爾して、お園の導くまゝに、此前案内された庭に面した室へと通つた。

『よくやつて來たらう。本當だつたらう、嘘ぢやなかつたらう?』

『今、そこで、お光ちゃんと一緒に見てたんですよ。何うも、旦那らしいつて——』

『さうかえ? 見たたのかえ? 旦那からSの渡しまで車で來て、川を渡つてから歩いて來たが、土手の上の西風の寒さと言つたら、顔が向けられない位だつた。』

『さうでしたらうね、生憎な西風ですもの。西風が吹くと、それや外は寒いですから。』

そこに逸早くお光が大きな臺十能に一杯火を入れて來たのに、客は手や顔を當てながら、

『そのかはり、山の雪は綺麗だつた……。丸で銀か何かのやうに、ピカピカ光つて見えるんだから……』

『寒いすね。山の雪は——』お園は（これが自分の旦那で、あの山の雪の中から、金を持つて自分



を伴れに来て呉れたのならば、何んなに嬉しいだらう。など、思つた。あの時、此方から辯解してやつた手紙の返事はまだ來てゐなかつた。

『離れの方を借りられるんだね?』

『え、え、いつでも明いてるんですけど。』

『此方でも好いけども、隣りに客でも來て騒がれては困るからね……。その代り、宴會でもあつていゝ時はいつでも明けるから。』

『長くるらつしやるの?』

かうお園が訊くと、

『長くつて、さう長くもないけれど、一週間世話にならうと思つてやつて來たんだよ。靜かに物を考へたり何かするには好い處だからね。』

『ぢや、さう言つて、離座敷の方にしませうか。』

『まア、あとで好い……。今、すぐでなくつて好い。まア、少し休んで、午飯でもすましてからで好い。』  
此方に来て、

『長くるんだとさ。……。あの旦那……。』

『そら、私の言ふ通りだらう?』

かう言つてお光は笑つた。

『何がさ?』

『何がつて、お奢りよ。』

『馬鹿々々しい……。』

『だつて、お前さんだつて、イヤぢやないぢやないか?』

『好い加減なことをお言ひでないよ。かう見えても、私には、山の旦那があるのよ。』(お前さんとは違ふよ。)といふ語氣を見せてお園は言つた。

『そんなにむきにならなくつたつて好いぢやないか。』

『だつてさ。』

『むきになるだけ、ほの字だよ。』

お光はわるくはしやいで、笑ひながら、ばたんと向うに駈けて行つた。

それにしても、何をやる旦那だらうとお園は思つた。(かうしたさびしい田舎に、一週間も滞在すると言ふのは、何か理由がなくてはならない。河川の方に用事のある人も知れない。それとも新たに敷設する汽車の方の人かしら……。)かうも思ひながらも、何となくそれが、その客の來たことが、自分の運命に何等かの見えない連絡をしてゐるのではないかといふやうな氣がした。



離座敷の六疊に移つた客は、机に向つて物などを書いてゐた。をりくは此方で氣を附けて、火を臺十能に入れて持つて行つたり、行火を拵へて小搔卷をかけてやつたり、夕飯の時は成るだけ傍についてゐて、一本二本飲む酒の酌をしてやつたりした。次第にお園は親しくなつて行つた。

つい訊かれるまゝに、男のためにかうした田舎に奉公までするまでになつた身の上話をした時には、普通の多くの客の上つ面な同情とは違つて、『矢張、さうした悲しい歴史を一つづつ持つてゐるんだね……。何うも、さういふことでもなくつちや、東北からこんなところまで来る筈がないと思つた。』かう染した調子で言つて、『やつぱり、惚れたものがさういふ目を見るんだね……。男にしても、女にしても……。』客自身にも思ひ當る節があるやうにした。

暫し考へるやうにしてゐるが、

『それで、便りはあるのかね、旦那から？』

『一度ありましたけども、矢張失敗してゐるもんですから、迎へにも來られないでゐるんでせう。』

『でも……。』

『一體男ツて薄情なもんですからね。』

『男から言はせると、女も薄情だよ。だから、薄情とか何とか、お互ひに言ふやうものぢやなくつて、惚れた方が何うしてもさういふ役廻りになると言ふ方が好いんだね……。』

『それはさうですね。』お園も考へるやうにして、『だから、惚れる方が損ですね。』

『その代り、惚れた方が惚れられるよりは面白いからね。』

『それはさうかも知れませんがね。』お園はまた考へるやうにした。

これに限らず、さういふ風にハキハキと物の判断をするやうなその客の口のきゝ方がお園には頼もしいやうな氣がした。お園はいつ話すともなく、温泉場でその旦那に圍はれた話や、旦那の細君がやつて來て、妊娠七月の目に立つ體で逢はなければならなかつた辛さなどを話した。ある夜温泉宿に行つて、それとなく帳場で宿帳をひつくり返してゐると、ふと今朝來た客の中に旦那の細君の名がある。吃驚して逃げて家に歸つたのを、上さんやら、番頭やらが來て、無理にその細君に逢はせた。さうした話を細かにしてきかせた時には、

『ふむ、それは辛かつたらう。細君によくされただけそれだけ辛かつたらう、』など、客は心から耳を傾けてきくやうにした。

『その子供さへ生きてゐると好かつたんだね。』  
かう染々と客は言つたりした。



ある時はお園は訊いた。

『男ッて他に女が出来るよ、初めの女はすぐ忘れて了ふもんでせうか？』

『そんなことはないけどもね……。』客は笑つて、『しかし男と女の中の覺めたり燃えたりするのは不思議なもんでね。覺めたとなると、しやうがないもんだね。覺めたものに、いくら此方から惚れて見ても、何うにもならないやうなもんだね。そしてその戀の傷手ツて言ふものは辛いもんだよ。』

『本當ですね。』

かう言つてお園は溜息を吐いた。

此頃、不思議にも、山の旦那に對する戀心がお園には燃え出してゐた。思ひ切つたり、また思ひ出した、この儘では別れられないと思つて赫としたりした。山の中にある女と夜戯れてゐるさまなどををり眼の前に繪のやうになつて浮んで來た。情慾に燃えた赤い顔をして、寒い西風の吹く縁側の拭掃除などをしながら、『もう捨て、了はう。構ふことはない此方から捨て、了はう！』などとお園は思つた。

二十五

敷石傳ひに物を運んだり、その度びに顔を見合せたり、何でもなことを話し合つたりする中に、お園には次第にその客の心や氣分や、女性に對する細かい愛着や、或はその陰にその客もまた戀心の處分に

苦しんでゐるはしないかと思はれるやうなことが飲込まれると共に、客にもお園の男に惚れつぽい、戀心を抱かずには片時もゐられないやうな女であることや、絶えず山の旦那の方へ色濃く偏つて靡いてゐる心や、笑ふ時に男の心を惹かないでは置かないやうな眼や眉が親しく深く染み込んで來た。

客の姓名をお園は既に知つて、いかにも人なつこいやうに、『Tさん、Tさん、』などと呼んだ。

少くともお園に取つては、さびしい悲しい運命の持主であるかの女の前に最初にあらはれて、そのTが一日なり二日なりそこに滞在して笑つたり話したり、また其處等を散歩したり、机に向つて物を書いたりしてゐることが、いくらか楽しいやうな、または力になるやうな心持をかゝる女に誘つた。何處を見廻しても、他人ばかりで田舎はさびしく、自分の辛い身の上話をしやうにも、染染耳を假して呉れる人達もないやうなこの他郷に、さうしたTを迎へたといふことは、今のお園に取つては決して小さな事實とは思へなかつた。お園には、始めてそのTがやつて來た時のことなどがまたしてもくり返して考へられた。

朝も起きるとすぐ、お園は一番先に火を持つて行き、つゞいて行火を拵へて持つて行つてやると、起きぬけに土手の上に山の雪や川を眺めに行つたTは、丁度そこに歸つて來てゐて、『難有い、難有い……行火にかぎる。今朝は寒いね。』など、言つて、莞爾してそれに手を當てながら、

『旅舎なんか奉公してゐては、朝の早いのが辛いね。』



『夜が遅うござんすからね。』

『夜は何時頃になるえ？』

『大抵十二時位ですけれども、昨夜なんか、客が遅くありましたもんですから、一時でした、寝たのは……』

『大變だね。』

何でもない言葉ではあるけれども、それが通り一遍のお世辭とは思へなかつた。それ以上になつかしくお園の耳には聞えた。

昨夜お光と一緒に床の中で言つたことなどがお園には思ひ出されてゐた。『さうね、私は何うしてだか、餘り若い男は嫌ひ……。何うしても年層のの方が深切なもの。』かう言ふと、Fのことを當てつけられたといふ風に取つたお光は、

『それや、お前さんはさうだらうよ。それも山の旦那に仕込まれてゐるからだよ。私なんか、お爺さんは眞平……。若ければ若いほど好いわ。だつてその方が此方の自由になつて面白いもの。』かう言つてお光は笑つた。(成ほどさうかも知れない。旦那に仕込まれた故かも知れない。あの人の言ふ通りだ……。)こんなことをお園はぼんやり考へた。矢張、旦那への戀心をそれとなくTへも移してゐるのであつた。長い廊下の隅に大きな石の臺があつて、そこに置かれてある丸い湯を沸かす桶のテツパウには、朝起

きるとすぐ、隠居が一番先に火を入れるので、女中達が起きたり泊客が起きたりする頃には、いつももう好い加減に手水をつかふ湯は沸いてゐるのであつたが、Tは一あたり行火にあたつてから、庭下駄を突かけて、敷石傳ひに、顔を洗ふためにそこにやつて來た。それを見ると、お園は爲かけた用事を捨て、置いて、急いでそこにライオンの小袋と新しい楊枝とを持つて來た。そして次手に湯をも汲んでやつた。

二十六

Tの話の中には、色戀に對する深い理解があつた。お園はその話の中に、これまで無意識に、盲目的にやつて通つて來た自分を發見して、『本當にさうですね。男と女の中はさういふもんですかね。』など、心から撲たれたやうにして言つた。

成ほどそのTの言ふやうに、惚れられるよりも惚れる方が面白い。損ではあるが面白い。それは確かに自分が旦那に圍はれた頃に持つてゐた男に對する經驗で點頭かれる。

『此方から思ふのに、向うで思つて呉れないと思ふのはまだ淺い。向うで思つて呉れやうが呉れまいが、此方で深く思つてやりさへすればそれで好いのである。それで戀の目的は達せらるゝのである。唯、思ひ方の淺いのを慨くべきである。向うで思つて呉れないが爲めに、折角思つてやつた戀の壞されて行くのを慨くべきである。従つて報酬的にすぐやめたり壞されたりして丁ふ戀は、戀と言つても極めて淺



い薄い戀で、世間の戀は大抵さうした程度で行はれてゐるが、それでは折角戀をした效がないと言つても好いやうなものだ。』この言葉の中にも、いろ／＼考へなければならぬことが澤山にあるのをお園は思つた。『旦那のことをもつと深く思つてやらなければうそだよ。』などともそのTは言つた。

『でも、折角思つてやつても、その男に女があつたり、女に男があつたりするやうな時は何うしたら好いでせう?』

かう訊くと、Tは、通り一遍の質問ではないやうに眞面目になつて、

『それが辛いんだ。君だつてそれに苦しんでゐるのはよくわかる。僕だつてそれに苦しんだことがある。現に、今でも苦しんでゐる。さう言ふ苦惱——何うにもならない苦しみを散々嘗めさせられたればこそ、さつき言つたやうな(壊されない戀)と言ふことが考へられて來るんだ……。』

『さうですかね。』

かう言つただけで、その時はお園は別に深く訊きもしなかつたけれども、さうした言葉を持つてゐるTのことが種々に考へられた。次第にお園にはTの此處にやつて來た理由などもおぼろげながら飲み込めて來た。Tのかげには一人の女——絶えずその胸を痛めてゐる一人の女があるに相違なかつた。そしてその戀のために苦しんでゐるに相違なかつた。お園自身と同じやうに、そのTも矢張、戀の傷手に苦しんでゐるのではないかといふ風に考へられて來た。

『ぢや、旦那も、さうした苦しい思ひをしたことがあるんですね。』

ある時、かう訊くと、

『さうかも知れないよ。かうして、こんな田舎にまご／＼してゐるのも、そのためかも知れないからね。』

など、Tは笑つた。

『別品さんでせうね?』

『何が——?』

『その方が——』

『さうかも知れない。』

Tはまた笑つた。

かと思ふと、眞面目に、『だからわかるよ。君の辛いのも……。赫として、ゐても立つてもゐられなくなることもあるね。これほど此方では思つてゐるのに、向うでは他の相手とぬくぬくと歡樂に耽つてゐると思ふと、寢込みにも何でも踏込んで行つてやりたいと思ふね。だから、新聞などにも出齒庖丁騒ぎや、身投げや、心中や、いろんなことがあるんだがね。人間は皆な同じだ。色戀でも、上つ面で、面白半分、唯、體を合せることばかりに興味を持つてゐる中は好いが、そこにいつまでも留つてゐること



は出来ないからね。血があるからね。』

二十七

『本當ですな……。』

『それに、また、色戀はそこまで行かなくつちや面白くはないんだからね。好い加減のところ、不見轉を買つたり、女もまた厭々ながら體を貸したりする位のところで踏留つてゐれば、別に苦情もなしに、あはゝなど、戯談に笑つてすましても行けるし、すんでも行くだけだね……。さうしてはゐられなくなるからね。』

『本當ですよ。』

『だから、つくづく思ふね。人間は矢張一人と一人が好いんだね。女は人の妻になつて忠實に夫に仕へるし、男はその愛した一人の妻を守つて、すこやかに暮して行くのが何よりだね……。君なんかも、今の中、よく考へて、早く本當に頼りになる男を持つ方が好いにや好いんだね。』

さうした言葉は染々と深くお園の胸に染まずにはゐなかつた。

『私なんかも、山の旦那のお上さんに逢つた時には、本當に、それは罪だと思ひましたもの。』

『さうだとも……。人間は何んなに墮落したつて、さう思はずにはゐられないやうに出来てゐるん

だから……。』

『本當ですな。』

『だから、皆な酬つて来るんだよ。いや、酬つて来ると言ふよりも、皆な自分から拵へて行くんだよ。君が戀心に苦しんでゐるのも、僕がかうやつて田舎をさまよつてゐるやうになつたのも、皆な自分から起つたことだよ……。だから辛くても爲方がない。』

『さうですな。』

お園は心から動かされた。

『だから、君ばかり、さうした戀心に苦しんでゐるとは思はない方が好いよ。人間は皆なさうなんだから……。誰でも皆なさういふ風に苦しんでゐるんだから。皆な自分の心からさういふものを拵へて、そして、てんでに苦しんでゐるんだから。』

『旦那なんか、そんなことはないでせうけども……。』

『いや、僕だつて同じだ。君と少しも違ひやしない。かう見えても女には深切だつたんだからね。心から惚れて見たこともあるんだからね……。しかし、もつ、匙を投げた。戀を突き詰めて行くと、自分の身が減びる。自分の魂が減びる。それは、君にもわかるだらうが、體が粉微塵に碎けて了ふやうな氣がするからね』



お園の點頭くのを見て、

『だから、まア、當分、遁げてゐやうと思ふんだ。そしてこんなところまでやつて來たんだよ。ところが、かうした田舎にも、矢張、戀に苦しんでゐる君のやうな人がゐるんだからね。人間は何處まで行つても辛いもんだよ。』

かう言つて、Tは晩酌の盃の冷えたのをぐつと呷つた。

(粉微塵に碎けて了ふやうな氣がする) その一語は深くお園の身につまされた。かの女もさうした氣が絶えずしなかつたであらうか。何も彼も身も魂も滅茶滅茶に碎いて棄て、了はうとは思はなかつたであらうか。今でもをりくは山の中に飛んで行つて、憎い憎い憎い女の髻を執つて、短刀なんかでぐさと刺してやらなければ業が煮えて爲方がないやうに思ひ詰めることはないであらうか。

『まア、然し、こんなことをいくら言つて見たつて爲方がない。』

Tはかう言つて、強ひて笑ふやうにして、盃をお園にさした。お園は長い廊下を種々なことを考へながら歩いた。

## 二十八

ある時はこんな話をした。

『え、さうも思つてゐるんです。山の旦那のお上さんの家も、烏森で意氣な商賣をしてゐますし、麻布にある弟も、私がこんな田舎に來てゐるのを可哀相に思つて、山の方はあきらめて、東京に出來ないか、さうすれば、いくらも好い口はあるツて言つてよこしたんですけれども……。』

『それはさうだね。かうした田舎にゐるよりは、東京で稼ぐ方が金にもなるし、身の爲めにもなるにはなるね。』

『落附く氣があるかなんかなら、此處でもそれは身の立つやうにならないこともないでせうけども、いつまでもかうした田舎にゐる氣ありませんね。いつそ思ひ切つて東京へ行かうかとも思ふんですよ。』

『でも、旦那のことが思ひ切れないだらう?』

かう笑ひながらTは言つた。

お園も笑つて、

『思ひ切れないこともないんですけども、一度は逢つて、言ひたいことは言つて、そして別れるなら、きつぱり綺麗にわかれたいと思つてゐるんですから……。此處にかうして來たんでさへ、自分の勝手にやつて來たんですからね……。これからまた一人で勝手に東京に出て行つては、それこそよく打ち壊しになつて了ひますからね。』



『それもさうだね……。それにしても何とか言つて來さうなもんだね、山から?』

『駄目には駄目だと思ふんですけども……』

『山に來てゐるには來てゐるのかえ?』

『旦那ですか。來てゐるんですけども……。それは山でその女と一緒に暮してゐるのはちやんとわかつてゐるんですけども……。私なんか何うでもよくなつたんですよ、もう。』

『そんなこともないだらうけれどもね。』

『さうなんですよ。それはわかつてゐるんですの。だけど、餘り男としては薄情すぎると思つて……』

『何か、誤解してゐるんぢやないか、お互ひに。君の方でも、旦那の方でも……』

『そんなことはないんですの。捨てられたには捨てられたんですがね。急に赫として來たといふ風で、』

『いつそ、思ひ切つて東京に出ようかしら?』

『Iは考へるやうにして、』

『それも決心一つで、好いには好いかも知れないね。待合奉公だつて、本當にやつてゐる分には、立派に身が立つて行かないこともないんだから……。』

『それはさうですとも。こんな田舎にゐるよりも、その方がどれほど好いかしれないと思ふんですけども……。』

『此處には、借金はあるのかえ?』

『いゝえ、いくらもないんですの? さうしやうと思へば、何うにでも出来る位の借金しかないんですけども……。』

『しかし、まア、もう少し山の返事を待つてゐる方が好いね。東京に出ようと思へば、いつでも出られるんだから。』

『それもさうですな……。』かう言つたが、お園は笑つて、一層深く打解けたやうな表情をして、

『好いところがあるでせうか、東京に……』

『ないこともないね。その時は、知つてゐる女將もあるから、話してやらうかね。その代り、僕は色にはなれないよ。』かう言つてIは大きく笑つた。

『まアあんなこと——』

いくらか顔を染めたお園はいつもに似ず艶やかに見えた。

## 二十九

春のやうな暖かな穏かな日であつた。泊り客も皆な立つて行つた午前の靜かな旅舎のひまな時に、Iが野菜畑を横ぎつて、川を眺めに土手に上らうとすると、あとからお園もお光も追駈けて來た。

『あはゝ、あはゝ。』



などと二人は體も崩れるやうにして笑つた。

『何うしたんだえ?』

『何でもありやしないのに、此人が私を突ついて笑ふんですもの。』

『うそ、お前さんぢやないか、先に突ついたのは。』

こんなことを言ひながら、意味もないのに二人は猶ほ笑つた。

『何處へ行くんだえ?』

『一緒に土手に行つて見るんですよ。お園さんの岡惚について……。』

『お園さんの岡惚つて誰だえ?』

『あはゝ。』

とまた二人は體をもがくやうにして笑つた。

『何が可笑しいんだね、そんなに?……』

こんなことを言ひながらTはずんぐ先に立つて土手に上つた。

そのあとから呼吸を切らして、女達は矢張笑つたり何かして上つて來たが、上り切ると、お園は、

『お、好い景色!』

かう言つて四邊を眺め廻した。

山の雪は、今日は暖かいので、いくらかぼんやりしてゐるけれども、川は美しく錆びたお納戸色に流れて、對岸を縦横に動いてゐる河川工事のトロコの汽罐車から、白い煤烟が漲るやうに揚るのがそれと眺められた。土手のすぐ下のところにある小さな渡船場からは、自轉車や車や二三人の客を乗せた一艘の渡舟が、今しも岸を離れて行つたところで、船頭のさす長い竿の動くにつれて、次第に午前の日影のきらきらと美しく輝く水の上の方へと出て行つてゐた。

ふとそこに近く、岸に、水量をはかる照尺の立つてゐるのを、お園は目にして、

『これ? 隠居さんが頼まれて毎朝見に來るのは?』

『さうよ、これよ。』

『隠居さんほどこの川の水のこと詳しい人は他にないんですつてね。何んなに水が出て、隠居さんだけは、落附いて騒がないんですつて——』かう言つて、お園は、その旅舎の隠居が縣廳から頼まれて、年中日に二度づゝ、水量を見に來る話などをTにした。

『ふむ。』

などゝTは聞いてゐるが、『矢張さういふことは年寄でなくつちやわからないからな。』

『何しろ、六七十年も見てゐるんだもの。』

かうお光は言つた。



『でも、しつかりしてゐるのね。あの隠居さん。』

『されはさうさ……。まだあれで、何うかするとあのお上さんが困ることがあるんだつて言ふから……』

『困るつて、何が？』

『わからない人ね。強いんだとさ。』

『馬鹿馬鹿しい……。』

また二人はあはゝと笑ひ轉げるやうにした。

『何も珍らしくないぢやないか、そんなこと。』

かうTが言ふと、

『だつて、七十いくつよ。もう……。それで、一三年前までは、お上さんの他に女が一人位欲しい位だつたんだつて……。』

かう言つてお光はまた笑つた。

三十

それから三人は岸に一軒ある運漕店の方へ行つたり、生洲の舟の水中に沈んでゐるあたりに行つたり、

近所の林から伐出す粗朶を船頭がせつせと舟に積んだりしてゐる前を通つたりして、そここゝとなく土手の上を歩いた。

『のんきで好いね。かうして歩いてゐると……。』

『本當ですな。』

『もう、なづ菜が出てゐる。』かう言つてTはそれを一つ採つた。と、

『さうね。少し摘んで行きませうか。』

それがめづらしいといふやうにして、お園は躊躇んでそれを摘み始めた。

『何してゐるの？』

あとから來たお光は、『あゝもうなづ菜が出てゐるのね。私も少し摘んで行かう。』かう言つて、矢張面白さうにしてそれをさがし始めた。

『いろ／＼なものが出るだらうね？ 春になると……。』

『え、もう少し暖かくなると、つくしなんか澤山出ますよ。芹もこの向うに行くと、随分ありますよ。』

『摘草に來るものもあるだらうね？』

『田舎ですから、そんなにめづらしくないから、大人は來ませんけども、子守なんかよく摘んでます』



よ。』

こんな會話を取交しながら、てんでにそれを捜して歩いた。暫し経つた時には、お光は川の岸、お園は土手の裏、Tはもつと先の方へといふ風に、やがて離れ離れになつて行つたが、再び一緒に集まつた時には、お園の紫のメリンスの前垂の中には、やがて来る春が想像されるやうな青いなづ菜の緑が際立つて美しく満ちてゐた。

『午のおかずが出来た。』

など、Tは笑つた。

ふと立留つて、山の雪の方を見てゐるお園に、

『思ひ出したね、また……』

笑ひながらTが言ふと、

『さうぢやないんですよ。もうあんな人は何うでも好いんですよ。』

『丁度、此處等に當るね。』

Tは重なり合つた髪の深く入込んでゐる山の方を指して見せた。

『さうなりますかね。』

『一度行つて來たら、何うだね。』

『いやなこと！』かう言つたが、急に、お光の方を見て、

『あそこまで行つて見ませうか。Kさんがゐるんでせう、彼處に。』

かう言つて意味ありさうに、下流に遠く見えてゐる赤い白い三角の旗のピラピラと靡いてゐるのをお園は指した。

『行つたつてしやうがないよ。』

『だつて、お前さん、大騒ぎをしたことがあるぢやないの？』

『ちよつと好い男には好い男だけでも、少し威張るから、嫌ひさ、あの人……』

『さうね、ちよつと、さういふところはあつたわね。でも、來い、來いッてよく言ふぢやないの。お茶位飲ませてやるなんて——』

『河川の技手さんかえ？』

かう傍からTは言つた。

Tも此處に來る時、Sの渡しをわたつて來たので、その紅白の三角旗の立つてゐるところは通つて來て知つてゐる。

硝子窓で四面を張つたやうな小さな家屋、そこでは若い技手が一人二人、脊廣か何かで、大きな卓に凭つて、頼りに圖を引いてゐるのをTは見えて來た。下流には、トロコの土を運ぶ響が高くあたりに響い



てきこえた。

午前の日影は美しく川に照つた。

三十一

『實際、色になつて了つては、世話も何も出来なくなるからね。』

『それはさうですとも。』

『不思議なもんだね。……さういふ風に、男と女との間は出来てゐるんだね。』

『さうですね、それは本當ですね。關係があつちや、何うしてもさういふ風には行きませんからね……』

…。

二人は日に日に交情が好くなりつゝあるのであつたが、それを、その濃くなりつゝあるお互ひの心に強ひて垣を結ふやうにして、かれ等はよくこんなことを言つた。

『女の友達と言ふものもまた好いもんだよ。』などゝTは言つた。

それにも拘らず、かれ等の間柄の次第に接近しつゝあるのはお園にもよくわかつた。Tは決してかの女をわるく思つてはゐなかつた。或はいくらか思はれてゐるかも知れないとお園は思つた。従つて離座敷に用を足しに行くのが樂みのやうな氣がして、何ぞと言つてはお園は其方へ出かけて行つた。そして

お光に、

『お園さん！』

などゝ母家の方から呼ばれた。

『本當にしゃうがありやしない。何うかしてるんぢやないか、もう。』

こんなことをお光が獨言のやうに言ふのをお園は耳にした。またある時は、『その證據には、山の旦那のことをこの頃は少しも言はなくなつたぢやないか。』かうお光が親類の娘ツ子に言つてゐるのを聞いた。

『馬鹿におしてないよ。そんな旦那ぢやないんだよ、あのTさんは——』時にはかう辯解するやうにして言つたが、それがお園には嬉しいやうにも、また楽しいやうにも思はれた。もうそのTはすっかり自分のものになつたやうな氣も何處かできてゐた。

Tは一日物を書いてゐたりしたが、しかも夕方は早く切り上げて、風呂が沸いたの知らせに行くときすぐ入つて、それから好い心持さうにして、晩酌の膳をお園の運んで行くのを待つた。時には静枝ともう一人一本になつたばかりの妓などを聘んで、そして賑かに一二時間を過ごした。三味線などもよくわかるらしく、好んで小唄ものなどを選んで、小聲で、

『今朝の雨にまたしつほりと居つづけの……』などゝ唄つた。甚句やサノサを常にガチャガチャと喧しく弾いてゐる藝者達は、後には黙つて三味線を下に置いた。



藝者の歸つたあとで、『本當に此處等には碌な藝者もをりませんね……。皆な、あゝしてガチャガチャ騒ぐばかりを能にしてゐるんですから……。それから思ふと、私のゐた温泉場には、好い姐さんが随分ありましたかね。』

かうお園が言ふと、

『それはあそこいらはこんな田舎とは違ふよ。何しろ、福島が近いんだから。羽二重屋さんが金ヱラを切るからな。姐さんだつて、大抵はあそこは東京種が多いんだからね。』

『本當ですよ。勝次なんて言ふ姐さんは、藝一方で賣つた人で、東京からお相撲が來た時だつて、決して馬鹿になんかされやしないですからね。』

こんな話をしながら、膳を片づけたり、座敷を掃除したりして、やがていつものやうに、縁側の隅にある押入から寢道具を出して、それをすぐ隣の四疊半の副室に敷いた。

『今夜は寒いから、行火を入れて置ませうか。』

など、お園はやさしく訊いた。お園は用事をすまして、『おやすみなさいまし。』かう言つて、いつも軽い佻しい失望を感じながら、敷石づたひに此方へと來た。

## 三十二

しかもお園の目には、一人寝るのがTに取つて此上なくさびしさうに見えた。大抵その時はTは軽く酔つてゐるが、『何うも夜中に眼が覺めて困る。昨夜は一時から目が覺めて、何うしても眠られなかつて困つた。』かう言つたり、『それが眠られないばかりなら好いが、人間だから、色々のことが考へられてね。何うも夜中に一人眠られないでゐるのは辛いもんで。』と言つたりした。

『あゝあゝ、また一人寝るのかな。』

時にはこんなことを言つて、佻しさうにちぢこまつて、頭を此方に向けて、ごろりと寝た。

ある夜は、酒のあとで、百人一首の歌の話をTは持ち出した。『君、あの中に、足曳の山鳥の尾のツて言ふ歌があらアね。』

『ながながし夜をでせう。』

『さう、さう、あの歌は百人一首の中で一番旨い歌だが、何ういふ意味だか、君にはわかるかね。』

『よくはわかりませんが……。』

『あれはかう言ふんだ……。』言ひかけて考へて、『好い歌だなア、考へれば考へるほど好い歌だな。本當に身につまされる歌だ。昔の人も矢張あゝして女を待ち明かしたのだ……。足曳の山鳥の尾のしだり尾



の……』と小聲で歌つて見せて、

『つまり長い長い夜といふことなんだ。その長い長い夜を待つても待つても女は来ずに、一人でほつねんとして寝るのかなアと言ふんだ。丁度、僕の心持をそのまま、歌つて呉れたやうなもんだ。あの歌を吟じて見ると、男がごろりと佗しく丸寝をしてゐるさまが目に見えるやうな氣がするぢやないか。色戀は辛い。つくづく辛いものだと思ふね。』

『さういふ意味ですか、あの歌は——。ぢや、私なんかも矢張同じですね。』

『本當だよ。君だつて同じだとも。矢張それで苦しんでゐるんだ……。』

かう言つて頭を傾けて、『つくづく色戀の世の中だ。辛い色戀の世の中だ。』

あし曳の

山鳥の尾の

しだり尾の

ながながし夜の

ひとりかもねん

かう再び聲を張りあげてTは吟じた。お園はその時はその悲しい節に、そのいかにも辛いらしい色戀の世の中に身も心も引き入れられるやうな氣がした。

ある夜は、眞面目に、

『本當に、友達にならうね。僕の妹にして置かうね。屹度だよ。』  
かう言ふので、

『妹なんかいやですね。』

わざと戯談半分にお園が言ふと、

『いやかえ、妹では……。妹では不足かえ。』お園の顔を見て、

『でもな、一緒になつちやつては、面白くなるからな。また辛い經驗を嘗めなければならぬからな。……妹になつてゐてお呉れよ。』

『え、妹でも結構……。』

『その代り、力になつてやるよ。君だつて不仕合せな女だからな。かうした兄を持つてゐるのも力になるよ。』

『結構ですとも……。』

『それぢや、さうしやう。』

かう言つて、そのしるしだと言つて、Tはお園の手を堅く握つた。

一夜は酒を少し多く飲み過ぎた故か、『苦しい、苦しい！』とTは言つた。お園は水やら藥やらを持つ



て来て介抱した。

## 三十三

お園は離座敷からそつと敷石を傳つて此方へとやつて来た。

胸は頻りに躍つた。誰かに見られやしないかと思つた。誰かに勘附かれやしないかと思つた。(そんなことはない、誰も知つてゐる筈はない。)かうは思ひながらも、我知らず自分の周囲を見廻すやうにした。疎らな庭樹の間からは、まだ戸を閉めない母屋の室からの灯が明るく此方にさして來てゐるのが見えた。

嬉しいやうな氣もすれば、たうとう望みを遂げたといふやうな氣もする、あのTがすつかり自分のものになつたやうにも、またはそのTの體を自分が知つたやうにも……と、心がいやに躍つて、押へようとすれば愈々躍つて、自分ながら餘りに小娘らしいのに氣が附いた。つゞいてその時のさまが歴々と眼に映つて見えた。

『思つてゐないことはないんだよ。お園ちゃんは好きだよ。しかし、さういふことをしてすつたつて詰らないぢやないか。またいろ／＼な苦しい思ひをお互にしなければならなくなるよ。』こんなことをTが言つてゐたことをかの女は思ひ出した。その時、かの女は何と言つたらう。何ういふ顔の表情をした

らう。何ういふ風に胸が躍つたらう。『そんなことをしても好いのか?』かう言はれなくとも、その時山の旦那のことをお園は思つたことを思ひ出した。(たうとうあの旦那にもかういふ風にして離れて行くのだ。)と思つたことを思ひ出した。何うなつて行くかはわからないけれど、自分の運命が益々渦に渦を巻いて行きつゝあることを思つたことを思ひ出した。

互ひに戀の傷手を負つた人達ではあるけれども、矢張互ひに熱い血の流れてゐる男であり女ではなかつたか。また、さうした戀の傷手に悩んでゐる同じ心が益々その互ひの引く力を強める動機とはならなかつたか。お園は、黙つてTの眼を見詰めた。その眼の中には愛があつた。戀があつた。本能の強い力があつた。またTの眼の中にも、決してかの女の心を、體を拒み得ないあるものがあるのをかの女は認めた。

『だつて、しやうがないんですもの。』(あなたには始めてお目にかゝつた時から他人ぢやないやうな氣がしてたんですもの。)このあとの言葉は、それとはつきりは言はなかつたけれども、眼が、表情が、氣分がすつかりそれをTの前に示してゐるに相違なかつた。

それからの女は何を言つたらうか。何も言はなかつたらうか。Tの其後の態度に満足して、心と體とを寄せた以外に何も言はなかつたであらうか。——かの女は獨り微笑せずにはゐられなかつた。

一方ではまた今まで邪魔するものがあつて、それにつかへて久しく流れずにゐた溝の水が、何等かの



春の自然の漲溢に押されて、忽ち元のやうに流れ出したやうな気がした。(これで好い——)といふやうな気がした。

やがて急いでそこから出て来たことをかの女は思ひ出した。もう一人ではない、今までのさびしい一人ではない、かう思つたことをも思ひ出した。その夜はいつもに似ず、氣候が暖かであつたためであらうが、何となくあたりが春の夜でもあるやうに思はれて、兩戸を閉めずに、灯が明るく照つて人聲のしめやかにきこえてゐるのも、何となくかの女の心に相應しかつた。お園はもう一度振返つて一枚明いた戸から灯の微かに洩れて來てゐる離座敷の方を見た。あたりには誰の姿も見えなかつた。

## 三十四

考へて見ると、去年の暮に、T町の旅舎で漂泊してゐた時分、其處から奉公口があつて見ず知らずの田舎に來ることに話がきまつた時分、またはあの朝日のさし透つた松原の中の路を寒い朝風に吹かれながら車の上で震へてやつて來た時分に、かうした運命がその前にあらはれて來ようとはお園はいつ想像したであらうか。田舎の金持の息子、でなければ機屋の旦那、でなければ繭の仲買の男、さうしたものでなしに、他にTのやうな男がその相手にならうとはいふ想像したであらうか。お園は悲しいその自分の運命から生き返つて來たやうな気がした。

生憎その夜は忙しく、遅くなつてからやつて來た泊客などがあつて、仕舞湯に入つたのは、もう十二時すぎであつたが、お光とお饒舌をするにも平生とは違つて何處となく張合があつて、いつものやうに辛い話などはしなかつた。元氣よく背中 of 流し合ひなどをしてお光が出たあとまでも、長く風呂に浸つて、銀杏返の頭を此方に見せたまゝ、をり／＼後れ髪を白い手で掻き上げたりなどした。

と、今まで持つた男のことがゆくりなく其胸に上つて來た。比較して見るといふ積りでもなかつたが、それが色々ひとり手に比較されて來るのが不思議だつた。山の旦那に圍はれた時分に持つてゐた男のことも思ひ出され、ば、初めて娘から女になつた時の男のことも思ひ出されて來た。その時分は、かの女の性慾生活もまだ幼なくて、男の體のことなどは何もわかつてゐなかつた。また男の心などもよく飲み込めてはゐなかつた。初めて本當にかの女のために性慾生活を開いて呉れたのは、矢張何うしても、あの山の旦那だつたなど、も思つた。人間といふものは不思議なものだなども考へた。

妹にしゃうと言つたり、さうした間柄になつては駄目だと言つたり、つとめてその間に越え難い垣を結ばうとしたりしながら、しかも遂にそこで踏留つてゐることが出來なかつたTのことを考へると、ひとり手に微笑まれて來るやうな心持がした。矢張、何うしても遠くて近いのは男女の仲だ……こんなことをも考へた。獨りて思ひ出して微笑した。

湯は何方かと言へば温い方だつたが、却つてそれがかの女の今の楽しい氣分に相應はしいやうな氣が



した。お園は白い半身を茫とした湯氣の中に現はしたり、湯殿に出て體を洗ふでもなしに、ぐづぐづしてゐたり、また湯の中に肩まで沈めたりしてゐたが、早くも着物を着て了つたお光は、

『随分長湯ね。』

『だつて、温るくつて出られないんだもの。』

『そんなに温くはなかつたぢやないか？』

『温るくなつたのよ、もう。』

『ぢや、先に寝るよ。』

『あゝ。』

『お湯の中で、居眠りなんかしちゃいけないよ。』

こんな捨聲を言つてお光が向うに行く氣勢がやがて此方まできこえて來た。

お園はもう一度ちうと靜かに湯の中に身を浸した。今夜ばかりは山の旦那に對する苦しい悶えも何處かに行つて了つたやうな心持がした。で、よく暖まつて、漸くして上つて來たが、寢卷に着替へるとそのまゝ、何も彼も満足したやうにして、いつもの床の中に入つて、ぐつすり寝て了つた。毎夜氣になるお光とFのことなどはもうかの女の頭の中になかつた。

三十五

O町から此の町を経て、川を渡つて、K町まで連続せるB線の鐵道を計畫してゐる人達は、をり／＼この旅舎に來て午飲を食つたり泊つたりして行つたが、その中の一人のNといふ二十七八の男はやつて來た時からお園に眼を附けてゐるらしく、此の前用事で二三日滞在した時にも、いろ／＼いやらしいことを言つたり何かしたが、そのあくる日の午頃に仲間のもの二人と一緒にやつて來て『何だ？ 離座敷は塞がつてゐるのか。』など、言つて、そつちを樹の間から覗くやうにして、爲方がなしに母屋の方の一間に來て酒を飲んだ。

『園公は何うしたね？』

お光を捉へてかう聞いたりした。

お園が離座敷から出て來ると、『おい、此方へ來い。』と言つて手招きした。

來ると、

『何者だね？』

『離座敷のお客……？』

『お、お、お。』



『東京の方……。』

『長くゐるのかね、もう。』

『もう、一週間位ゐらつしやるわ。』

『河川の方の人？』

『いゝえ、さうぢやありません。』

『何の用で來てゐるんだえ？』

『存じません。』

かうお園は言つてすぐ向うの方へ行かうとすると、

『おい、園ちゃん、此處に來てゐたつて好いちやないか。少しお酌位して呉れても好いだらう。』

『今、ちよつと用をして來ますから。』

かう素直にお園は言つて、そして廊下を店の方へ行つた。

其處に來ても、お園は落附いて長くゐるに、ちよい／＼席を外して立つて行つたり、敷石傳ひに、物を持つて離座敷の方に行つたりするのが此方から見えるので、更にそこにお園が行つた時には、Nは、

『好い男なんだらう、離座敷のお客は？』など、お園に言つた。

それとは知らずに、離座敷の障子が明いて、Tが退屈でもしたやうに、そこにある下駄を突かけて、

庭の疎らな樹の間を抜けて、野菜畠の方へ出て行くのを見た時には、

『あの客かえ？』

『え、さう……。』

『好い男でもないね。もう年を取つてゐるね、餘程……。』

これでいくらか安心したといふやうにして、Nは仲間と一緒にお園を傍から離さないやうにして酒を飲んだ。『もうしめたもんだ。これで、向う側のあのS一家を動かして、五千株も持つて貰へば、あとは刃を迎へずして解けるやうなもんだ……。唯、あのS一家だけだよ、難物は……。だからあれだけは大いに熱心にやらなくつちやいけない……。』などとNは言つた。鐵道を敷いて、地方の繁榮を謀つてやるといふのを一方ならず鼻にかけてゐるらしく、曾ては旅舎の主人を捉へて、『これで、汽車が出來て見給へ、この町なんかぐつと違つて來るぜ。殊に、この家なんか何んなによくなくなるか知れないよ。』などと言つて、暗にもつと十分に世話をして呉れても好いことを諷した。ある時は、『これでも、これが成功しさへすれば、僕だつて發起人だから、千株や二千株は黙つて貰へるからな。その時は、お園ちゃんなんかにも、何でもしてやらアね。』などと言つた。お園は唯笑つて聞き流した。Tが散歩から戻つて來た時には、お園は急いで立つて其方へと行つた。



Tのことは次第に深くお園に飲み込めて来た。その陰にゐる一人の女——それは狭斜街の女であるといふことも、その女にTは全身を注いでゐるながら、しかも完全にその女の愛を得てゐないといふことも、その女には別に惚れた男があるといふことも、そのため水と火の中にあるやうな苦惱をこれまでに味はせられて来たといふことも、しかもその女とはまだ切れてゐないといふことも、何も彼も段々とわかつて来た。お園はこれを機會に、かうした田舎を去つて東京に出たいやうな微かな希望を胸の中に起したけれども、しかもすぐ一緒に伴れて行つてと言つたやうな無理なことも言はなかつた。

一方山の旦那のこともまだお園には思ひ切れなかつた。何故なら、さつき店にゐた時、少年の郵便配達が持つて来た二三通の手紙の中には、山からの便りがあつて、そこにはこの間の手紙とは打つて變つて、やさしいことが縷々として書いてあつたからでもあり、また心からその山の旦那を思ひ切つて了つたわけでもないからでもあつた。(此方が離れてゐると向うで思つて来る。此方が思つて行くと、向うで離れて行く。)かういふ意味のことをTが言つたが、男と女の仲はさうしたものだなど、言つたが、(成ほどさうだ。)とその手紙を帶の間に挟みながらお園は思つた。

それにTとさうした仲になつたことは、嬉しくもありまた力にもなることではあつたけれども、此方

からすべてを舉げてTに縋つて行くにはまだ餘りに早いやうにかの女には思はれた。もつと深くTの身の上や、心や、そのかげにゐる女を知らなければ、出て行くにしても容易に行かれないやうな氣が何處かでしてゐた。

しかしそれは心の底に持つてゐる考へで、何ぞと言ふと、離座敷の方にお園の心が引張られて行くのは事實であつた。彼等はもう客と旅舎の召使との關係でもなければ、單なる馴染または友達といふやうな間柄でもなかつた。不思議にもかれ等は以前のやうに笑つたり戯れたりまた騒いだりするやうなことはなくなつた。唯、黙つて眼と眼とを合はせて笑つた。

もう他人ではない。たとへ、このまゝ別れて了つても、決して他人ではない。他郷と他郷に一年二年を経過しても、再びまた逢ふ時には、ぴたりと心と心を合はせることが出来る身の上になつて了つてゐるのである。また假令どんなに遠く離れて了つても、またこれきり逢はないやうなことがあつても、かれ等は矢張何處までも他人でなしに、互ひに互ひのことを思ふことの出来る身の上となつて了つたのである。(わるいことをしたね。)と言ふやうな眼の表情をしてTはお園を見た。

『東京に出てお出でな。』

とも、Tはもう言はなくなつた。

しかもお園は別に變つたこともないやうにして、朝夕の膳を運んだり、行火を拵へて持つて行つてや



つたり、朝は平氣でいつものやうに赤い褌をかけて、湯氣の立つバケツを其處に持つて行つて、長い縁側の拭掃除をしたりした。そしてをり／＼見ないやうにして見る眼が、矢張見ないやうにして見てゐるTの眼と宙に合つて互ひにつこり笑つたりなどした。

此頃にめづらしいやうな暖かい日和の好い日が續いた。西風も滅多に吹かなかつた。四目垣の下の福壽草の黄は既に老けて、早梅の枝には點々とした花が晨の星のやうに白く見え出して來てゐた。午前の日影はTの坐つてゐる机のあたりまで長く明るくさし込んで行つた。

三十七

Tが來てから、十日目の午後二時頃のことであつた。その日は、連日の好い日和にも似ず、朝の中はわるく曇つて、何うにか天氣が變るさうなと思はれたが、午少し過ぎる頃から、果して小雨が降り出して、番傘や蛇の目傘が町の通りから土手の方へと上つて行くのなどが見えるやうになつた。小さな雨滴の音の靜かに軒の樋から落ちる氣勢などもして來た。

ふと深く幌をした一臺の車がN屋の前に来て留まつた。

それはT町から客を乗せて來た車であるといふことは、一目見ただけで、帳場に坐つてゐた主人にはわかつたが、やがて車夫の外した幌の中からあらはれた二十八九になる色の白い丸髻に結つた女客を見

た時には、主人は眼を睜らすにはゐられなかつた。それは此處等ではつひぞ見かけたことのない、扮装も眼に立つほど立派な、ダイヤの指環などをはめた、裾からは派手な長襦袢がほらほらとこぼれて見えるといふやうな女客であつた。

(入らつしやい。)

とも言はずに立つて主人が其方へ行くと、女客は莞爾しながら、その入口のところ立つて、

『あの、此方に、Tさんといふお客がいらつしやる筈ですが……。』

『へえ！ いらつしやいます。』

と主人は急に頭を下げた。

それで女客は初めて安心したといふやうにして、帯の間から小さな財布を出して、きめてきた賃銀よりのいくらか多く車夫に渡して、『何うも難有う御座います。』など、言はれてゐるが、

『おい、誰かゐるのか。Tさんのお客様！』

かう主人の聲をき、つけて、客のない暫しの暇の間を、一階の階梯の向うの六疊の一間に坐つて、旅舎の娘や、上さんや、お光と一緒に自分の襦袢の襟のつけ替へなどをしてゐたお園は、急いで立つて其方へと出て行つたが、はつとして、度膽をついたやうにしてそこに立留つた。『Tさんのお客様』と言つた主人の言葉が耳に入つてゐるので、急にお園の胸は烈しく躍り出した。



てつきりそれに相違なかつた。

お園はちつとその女客を見たが、そのまゝ、すぐ踵を旋らして、急いで先に立つて、その女客を案内するといふよりは、寧ろ早くこれをTに知らせやうとするやうに、長い廊下を足音高く其中ほどまで行つて、その敷石に置いてある下駄をつつかけて行かうとすると、

『おい、おい、御案内をするんだよ。』

あとからつゞいて来た主人に呼び戻されて、止むなくお園は二足三足戻つて、もう一足そこにあつた下駄を女客のために並べたが、主人の其處まで持つて来た信玄袋を受取つて、そのまゝ、先に立つて、敷石傳ひに離座敷の方へと案内した。

『離座敷なの？』

『え……。』

お園の顔には赤く血が漲つた。

疎らな樹の間を通つた時にも、Tはまだそれと夢にも知らないらしく、晴れた日にはいつも明けておく障子もびつしやり閉めて、此方から上つて行つても、それを明けやうともしなかつたが、入つて見ると、Tは行火に凭つたまゝ、俯伏になつて、心持好ささうに居眠りをしてゐるのであつた。

『まア、およつてるのね。』

かう言つた女客の聲が耳に入つて始めて目を覺したらしいTは、吃驚したやうにあたりを見廻して、

『や、やつて来たのか。』

三十八

『えらい處にゐるのね。』

こんなことを言つて、女は兎に角此處までやつて来て安心したといふやうに、『あつちこつちで聞いて来たんですよ。新聞社にも電話をかけたし、Sさんにも逢つたし、奥さんにも逢つたわ。』

Tは何か言はうとして言はずに、困つたやうな、きまりのわるいやうな顔をしてゐるが、お園が信玄袋を置いてそこに立つてゐるのを見て、

『火を持つて来て呉れ給へ。』

と言つた。Tは顔を赤くはしてゐるが、さう命じた言葉が何となく素氣ないやうにお園には聞えた。

お園は體が赫としたり、また水のやうに冷めなくなつたりするのを覺えた。かの女は恐るべき、とても自分などは相手になることの出来ない競争者をそこに發見した。あの美しさ、あの際だたしさ、あの立派な扮装、あの形の好い丸鬚と長いすつきりした襟足、何うおとしめて批評しても、あんな女とは言ふことの出来ない競争者でそれはなかつたか。またそれはとても田舎の旅舎の女中風情で何う彼う言ふこと



の出来ない競争者ではなかつたか。たとへその女に他の男があつてTがそのために苦しみ、そのために一時こんな田舎に來てゐることになつてゐるとはいへ、また現に昨夜もその女をTはおとしめて『そつちの方はもう何うにもならないんだよ。もう、お前の山の旦那と同じことだよ。』など、言つてゐるとはいへ、かうしてわざ／＼その女が訪ねて來るところを見ると、Tとその女との間には、まだ切つても切ることの出来ない愛情の羈絆が纏綿しつゝあることはそれは知れ切つたことであつた。曾て山の旦那の細君に逢つた時には、此方にすまないといふ心持があつたので、さうした競争心は多少起つたにしても、それは寧ろ微々たるものであつたけれど、今は却つて深い力強いしかも何うにもならないやうな失望の雜つた嫉妬の起つて來るのをお園は認め得なかつたか。(あんなうまいことを言つて、此方から進んで行くやうに持ちかけたのは、あれは男の巧な手管で、まんまと自分が乗せられて行つたのではないかとさへ思はれた。折角つかんだと思つた運命も忽ち旋風の爲めに吹き卷かれて行つて了つたやうな氣がした。)

大きな爐から、堅炭のカンカン起きたのを火箸で挟むのも、何だか自分の心を暗示されてゐるやうで、一つ挟んで、長い火箸を下に置いて、お園はつゞけて溜息をついた。一面に眞赤に起きた爐の火は、赤いかの女の顔に火照つた。

すぐその傍で何か料理をしてゐた主人は、

(それで、Tさん、此處に長く逗留してゐたんだな。)

かうはつきりとは言はないまでも、それに近いやうなことを言つては、お園に笑ひかけるやうにした。

で、漸く火を臺十能に取つて、此方にやつて來ると、廊下のところで行違つたお光はまたお光で、

『Tさんの奥さん來たんだつてね。別品さんだつてね。』

かう言つていやに冷かすやうな笑ひ方をした。

『奥さんぢやありやしないよ。ちよつと見たつて解るぢやないか。』

かうお園は言つたけれど、お光の言つた言葉と、その冷やかな笑顔とは、かの女の胸を刺すやうにした。

## 三十九

お園はその時から成るだけ親類の娘つ子に離座敷の用事をさせるやうにした。しかし絶対に其處に行かない譯には行かなかつた。それにその二人を離座敷に遣つたまゝにして靜かにそれを眺めてゐるといふこともかの女には出来なかつた。

恐らく其處に行つた時のかの女の眼ほど鋭敏に働いたものはなかつたであらう。その眼は男をも見る



と共に女をも見、男と女の間柄の濃さ淡さをも見、男だけを離して其を自分の方に引寄せるやうにし、男にいろ／＼な恨みを言つて見せ、自分の當然持つてゐる要求を言つて見せ、遺瀨ない愛を見せ、かうしたハメに陥つた自分の悲しさを見せ、男の薄情を責める瞋恚を見せた。否、さうして自分の方の心を男に見せると共に、かの女は中に挟まつて困つたやうな男の眼を見、濟まないと詫びるやうな眼を見、また此方の眼の動き方如何に由つては、(だつてしやうがないぢやないか。急に思ひもかけずにやつて来たんだから)といふ焦燥したやうな眼を見、かの女との關係を女に悟られまいとする臆病な眼を見、(まア、落附いておいでよ、あとでわかるから)といふやうな眼を見た。これに比べては、女の眼は、それとはつきり知つてゐないために、單に旅舎の女中としか視てゐないために、さう大して深く複雑には動いてゐなかつたけれども、それでも何うかすると、ちよつと凝視めるやうな、かすかに疑つて見るといふやうな、鋭い尖つた眼色をしてかの女を見またTを見るのをお園は見た。そして口ではさうした社會に多く見る女のやうに、如才なくお園に話しかけ、Tの世話になつた禮を言ひ、茶代を餘計に置き、多くの祝儀をかゝる女に呉れた。Tの言つたやうな二人の心の紛争は、少しもその顔に見せないばかりでなく、細君氣取で、Tの世話を種々とするやうな態度をお園に見せた。

火照つて爲方がない顔をお園がしてゐると、

『暖かるところね、此處は——。温泉場見たいなところね。』

など、その女は言つた。

(そんなに邪魔になるなら、もう参りませんから。)かうした眼をして凝とTを見てそして此方に戻つて来た時には、お園は體がわなくと顫へるやうな氣がした。Tの言つたことはそれは本當であらう。女を避けてかうした田舎まで來てゐるといふのは、決して男の手管で言つたのではないであらう。本當にあの女には他に惚れた男があつてそれでTを苦しめてゐるのであらう。しかし、かうしてわざ／＼やつて來られて見ると、離れやうとした心がまたわけもなく即ち行つて、ずる／＼と女の方へ引寄せられて行く男のさまが、はつきりと手に取るやうにお園には見えた。あの美しさとやさしさと恰憫さを持つた女は、Tをその掌中に收めるについて何の手間ひまを要しないであらう。Tにしてもまた、その愛情の復活についてわななくやうな喜悅を感じてゐるであらう。そしてかの女などはTにはもう何うでも好くなつて行つてゐるであらう。かう思ふと、辛い辛い心がお園に湧いて來た。

お園には、あゝしてやつて來る山の旦那がないのである。かの女の戀心は、塵埃に埋れた珠玉のやうになつてゐるさへあるのに、その上に更にかうした火と水とが新たに押し寄せて來たのである。(ああした仲にならなければよかつた。)かう單純に、または、(金でも澤山貰つてやるから好い。)かう手輕に考へてすまして了ふことは出來なかつた。従つて、その離座敷で進行しつゝあるTとその女の戀心の復活の光景が、痛くかの女の眼の前を繞つた。



何處にゐても、母屋の一間にゐても、または厨に近い土間にゐても、井戸流して物を洗つてゐても、離座敷のことが絶えず氣に懸つて、何ぞと言つては、疎い樹木を透して微見えてゐる室や縁側や半ば明けられた障子の方やらにのみ眼を遣る氣になつた。そこに近い母屋の一間にゐた時には、Tが女と一緒に何か睦じさうに笑つたりする聲が手に取るやうにきこえて來た。

二階の飲客の一騒ぎして歸つて行つたあとの掃除をしに上つて行つたお園は、見るともなく、其處は丁度離座敷を下に見おろすやうになつてゐて、しかもその室の中まですつかり一目に且つ離れて見るこゝとが出来るやうになつてゐるのを發見して、掃除の手を留めて、窓に凭るやうにして暫しひそかにぢつとそれに見入つた。Tを前に、女は斜に品をして坐つて、甘えるやうな態度で、何か頻りに話してゐるのがかの女の眼に映つた。Tは時々笑つて、そして點頭くやうな形をして見せた。

暫しの間、身動きもせずにお園は熱心にそれを見てゐた。と、いつの間にかそこに上つて來てゐたお光は、

『何を見てゐるのよ。そんなに嫉妬を焼くもんぢやなくつてよ。』

かう言つて、軽くお園の肩を叩いた。

『まア、びつくりした。この人、いつあがつて來たの？』

『あんまり夢中で見てゐるからだよ。岡焼は體に毒だよ。』

『……………』

『ちよつとお見せ、よく見えるの？ 何をしてゐるの？』さういふお光も矢張それに引寄せられるといふやうにして、そこに立つて、暫し室の中の二人を見てゐるが、『矢張、あゝして睦じくしてゐると妬けるね。』と言ひながら、いきなり聲を立て、

『Tさん——』

と呼んだ。それを留めやうにも留める暇はお園にはなかつた。

『Tさん、こゝにゐるのが見えて？』かうつゞけて高い聲で言つて笑つた。

Tは不思議な處から自分を呼ぶものがあるのに驚いたといふやうに、あたりを見廻して、暫しはそれとわからなかつた様子だつたが、漸くそれが二階の上から來たことに氣が附いたらしく、そのまゝ立つて縁側に出て來た。

『分つたでせう。私達のゐるところが——』

かう言つて又あはゝと崩れるやうにお光は笑つた。お園も爲方なしにそれにつれて一緒に笑つた。

『えらいところから見えてゐるんだな。』



かういふTの聲がした。

『さつきから見てるのよ。』かう言つて、お光は指を二本口に當て、チウと啜る眞似をして見せた。それは此間Tが外國の女の話をした時、それが喜悅の意を表はすものだといふことを二人に教へたのであつた。

お光はもう一度それをやつて、

『さうでせう？』

と首を傾げて訊くやうな素振をして見せた。

『あはゝ。』

とTは笑つた。

『私より先に、此人が見てたのよ。』お園が留める暇もなく、お光は平氣でこんなことを言つて了つた。

『うそよ。好い加減なことを言ふのよ。』

それには頓着せずに、『Tさん、好いことをきかせて上げませうか。』かうお光が言つて何か言はうとするのを、お園は今度は必死になつて留めた。お光はまた崩るゝやうにして聲高く笑つた。やがて女も縁側に出て來た。

四十一

風呂の沸いたのを知らせに行つて、此方に來て待つてゐると、運よくTは獨りて手拭を持つてやつて來た。そこでお園は初めてその傍に寄つて行くと、

『急に、やつて來られてね、困つちやつたよ。』

かうTは申譯のやうにして行つた。つゞいて、『何アに、そんなことはありやしないよ。大丈夫だよ。』などゝ言つた。お園はいろく言ひたいことが、胸に一杯に疊みかけて漲つて來てゐたけれども、今の場合、さうしたことを細かく言つてゐる暇もなかつた。氣休めとしか思へない言葉にも満足してゐなければならなかつた。

それでも風呂の中では、Tの背中を洗ひながら、思ふ存分とまでは行かないまでも、心の中の懊惱をいくらかは言つた。Tも困つてゐるらしかつた。『僕はそんな薄情な男ではないから安心しておいでよ、』と言つたり、『さうぢやないよ。決して誤解しては困るよ。』と強く押附けるやうに言つたりした。燃える嫉妬を言ひ現はすには、いかなる言葉も不満足で、不十分で、物足らないことをお園は感じた。背中を流しながらも、一度自分のものになつたTの體が再びその女のものとなつて行くのを思つて、赫と體中が燃えて來るやうなのを覺えた。



『それだけは誓つて置く。決してそんな薄情なことはしない。』  
かうTは眞面目に言つた。

お園は何うすることも出来なかつた。それ以上に、Tに對して深く求める理由も資格もまだ持つてゐなかつた。

Tが返す返すもそのことを言つてなだめて、風呂からあがつて行くと、今度は女が艶な姿をして、其處にやつて来て、ダイヤの指環だの、純金の浮彫の指環だのを、金簪の足に連珠のやうにつらねて、『これをちよつと預つて置いて下さいな。』と軽くそこにゐたお園に頼んで、それから金の帶留を外し、黒縹子と琥珀の腹合せの帶をキウと音させて解いて、派手な襦袢をちらほら見せながら、すつほりと脱いだ着物を丸めて、白い肌をあたりに際立たせつゝ、風呂場の中へと入つて行つた。

『お加減はいかゞですか。』

外にゐた親類の娘つ子はかう言つてそこに顔をさし入れた。

『結構ですよ。熱い位……。』

『少しうめませうか。』

『この位で丁度好う御座んす。』

やがて後向きに、形の好い丸髻を此方に見せて、心持よささうに湯に浸つてゐるのをお園は見た。

お園は餘程親類の娘つ子に任せて、此方に來て了はうかと思つたけれども、ゆくりなく起つて來た一種の反感見たいなものに催されてわざと自分で進んで行つてその背中を流してやる氣になつた。その女が夢にも知らないことを、つい今の前、Tと話したといふことが、また人知れず自分の體とTの體と女の體と相續いてゐるといふことが、またそれをその女が少しも知つてゐないといふことが、いくらかかの女に優越の位置に身を置いてゐることを思はせた。それに、この女がTに與へた苦しみの報酬を、たとへ少しではあつても、かの女が復讐してやつてゐるといふやうな氣も何處かできてゐた。お園はTと同じやうにその女の背中を洗ふために、裾をかゝげてその後を廻つた。

## 四十二

その夜はお園は辛かつたことを思ひ出した。冷めたい床に入つてからも體中が燃えて、ひとり手に溜息が出て、何うしても眠られなかつたことを思ひ出した。

眼の前には赤い白い色彩がチラチラした。女の艶に笑ふ顔が歴々と見えた。そこでは、その離座敷の間では、楽しい戀心の復活が行はれつゝあるのである。男が女に無條件で引寄せられて行つて了つてゐるのである。女は何の程度まで深い心でわざとこの田舎までやつて來たかわからないけれども、その女の戀の程度如何に拘らず、男の方の心は、忽ち女の腕に引張られて行つて了つてゐるに相違ないの



である。かの女のことなどはもう何うでも好くなつてゐるに相違ないのである。

そればかりではない、晝間旅舎の主人が言つたやうに、單にその女とこの川沿ひの静かな旅舎に相逢ふがために、そのためにのみこの田舎にTは十日も滞在してゐたかも知れないのである。女に他に男があるといふことも、その女の心を完全に得ることが出来ないで悲觀してこの田舎に遁れて來たといふことも、皆なかの女を釣るため、引寄せするためのTの手管であつたかも知れないのである。

(しかし、そんなことはない。それは餘りに邪推すぎる。)

それでは餘りにかの女の立場がなくなるやうな氣がして、もしまた本當にさうならば、かの女がいかにも愚であつたかといふことが堪らなく腹立たしいやうな氣がして、強ひてそれを押へた。

夕飯の時には、お園は辛いのを堪へてその給仕をした。此方から強ひて親しみを表はさうとするのをTはつとめてそれを避けるやうにした。それは女に知られては困るからではあらうが、無理はないとは思はれたが、しかもそのTの態度がお園には腹立たしかつたことを思ひ出した。女が酌をしやうとするのを負けずにかの女が横合から度々酌をしてやつたことを思ひ出した。靜枝が聘ばれて、しかもその聘ばれたのは、女がその三味線を借りてその藝を見せるためであつたことを思ひ出した。ちやんとわかり切つてゐるのに、細君らしく見せかけやうとして、『何うも暫く三味線なんぞ持つたことがないもんだから。』など、言つたことを思ひ出した。

酒がすみ、夕飯がすみ、靜枝が歸つて行き、最後に夜の寢道具を出す段になつた時には、旅舎の主人の命令で、縣廳の役人でも來た時でなければ減多に使はない絹布の夜具を、お光と二人で戯談などを言ひ言ひ母屋から運んで行つたが、その時はたまたま辛かつたことを思ひ出した。爲方がないので、これも、してはならないことをした罰だなど、思つて、自ら責めてそして自ら慰めた。

女が長襦袢一つでゐるところへ水などを持つて行つて、そして(おやすみなさいまし)と言つて、お園は此方へ戻つて來たことを思ひ出した。

それに、Tの許に東京から女が來たといふことは、物見高い田舎の客達の噂の種となつて、何處の室でもその話をしないものはなかつた。一階に滞在してゐる連中などの間にもその話が出てゐて、『お園さん、何うだね。少しは妬けるだらうね。』など、Fからかはれた。

いろ／＼に考へて來ると、自分ながらあやまれるやうな激情が起つて來て、堪らない孤獨の涙が冷めたい夜着の襟をぬらした。お園は終夜轉輾反側した。

四十三

いつも夙起のTであるのに拘らず、朝日のさして來る時分まで離座敷の雨戸は明かず、明いた時には、女がだらしない姿をして、髪の亂れた白粉のはげた顔を其處に出して剛に行つたり、暫く經つた後には、



長い廊下の隅に長襦袢のまゝでやつて来て鏡を借りたり、三本足を出して貰つたり、油を少しお園から分けて貰つたりして、長い間かゝつて手水を使ひながらおつくりをしたが、やがて三本足を疊のところ  
に二本さしたまゝで、庭下駄を軽く突かけて敷石つたひに艶な姿をして歩いて行つた。

その日は、昨日に引比べて、好い天気であつた。風も吹かなかつた。朝飯をすましてから、二人は睦じ  
さうに並んで、川を見に土手の上に行つた。此方で見ると、二人は歩いたり、立留つたり、山の雪  
の閃耀を眺めたり、川の方へ下りて行つたりするのが、さながら活動寫眞でも見るやうに際立つてはつ  
きりと此方から眺められた。

午飯の給仕をした時には、

『何うです？ 東京に出ていらつしやいな。こんなところにあるたツて爲方がない。いくらも好いとこ  
ろがありますよ。お世話ならいつでもしますよ。ね、貴方。』

『何うぞ……』

『本當ですよ、本當なら、そのつもりで世話をしますから。』

『行つたら、何うだね？』

かう傍からIも言つた。しかしそんな言葉に乗ることが出来やうか……。

果してさうなつて行かなければならない運命がやつて来た。それは午後三時すぎであつたが、お園が  
廊下に立つてゐると、此方にこつそりやつて来たIは、幸ひあたりに人のないのを好い機會にして、丁  
度空いてゐた母屋の一間にお園を誘つた。

矢張、完全な戀の復活が出来たのであつた。Iはさうは言はなかつたけれど、兎に角今夜一晚泊つて、  
明日は午前中に東京に歸るつもりであることがお園にわかつた。

『いや、それで歸るんぢやないけれど、兎に角、餘り長くなるし、用事も彼方にたまつてゐるからね。

何うだね、お前も東京に出て來ないか？』

『だツて……』

『本當にさ……』

『私なんか駄目よ。矢張田舎者ですから、田舎にゐる方が好う御座んすよ。』

『何うも困るな。屹度さう誤解してゐるんだと思つた。さうぢやないんだよ。それや長い目で見てゐ  
れやわかる……。何アに矢張あれは駄目なんだから。』

『……』

Iが懐から紙に包んだものを出して、それをお園に渡さうとすると、

『好いのよ。そんなもの……。そんな積りぢやなかつたんだから。』



かう言つてお園はそれを突返した。

『まあ好いから……。僕だつて、そんなつもりでやるんぢやないよ。小遣にでもしろつて言つてやるんだ。こまつた女だな、さうぢやないツてば！』

Tは無理にそれをお園の帯の間に捻ぢこむやうにして、『屹度、近い中に来るからね。そんな薄情な男ぢやないよ、僕は——』

『いりませんよ。これは。』

かうまた返さうとするのを、

『そんな強情を言ふもんぢやない。屹度だから、屹度来るから。誓つて置くから。』

無理にそれをお園に取らせた。赤い顔をしたお園の眼からは涙が流れた。

## 四十四

くやしきぎれに、かの女とTとの關係を女に知らせてやらうかなどと思つて、わざと遠慮なくTの前で振舞つて見せたり、唯の馴染では言はないやうなことを口にしてTを困らせたりしたが、しかもその運命は何うにもならず、いよくTが女と共に東京に歸つて行く日の朝は來た。

Tは返す返すも、隙を見ては、お園を一間に誘つて、そんな薄情な自分ではないといふことを言ひ、

遠くない中に屹度再び此處にやつて來ることを誓つた。

しかしそんな言葉が何の役に立つてあらう。そんな言葉をあてにして、何うして黙つて待つてゐられやう。一度別れて行つて了つては、後は何うなつて了ふかわからないお互ひの身の上である。さうした美しい相手を持つてゐるTが堅くその約束を守つて再びかの女に戻つて來やうなどは、今の場合、何うしてもお園には考へられない。矢張、自分は捨て草の、根もあらはに、葉は萎れて、やがては枯れて行く運命が相當してゐるのであらう。この辛い、男に離れ難い戀心も、路傍の塵に捨て去られて行く身の上に定められてゐるのであらう。かう思つたお園は、もう何も言はなかつた。昨夜まで二度も三度もTに戻さうとした包金をもう戻さうともしなかつた。それに由つてのみ唯その苦惱を忘れるといふやうに、赤い襷を十文字に綾取つて、せつせと拭掃除をしたり、先に立つて風呂に汲込む水の井戸のポンプを押ししたりした。離座敷に行くにも、唯、旅舎の女中としてのみの心持で行つて、何んな用事をもわざと平氣な顔をしてやつた。

二人は朝早く立つて、M町の聖天祠にお詣りして、それからO町へ行つて、あちこち見物して汽車に乗るやうなことを言つてゐるが、しかも朝はゆつくりとして朝酒を飲み、もう一度土手の上に行つて川を眺め、綺麗におつくりをした女と一緒に静枝の家に行つて見たりなどして、いよく出發の用意に取り懸つたのは、もう十一時も過ぎて、かれこれ午にならうとする頃であつた。旅舎の勘定書をお園が持



つて行つた時には、女は信女袋の中にいろ／＼なものを入れて、これから帯を締め直さうとするところであつた。ダイアの指環や純金の指環は、男のメリンスの包や、金時計や、襟巻などと一緒にそこに散らばつてゐた。

旅舎の主人も、澤山貰つた茶代の禮を言ひに其處にやつて来た。と、Tは、

『何うもいろ／＼世話になつた。また、その中やつて来るから、その時はまた懲りずに世話をして貰ひますよ。春になると、またのんきで好いでせうから。』

かう如才なく言つて、『M町には川を渡つて行くんですね？』

『左様で御座います。川を渡つて了ひさへすれば、聖天さままでは、もうぢきで御座います。もう一里とは御座いません位で、一田圃越しさへ致せば、もう向うに森が見えますから。』

『そこからO町へ行く路もわるくはありませんね。』

『え、もう好い路で御座います。縣道ですから、T町へ行くのとは、ぐつと宜しう御座います。』

かう言つて、茶代の返禮にと赤い丸い盆に載せて持つて来たタチルだの、繪葉書だのをその隅に置いた。

やがて、すつかり支度の出来た女は、

『それぢや好いのね。お園さん、大變お世話になりましたね。』

かう言つて日の當る縁側の方へと出て来た。

## 四十五

『川を渡つてから車に乗らう。渡場はすぐだから。』

『さうね。』

で、二臺の車を後にして、二人は土手の方へと歩いて行つた。あとからは、旅舎の主人も、隠居も、お光も、親類の娘ツ子も、小僧も、渡場まで見送るつもりで、ぞろ／＼とついて行つた。

お園も後ればせながら出て行かうとすると、静枝もそこにやつて来てゐた。

『お前さんも来たの？』

『え。』

で、かれ等もあとから續いた。

今日も風はなくて好い日和であつた。山の雪は閃々と美しく日に輝き、岸に偏つて流れる川の水は、錆鐵納戸の色を湛へて、寒く小さな瀬をつくつた。對岸から出た一隻の渡舟は、日影のキラキラと碎ける中流を今しも此方へとやつて来やうとしてゐるところで、明るい光線の中に、自轉車や、車や、中折帽や、尻をからげた商人らしい男やらが黒く際立つて指さされた。



小さな堀立小屋のやうな渡船場の前で、一行はその渡舟の次第に此方に近寄つて来るのを待つた。

誰の胸にも淡い離愁——離愁と言ふほどではないが、久しく滞在して馴染になつたものに別れる情緒が微かに渦巻きつゝあつた。昨夜、女に、何處か東京に出る好い處はないかと頼んでゐた静枝は、Sとの關係が知れて、旦那との間もいくらか離れ心地になつてゐるのであつたが、女はその傍に行つて、『ではそつちの話さへきまれば、いつでも手紙をおよこさないよ。いくらもありますとも……』などと小聲で言つた。(藝はさう大してないけれども、容色が好いから、場合に由つては、うちに抱へて置いても好い。)女はかう思つて、さつきその家を訪ねた時にも、借金の話や、着物のな話どをもしたのであつた。

『大變世話になつたね。』

かうTはわざとお光に向つて話しかけたりした。

主人は主人で、

『鮎の時分には、是非また入らつしやい、こゝでは鮎は若鮎ばかりで、その盛りの頃は、まだ禁漁ですけれども、少しは何うにかかりますから……。』

こんなことを言つて、禁漁規則の出来ない前には、鮎小屋などといふものが川の岸に澤山に出来てゐて、轆轤仕懸の網で若鮎を獲つた話などをした。

一人離れて、赤い顔をして、さびしさうに土手の上に立つてゐるお園に、

『ちよつと、ちよつと。』

などTは聲をかけた。『また、来て世話になるよ。』

『え、何うぞ……』

さびしい笑ひがお園の顔にあつた。女は振返つてお園を見た。

かうしてゐる中にも、その一隻の渡舟は次第に岸へ岸へと近づいて來た。やがてそこについてざろざろと客が下りると、今度は待つてゐた客が代つてそれに乗り移つた。二人の車夫は、代る代る手傳つて一臺づゝその車を横に舟に乗せた。別れる時が遂に來た。

『左様なら。』

『左様なら。』

女とTとは車を挟んで並んで乗つた。また別離の言葉は繰返された。水の滴る船頭の長い竿の動くにつれて、舟は再び川の上へと出て行つた。

一人離れて立つてゐたお園は、凝とその舟の動いて行くのを見送つた。いつまでも、いつまでも。皆ながざろざろ歸つて行つた後までも……。舟は暫らくして對岸に着いたが、やがてTと女とが並んで靜かに歩いて行くのが小さく此方から見えた。



四十六

それから二三日の間、お園は黙つて働いてゐたが、ある時、急に、一日二日の暇を貰ひたいことを主人に申し出た。

『何か急な用事でも出来たのかね。』

凝とお園の顔を見詰めるやうにして、旅舎の主人は訊いた。

『別に、急な用事が出来たつて言ふんでもないんですけども、是非一度山まで行つて来なければと思ひまして……。手紙や何かでは、事情もよくわかりませんし、また別れるなら別れるで、きつぱり話をきめて来たいと思ひますから……』

『手紙でも来たのかえ？』

『手紙ツて、此間、一週間前ばかりに来たきりなんですけども……』

『山にゐるにはゐるのかね？ 確かに？』

『ゐるにはゐると思ふんです。』

主人は困つたやうな顔をして、『今、行かれちや困るな。お前がゐるて呉れてさへ、お前にもわかるやうな忙しさなんだから、一日でも、二日でもあけられると、あとが困るでな。お光だつて困るだらうから

な……。』

このまゝ山に行つて歸つて来ないやうになりはしないかといふ疑惑が、その主人の言葉の陰にかくされてあるのがお園にも歴々と讀めたので、

『いゝえ、ほんの一日か二日で好いんですから……。旦那は私が歸つて来ないかも知れないなどと思つていらつしやるかも知れませんが、そんなことはありませんから。決してありませんから……。何うなるにしても、一度は歸つて来ますから。』

『さうぢやないけれどもね……。實際、忙しくつて困つてゐるんだからね。』

かうは主人は言つたものゝ、お園の達つての願ひを音なく却けて了ふ譯にも行かなかつた。何故なら、借金がまだいくら残つてゐるにしても、来てから今日まで、一生懸命に陰日和なく働いては呉れたし、氣はきいてゐるし、容色も満更ではないし、客受は好いし、かうした女中を新たに捜すのは容易なことではなかつた。さう思ふだけ、無理も願ひもきいてやらなければならぬやうなところがあつた。

『お光に相談して見てな。』

かう言つたが、丁度其處にお光がやつて来たので、主人はそれ呼び近づけて、その話をした。と、お光はお園に向つて、『お前さん、歸つて来るには歸つて来るんだね。それなら好いわ、一日二日位……。行つたきり、鐵砲玉ぢや困るけれども……』



『そんなことはないよ。』

『なら、行つてお出でな……。うんと旦那と喧嘩してお出でよ。』

『何うせ、さうさ。今度はもう思ひ切つて、言ひたいことを言つて来るつもりなんだから……。いつまで吊られてゐたツてしやうがないからね。』

『本當だともね……。』

『ぢや、旦那、ちよつと行つて來ますから。』

急にすぐ支度にかゝりさうにするので、

『すぐ行くのかえ？』

『え……。』

『だつて、もう今日は遅いぢやないか。明日にしたら好いぢやないか。』

『でも、早い方が好う御座いますから、これから車でI町まで行けば、四番の汽車には間に合ひますから……。』

『それにしても餘りに急だな、足元から鳥が立つやうだな。』

『山から來たんだよ。手紙が——』かうお光は傍から言つて笑つた。

『手紙なんか來るもんかね。』

かうお園は言ひながら、車を頼みに走つて出かけて行つた。

## 四十七

尋常の手段では、とてもその真相をつかむことは出來ないとお園は思つた。それには陰からこつそり行つて見るに越したことはないと思つた。とても駄目なものなら、その駄目だといふ光景をはつきり見たい。そして捨てるなら、此方から捨ててやる。惜しげもなく捨ててやる、中ぶらりんにして吊られてゐるのが一番馬鹿々々しくも辛くもある。従つて、お園は今度はあのS町の老夫婦の許にも寄るまいと思つた。また、あの山の旦那の下宿してゐる家にもいざといふ場合にならなければ行くまいと思つた。(それには、あそことあそこに行つて見れば大抵はわかる。大抵旦那が何うして暮してゐるか、あの女と夫婦氣取で暮してゐるか、それとも手紙に書いてよこしたやうに本當に困つて暮してゐるかが判る。)かうその作戦計畫を小さな胸に描いたが、しかも誰にも知られずに、見附けられずにその山の中に入つて行くといふことは、かなり困難であることをつゝいてかの女は繰返した。S町から入つて行くK線の汽車の中は大丈夫だが、あそこから先の半ば鑛山用半ばは旅客用のトロコの線に入つて行つては、知つてゐる顔が多い。

『おや、また來たの？ いつ來たの？』かうすぐ聲をかけられるやうな人が多い。そしてかの女がそこ



をうろくしてゐたことが旦那の耳にちよつとも入れば、もうその真相はつかむことは出来なくなる。旦那は女をかくして了ふにきまり切つてゐる。そして旨いと言つてごまかして吊つて置かうとするにきまつてゐる。(何うかして、さうした人にも知られずに、こつそり山の中へ入つて行つて見たいものだ。そしてその真相をすつかり知りたいものだ。)車が松原の中を通つてT町へ行き着く間、お園はこんなことを種々に考へた。

(一日二日と言つて来たけれども、場合によつては二三日後れたつて構ひやしない。はがきでも出して置きさへすれば此方は好いから、十分、その真相をつかんで来たいものだ。金はTさんの置いて行つたのもあるし、此前の時のやうに、一日二日宿屋どまりしたつて困るやうなことはない。)

こんなことをもお園は思つた。

車夫に頼んで急いで貰つたために、T町の四番の汽車には、何うやらかうやら間に合つて、まだ日の暮れない中にS町から出るK線の汽車に乗り込むことが出来た。それから、ゴトンゴトンと汽車の揺れる度に滑らかに動く大きな石油のランプの薄暗い下に、または窓から顔を出して見ても、闇の中に山の雪が微かに白く見える他は乗客も疎らな、スチムもない寒い客車の中に一時間ほども震へて、漸く、トロコの起點のある山裾の小さな村へ近づいて行つた。

隅にゐた乗客の一人が、車窓から外を覗くやうにしてゐたが、ふと、

『や、またフキだな。』

かう言つたので、お園も急いで外を見ると、果して晝間から危なかしいと思つた空は變つて、大きなぼた雪がポツポツ窓の硝子に當つて白くたまつてゐるのを目にした。

K線の終端驛で下りた時には、汽車の中ではそれほど思はなかつた雪がかなり烈しく、冷めたい凄じい風さへ加はつて、電燈の柱に亂れて落ちるさまがキラキラと灯に光つて見えた。お園はその降り頻る風雪を衝いて、トロコの起點まで行つて見たが、今夜はもう山の中に行く何等の車の便もなかつた。爲方なしに、お園はわざと知らない小さな旅舎をそこに選んで泊つた。

## 四十八

雪が深く積つて、山に行くトロコが留るやうなことがなければ好いがと心配したが、さうしたこともなくて、あくる朝は晴れやかな日影の軒に雀の百囀する窓の下で、お園は目をさました。

朝飯を温いまづい汁や生鶏卵でそこくすまして、トロコの出る處に行つてそれに乗つたが、幸ひに知つてゐる顔にも逢はず、向うから聲をかけられるやうな人にも逢はなかつた。鑛山の人夫や、綿フラの汚れた襟卷をした百姓や、ボサボサした髪をした女や、さういふ人達の中に雑つて、吹き晒しの寒い無蓋車の中に、肩掛で半ば顔を包むやうにして乗つてゐたかの女は、次第に雪の深い、兩方から山の裾の



落ち迫つた山合の方へと自分が入つて行きつゝあるのを見た。寒さうに雪に埋もれた村、雪の積つた石の間を碧く瀬を成して流れてゐる溪流、此方から向うにかけてある橋、鑛石を粗く分析するために出来た小さな工場、夏はこれでも賑やかで、白粉をぬつた女達のゐる飲屋も澤山あるのであるが、今はあたりは、雪と、寒さと、仕事のないのにいぢけて、外形はいかにも山の奥のさびしい村としか見えなかつた。

一時間ほどして、トロコの終點近くまでやつて来たが、いろ／＼な作戦計畫を小さな胸に抱いてゐるお園は、そこまで行かずに、その少し手前の村の入口の橋のあるところで、頼んで下して貰つて、それから橋を渡つて、村のとつつきのかねて知つてゐる或る上さんの家に寄つた。

丁度好い鹽梅にゐる、『まア、やつて来たの？ 此雪に。』など、言つて迎へ入れたが、そこでは旦那のことはまだ本當にはわからなかつた。或は捨てられたお園を可哀相に思つてか、または時には取引をしなければならぬ人の祕密をすつば抜いてはわるいと思つてか、それともまた本當に知つてゐないのか、つかまへどころのないやうな話しかして呉れなかつた。しかし旦那が来て居て、二三日前にも此處を通つたといふことだけはお園は知ることが出来た。

その次にお園はそこからさう離れてゐない材木屋を訪ねた。そこではお園は、旦那が元のところとは違つて、それから少し先の炭間屋の裏の小さな家に住んでゐることを教へられた。

別に、一緒に住んでゐる女のことには聞かなかつたけれども、その材木屋の亭主の顔やら、表情やら、

話し振やらからそれと推して、いくらか赫となつた氣味で、お園はすたころそこから出て来たが、いつそすぐ押かけて行つて、言ひたいことを言つて、それこそ此方から捨ててやらうと一途に思ひ詰めたが、もつと詳しく聞く必要があると思つて、裏に廻つて、路のわるい泥濘の間をこねかへすやうにして歩いて、旦那とは仲たがひになつてゐるやうな飲屋の上さんを訪問した。

果して想像した通りであつた。男の薄情に、虚偽に、欺騙に、お園はまた此處でも出會はなければならなかつた。此前來た時には、まだかの女の手前をかねて、旦那が身を躲したり、女が姿を躲したりしたが、今はもうそんな氣がねなどせず、平氣で、夫婦氣取で睦じく暮らしてゐるといふことであつた。『何うして、あんな女にはまつたかさ……。Sさんも随分物好きだ……。もうあの旦那はとても駄目だよ。お前さん、思ひ切つた方が好いよ。すつかりあの女に騙されて了つてゐるんだから……。さうかね、お前さんの方へはそんなことを言つてやつたかね。男は罪だね。』かう上さんは一面お園に同情するやうに、また一面旦那をくさすやうな調子で言つた。

## 四十九

ヂックザックした屋根に残つた雪や、家並の不整な高低のある山合の鑛山町の小さな工場の煤烟や、何處となく新開地らしい荒々しい人々の顔や、やさしい落附いた氣分などは藥にしたくもないやうな刺々



しい空気が、膚に喰ひ込むやうに迫つて来る山の寒さや、さうしたものが、赤裸にされたやうな戀の負傷者であるかの女の心や體に深く深く染み込んだ。

かの女はもう溜息をつくにすら堪へないやうな気がした。赫となつたり冷めなくなつたりした時機は既に通過し去つて、わるく落附いたやうな心の態度が今はお園の胸を領した。もう何も彼もわかつた。自分の捨てられたこともわかつた。誰も思つて呉れるものもない全くの一人であるといふこともわかつた。

『行つて見たツてしやうがないよ、お前さん。』

かう捨てるやうに上さんは言つた。

『それで、ちつとは好いんですかね、このごろは？』

かうお園が訊くと、

『好いこともないだらうよ。何でも、此間、新しい鑛區を見附けたなんて騒いでゐたけれども、何うにもなりやしないんだよ。信用ももう落ちたね。』

『東京からお上さんが来るやうなことはありませんか？』

『東京の方ももうすつかり駄目だツて言ふぢやないか。何でも、その上さんの出してゐる烏森の待合とかも滅茶滅茶になつて了つたツて言ふぢやないか。それに、上さんにも男があるんだツてね。』

『そんなことはないでせう。』

『それやね、人の噂だから、本當だかわからないけども、それは皆な一緒にあるあの女の口から知れるらしいよ。その待合が駄目になつたばかりぢやない。上さんの所在も今ぢや本當にわからないやうな話だよ。』

『そんなことはないだらうと思ひますけどもね。私が去年行つた時には、まだ盛にやつてゐたんですし、あのお上さんはしつかりした人ですもの……。』

『何だか知らないけど、さういふ話だよ。何しろ、いろんなことで、Sさん、大分困つちやるらしいよ……。』

『さうですかね。』

ふと、そんなこんなで、T町からあの時かの女が打つた電報にも返事をよこすことが出来なかつたのかも知れないと思ふと、未練ではあるが、そこに一條の明るい道を發見したやうな気がお園にはして來た。で、猶ほそれとなしに、それからそれへとたぐつて訊いて見ると、Sはその待合を仕舞ふについて上さんから取つた金を、此間いくらかまとめて持つて來たらしく、それで今までの下宿を綺麗にして、そしてあの女と家を一軒持つたやうな話であつた。

一度は行つて見るのはよさうか知ら？ このまゝあきらめて歸つて了はうかしら？ とも思つたが、



また思ひ返して、それは上さんに打明けては言はなかつたけれども、兎に角一度ちかに訪ねて見やうと決心して、そしてお園はその飲屋から出て来た。

裏道や、日陰のところは、雪がいくらか固まつてゐるので、さう大して歩き難くはなかつたけれど、通りに出ると、すつかり泥濘で、臺まであづま下駄が埋つて了ふやうなところが到るところにあつた。で、上から晴れた碧い空が蓋をしたやうに見えてゐる山に取圍まれた残雪の町を、其處此處と道を拾ひながら、フロラアシヨオルをしたお園が赤い顔をして一步一步歩いて行つてゐるさまが、くつきりと午近い明るい日影の中に際立つて見えた。

## 五十

大きな炭問屋の前に来て足を留めたお園は、店先きと言はず、周圍と言はず、五六貫目俵が横に、縦に、または無雑作にころがされたやうにして、そこら一面に積んで並べて置かれてゐるのを眼にした。店では、肥つた番頭が東京から買出しに来てゐる脊廣の男を相手に、算盤を頻りに弾いて見せてゐた。

暫し立留つて考へてゐたが、あやしまれてはと思つて、お園は急いで、その傍に細く入つて行つてゐる露地見たいなところに身を躲した。お園の胸は頻りに躍つた。愈々一大事の瀬戸際に來た時のやうな氣がした。

矢張そこも路が泥濘で、ともすると、下駄が埋れさうになつた。低い庇には、大きい小さい氷柱が下つて、日を受けたところだけが、ほたほたと雨滴になつて落ちてゐるが、段々奥に入つて行くにつれて、雪の積つた疎な樹を隔て、トタン葺乃至はこの近在で出来る樺紅色の安瓦で葺いた小さな家屋が其處に一軒、彼處に一軒といふ風にあらはれ出して來た。ある高窓の白い障子には、朗かに日影がさし當つた。

真中に共同で使ふ井戸があつて、お園が入つて來る時、其處に出て横向きになつて水を手桶に汲んでゐた壊れた鬚の女が、何だかその女のやうな氣がしたので、ちよつと躊躇して家屋のかげに身を寄せるやうにしたが、此方を向いたその顔は別な女で、そのまゝ水を汲み終ると、手桶を下げて、すぐその傍の家屋の中に入つて行つて了つた。で、お園はほつとして、そのSの家をあれかこれかと物色して見たが、左にある庇の低い、高窓の障子の見える、入口の格子戸の半分まだ雨戸になつてゐるのが、確かにその家であると思はれた。

行つたつて、何うせ何うにもならないのは解り切つてゐる。かの女にしても、さうした形になつてゐる旦那を責めて見たところで爲方がないのもわかりきつてゐる。訪ねて行つたところで、その女と同棲してゐるでは、お互ひに氣まづい思ひをするばかりである。しかし、何うせ打壞すのなら、はつきり打壞して了ふ方が好い。現に、今度出て來るについても、十に八九はその積りて出て來たのである。(構ふことは



ない、言ふだけのことは言つてやれ。)かうは思ひながらも、一方では、二人の戀の間柄がたうとうかうしたことになるつて了つたことを悲しまずにはゐられなかつた。

靜かにわるい路を拾ふやうにして疎らな樹木の間を通つて、やうやくその家屋の前に辿り着いたお園は、果して、それがSの住宅であるといふことを見た。格子戸の上に白く出てゐる名刺には、Sの姓名がそれと印せられてあつた。

お園はたと立留つた。

案内を乞ふのが何となく躊躇されたのであつた。ふと見ると、そこに、つま皮のはまつてゐる足駄が一足置いてあつて、此方のまだ明けてない雨戸のかげには、一俵の炭俵の半ば空しくなつてゐるのが置かれてあるのが眼に入つた。いかにも貧しい寒さうな生活であるのがそれとわかつた。

猶ほ暫しの間、話聲でも聞えやしないかと思つて立つてゐたが、あたりはしんとしてゐて、別にさうした様子もないので、お園は思ひ切つて、音高く格子戸を明けて中に入つた。

案内をも乞はない中に、奥から人の立つて來た氣勢がしたが、二三寸明いた障子のところからSの顔があらはれて、吃驚したやうに、『あ、お前か。』と言つたが、そのまゝ、奥に引込んで行つて、暫しは再び姿をそこに現はさなかつた。慌て、女を勝手元の方へ追ひやる氣勢がした。

## 五十一

一時間とも経たない中に、お園は音高くはね返るばかりにその格手戸を閉めて、さながら辛い苦しいところから遁げ出すやうにしてそこから出て來た。

何と言つて好いかわからないやうな氣がした。赫とするかと思ふと、心が底の底まで冷え渡つて、體が地上に深く陥つて行くやうに感じられると共に、眼は眩惑して、頭がぐらぐらと顛倒するかと疑はれた。何うせ、さうした結果に到達するのはきまり切つてゐると覺悟はしてその入口には立つたものゝ、いざさうなつて見ると、身も震ふやうな激怒と絶望と悲哀とをかの女は感ぜずにはゐられなかつた。かの女はちつと残雪の上に照りわたる明るい光線に、低頭き勝ちの眼を落しながら、そこから通りの方へと出て來たが、入つて行つた時の一步一步泥濘を拾つて行つたのに引かへて、今度はあづま下駄が臺まで埋らうが、泥濘のハネが着物の裾にあがらうが、そんなことには頓着してゐられないやうに、またそんなことには全く注意を拂ふ暇がないやうに、すたこら唯だ歩いた。

(この鑛山町ももう自分には用がない。もう一生の中に、再びこんなところに来ることはない。)

かう思つた時は、最早かの女は通りに出て、餘程此方まで來てゐたが、さう思ふと、あたりの屋根に残つた雪、大きな氷柱、材木屋の用材置場、四面を取圍んだ山巒、深く落ち込んでゐる山の裾、或ひは疎



らな木立の中にある小さなお宮、或はそこらに住んでゐる鑛山の人達、碧い空にくつきりと紫に、または黄に、灰色に揚つてゐる幾條の工場の烟突の煙、さうしたのも、曾ては種々な思ひを繋ぎ、男がゐるためになつかしかつたり、戀しかつたりしたばかりではなく、更に、さうしたさまざまの光景が、その戀心に雜り合つて、自分の身に常に搦みついて來るやうに感じられたが、今はさうした光景も、物象も、山も川も町も、すべて自分から冷めたく離れて行つて了つたやうな氣がした。今まで親しく馴染んでゐた山の町が、何だか急に見ず知らずの何の緣故も持つてゐない遠い遠い他郷の町でもあるかのやうに思はれて來た。

(何も彼も、もうこれでお終ひになつた。サツパリした。)

かうかの女はつゞいて思つて、いつそかうしたところは一刻も早く離れ去つて了ひたいやうにして急いで通りをトロコの終點の方へと歩いた。

と、今度はつゞいて、そのSの家の一間の中の光景が思ひ出されて來た。あの貧乏たらしい暮し、長火鉢さへなくつて小さな瀬戸の火鉢で間に合せてゐるやうな暮し、それでも、まだあの自分と一緒に買った箆笥や茶箆笥は持つて使つてゐるので、それを見た時には、理由なしに嫉妬が起つて來て、女も憎ければ男も憎く、つい言はないでも好いことまでも言つて、それで男を激昂させたやうなところもあるが、何うせ、切れるんだ……切れるんなら、思ひ切つて言つてやる方が好い……かう思つて、今までに

つひぞさうしたあくたれ口はきいたこともないやうなことまで言つた。(何うせ、あんな男に碌なことはありやしない。あのお上さんに愛想をつかされたのも尤もだ……。誰だつて、いつまであんな男に玩具にされてゐるやしない……。ざまを見るが好い。私のこの恨みだけでも、碌な死にやうはしやしない。)急に赫となつたやうにしてお園はかう獨語した。

## 五十二

『お前が勝手な眞似をして、獨りて恨んだり苦しんだりしてゐるんぢやないか。何故、それなら、おとなしく國にちつとしてゐないんだ……。』かういふ男の言葉に對して、

『そんなことを言つたつてそれは駄目です。私は玩具の人形ぢやありませんからね。向う向いてゐるつて言つたつて、馬鹿にされて黙つて向う向いてやしませんよ。』かう憎さげにかの女は言ひ放つた。

男も次第に激昂した。

『いくら、俺が構はないと言つたつて、だるま奉公をしるなんて言ひやしない。勝手に、自分でさういふことをしたんぢやないか。』

『さうですよ、勝手にしたんですよ。電報を三度まで打つても返事をさへ呉れないからぢやなかつたんですよ。お金がなくなつて何うにもかうにもならなくなつたからぢやなかつたんですよ。だるま奉公



がきいてあきれますよ。私はね、いくら落ちぶれても、だるまなんかにはなりませんからね。」

『何だか、わかるもんか。あそこらの茶屋奉公で、だるまでない奴なんかありやしない。』

『だから、それならそれで好いぢやありませんか。茶屋奉公をしたから、それでいけないんならそれで好う御座んすよ。何もお前さんの勝手をする邪魔をしやうと言ふんぢやないんだから……。いくらでも、ぬくぬくと二人で寝るなり、楽しむなり、暮すなり勝手にするのが好いのさ……。だから、お上さんにも捨てられたんですよ。』

『大きなお世話だ……。』

お園は男の方をちつと見て、『これで、そのうち、迎へに来るとさ……。よくあんな手紙が書けたもんだ。大抵、こんなことだと思つてゐた……。それやね、私だつてね、女だからね、あんなすべたに見かへられたと思へや、腹も立つよ。だけど、今ぢや、もう腹も立たないよ。あんなすべたと一緒にされちや、これでも、いやだからね。これでも、茶屋奉公をしても、あんなすべたよりは好いつもりだからね。』

『勝手にしやがれ!』

『勝手にするともね。これでも一度は世話にもなつたと思へばこそかうしてわざ／＼訪ねて来て上げたんだよ……。ね、死んだあの兒の爲も思つてね。』急に悲しくなつたといふやうに聲を曇らせたが、更

に激昂して、『だから、そんなに厭になつたら、切れるなら切れるとちやんと言つたら好いぢやないか。

切れたけれや、いつだつて切れて上げないぢやなかつたんだよ。それを、好い加減に、人を吊つて置いて、まだ人を玩具にしやうと言ふんだからね。本當に圖太いやね。』

『黙れ!』

『黙れないよ。わざ／＼お金をつかつて言ひに来たんだよ。聞いてあきれらア、あそこらの茶屋奉公をするものに、だるまでないものはないとさ。別れる言ひ草にことを缺いて、人に悪名をつけるとは、何といふ淺ましい、男らしくない心だらう……。』

かういふ風に言つて言つて言ひまくつたことをお園は思ひ出した。男の顔が激怒に燃えて、眼は吊し上り、顔は蒼白く、後には手を上げてかの女を打たうとするのを、(打つなら打て)とばかりにその身をすり寄せて行つたことを思ひ出した。それを見かねて、勝手に隠れてゐた女がやがて仲裁に出て来たことを思ひ出した。

(兎に角、言ふだけのことは言つてやつた……。これで清々した。)かう思ひながらお園は歩いた。

## 五十三

女が出て来て、仲裁をするつもりかなんかで、べちやくちや饒舌り出してから間もなく、いろ／＼な



痛い心と眼の刺戟に堪へられないやうになつて、急いで席を蹴立て、出て来たことをお園は繰返した。

（なアに始めからあゝした男がゐなかつたものだと思ひさへすれば好いのだ。そして此身が一人だつたと思ひさへすれば好いのだ。これからはさつぱりして好い。辛い嫉妬や戀心に虐まれないだけでも好い。』

こんなことをまた獨りてつぶやいたが、しかも、心は決してさう單純に押へてすまして了ふことは出来なかつた。もうあの男の體からは、歡樂からは、心からは、永久に離れたと思ふと、睦しかつた床の中の物語り、互ひに心と體とを合せた刹那の記憶、さうしたものが一つ一つ鮮かに頭に浮んで来て、それにその憎い女の體が絡み合ひ纏れ合つた。もう虐んで呉れる辛い嫉妬も、戀心すらも自分から取去られて了つたのである。お園は堪らなくさびしい悲しい氣がした。

（だつて爲方がない。）

かう言つた聲は嗚咽のやうであつた。激昂にまかせて、または辛さと痛さに堪へかねて、そこから飛び出しては来たものゝ、これから行く先の路は何うであつたか。何處まで行つても辛い悲しい孤獨ではなかつたか。今までは、つれないと言へ、薄情とは言へ、または離れて暮してゐたとは言へ、兎に角さう言ふ思ひを起させる相手があつた。一人ではなかつた。旅舎の深夜の床の中で、嫉妬に燃えて、轉輾反側して眠られないやうなことがあつても、それでもまだ一人ではなかつた。いつか再び花の開く希望

がないではなかつた。ところが、今は——これからは、全くがらんとした、荒涼とした、何にもない空虚な路がその前に長く續いてゐるばかりではなかつたか。

お園は喪心したやうにして、町からトロコの終點の方へ下りて行つてゐる泥濘の路を眺めた。

しかし今になつては、何うすることも出来ないのである。放たれた矢は行くところまで行かなければならないのである。そして何うならうとも、この重荷は自分て背負つて行かなければならないのである。と、急にかうして歩いてゐるのさへ堪へられないやうな氣がお園にはして来た。もしそこに樹でもあつたら、そのまゝそこに寄りかゝりたかつた。

恨みも、怒りも、激情も、今はその心の空虚を支へることは出来なかつた。

かの女に取つては、今は、靜かに考へて見る場所が、深い戀の痛手を負つたあはれな女を一時絶対に安靜に休ませる場所が必要になつて来た。

かの女はあたりを見廻した。しかしさうしたところは、その近所には何處にも見當らなかつた。爲方がないので、トロコの終點までは行かうと思つて、お園はまた一步一步歩き出した。

それにも拘らず、あたりには日が麗かに照つてゐる。半ば雪に蔽はれた白い山はキラキラと光つてゐる。青い、黄い工場の煤烟は、林立した小さな煙突から靜かにゆるやかに颯つてゐる。男も女ものんきさうな顔をして嬉々として笑つて歩いてゐる。かうしたかの女の苦惱には何の關係もないやうに——。



と、急に涙がかの女の頬を傳つて流れた。

## 五十四

漸く坂を下りて、トロコの終點にある小さな待合室に入るや否や、お園は隅のところに行つて、そのまゝ後の羽目に凭りかゝるやうにして腰をかけた。

溜息がひとり手に出て来て、際限なく種々なことがその心の周圍を繞つたが、暫く経つた後には、蒼白い思ひ詰めたやうな顔をお園はそこに浮き出すやうにして、凝と唯一ところを見詰めた。

鑛夫や、鑛夫の唄や、百姓や、油染みて處々破れた古春廣を着た男や、トロコの運轉手や、さういふ人達はその前を絶えず往來したり、喧しく話し合つたりしてゐるが、またその姿は眼に映り、その話聲は耳に入つて、それは何ういふ人達で、何ういふ話をしてゐるかといふことは解つたけれども、しかもそれはかの女には何の關係もなく、何の交渉もなく、自分には唯、男に別れたといふことが、大きな棒でも飲ませられたかのやうに突張つて胸に一杯に満ちてゐるのをかの女は覺えた。

すぐその前に、小さな恰好な飲食店があつて、トロコに乗る人達がそこに出たり入つたりして、午過ぎの空腹を癒やしてゐるのが、殆ど手に取るやうに見えてゐたけれども、またかの女自身もかなり空腹を感じてゐて、いつもならばすぐ出かけて行くのであつたけれども、しかも立つて其處に行つて午飯

を食ふ氣には何うしてもなれなかつた。

さうした何うにもならない心の水火の中に、ほつかりTのことが浮んで来た時には、いくらかそれに縋りたいやうな心が湧いて来ないではなかつたけれども、かの女はすぐそれを打消して、(そんなことが出来るものか)と打棄るやうに心の中に叫んだ。男といふものをすべて呪ひたいやうな、また、女といふものが男のために何んなに侮蔑され、蹂躪され、迫害されてゐるかといふことを考へて、あはれな女性のために泣きたいやうな心持を誘つた。

あの女だとて、今こそ競争者に打克つたつもりでゐるだらうけれど、いつまたかの女と同じやうに男から棄てられるか知れないのである。その時は矢張かの女と同じく、辛い苦しい心の憂目を見なければならぬのである。かうした念が何處から何う萌して起つて来たか知れないが、兎に角さうした念が起つて来ると、かの女が曾て旦那の細君と温泉宿の二階で顔を合せた時のことなどが脈々として思ひ出されて来て、女は皆な男のために、男がわるいがために、男が薄情であるがために、玩具のやうに捨はれたり捨てられたりするものであるといふことがつくづく胸に思ひ當つて来た。あの細君に與へた苦しみを、今はかの女が當然の報酬として、罰として總身に受けてゐるやうな氣がして来た。つくづく人間が淺ましくなつて来た。何うして好いかわからなくなつた。

何が面白くつて、彼女は一人世の中に生きてゐるのだらう。かうしてこんな處に苦しんだり嘆いたり



悲しんだりしてゐるのだらう。また、何の意味があつて、あの河ぞひの旅舎に歸つて、あくせくと働かなければならないのだらう。死なうとはお園はまだ思はなかつたけれども、かう思ふと、男と女の世の中が辛く染々と總身を刺すやうに感じた。

お園は黙つて低頭して下唇を噛んだ。暫くしてそこに待つてゐた乗客はぞろぞろとレイルの方へと出て行つたが、愈々トロコの出る時が来たのをかの女は見た。お園は黙つて其處に行つてその隅の方に小さくなつて乗つた。さびしい路であらうが、空虚な何もないがらんとした路であらうが、時はそんなことには頓着せずに行かなければならない處へとかの女を伴れて行くのであつた。やがてトロコは動き出した。お園は一生の中に再びとは來ることもないであらうと思はれる残雪の山の町をもう一度振返つて眺めた。

## 五十五

S町で汽車に乗替へたお園は、自分はT町の手前の驛までの切符しか持つてゐないことを繰返した。トロコからR線の汽車の方へ來た時には、かの女は身も世もないやうに氣が沈んで、これから先、再び河ぞひの旅舎に歸つて行つたところへ、何を樂しみにあの忙しい労働の月日を續けることが出來ようかと思つた。いくらかかの女はのぼせ氣味であつた。(面倒臭い。いつその身を打壞して了ふ方が好い。

さうさへすれば、何もこんなに辛い思ひもしくつても好いのだ。)こんな風に考へたが、汽車の切符を買ふ段になつた時には、急にかの女は赫となつた。そこに、T町とS町との間に、岸に竹藪の繁つた大きな川のあるのを眼の前に浮べた。そして、そこに、どんよりとさし残つてゐる夕日に引寄せられるやうにしてお園はその驛までの切符を買つた。

(その方が好い。その方が好い。あそこの停車場で下りさへすればあの川までは、いくらもない。さうすれば、この身と共に憂いも辛いも何も彼も綺麗さつぱりとなくなつて了ふ。さうさへすれば、もうあの河ぞひの旅舎に歸つて、また男を相手にして、辛い思ひをしなくつて好い。)かう汽車の中でも何遍となく思つて見た。一時はそれより他に、かの女の取る路はないやうにさへ見えた。かの女にしては、もうとても、再び男を相手にして、かうした辛い思ひを繰返すに堪へないやうな氣がすると共に、また一方では、生きて行つてゐる以上男の體なしには一刻もゐられないやうなかの女の體をお園は考へた。つくづく淺ましい情けない地獄だと思つた。涙はひとり手にその頬を傳つて落ちた。

しかし、それが好いと思ひながらも、その想像は容易にはつきりした形を取つて來なかつた。人間は考へて死ぬるものではない。それは一時に赫となれば、何んなことをするかも知れないけれども、いざと打突かつて見なければ、やらうと思つたことも、容易にやれるものではなかつた。お園は赤い熱い頬を窓硝子に當てるやうにして、さびしい錆色をした川に夕日の微かにさし添つてゐるさまを頭に描いて



見た。

それに、さうした考へをかの女に促したものは、男の無情とか、女の憎さとかいふことよりも、何も待つてゐるものゝないさびしい空虚な川ぞひの旅舎の生活であるといふことが、かの女には不思議であつた。更に不思議なのは、死んだ子の面影もまたはつきりと浮んで来てそれを促すやうにした。(そんな薄情な世の中なんか捨て、私の許に早くお出でなさい。)かうその幼い兒は呼んでゐるやうな氣がした。

(あの兒さへ生きてゐて呉れたならば――)

またしても、さうした悲しい思ひが胸につき上げて來た。

もう其處等には雪といふ雪もなかつた。昨夜も澤山は降らなかつたと見えて、ところ／＼泥濘はあるにしても、地上は大抵乾いて、日和下駄で街道を田舎の人達が歩いてゐるのが、汽車の中から見えた。廣いさびしい冬の平野がかの女の前に展けた。

下車すべき驛に着く少し前からお園の胸は動搖し始めた。このまゝそこを通過して了ふのは、自分ながらあまりに意氣地がないやうな氣もした。さうかと言つて、まだはつきりその胸が決定してゐるのもなかつた。やがて汽車の歩みは次第に緩やかになつて、遂に留つた。と、不意に、再び夕日のさした川がはつきりかの女の眼に映つて見えた。お園はそれに引寄せられるやうにして慌て、下車した。

### 五十六

屈曲したW川に沿つて、ぐる／＼廻るやうにつくられた土手の上からS町の方に来る街道を通つた人達は、その時、酌婦らしい何處か意氣な扮装をした女が、低頭しながらぼんやりして歩いてゐるのを見ただであらう。後も見ず、脇目も觸らず、さうかと言つて急ぐでもなしに、ぐ／＼とあづま下駄を引摺るやうにして、赤い顔をして通つて行くのを見たであらう。其時、其處には午後四時過ぎの夕日が明るく一面にさしわたつて、路のほとりの小川に臨んだ休茶屋の前には、米俵を山のやうに積んだ運送車の馬が、馬方の休んでゐる間を自分も呼吸がつけるといふやうにして、大きな腹に波を打たせたり、金轡をはめられた口から涎を垂して鬘を動かしたりしてゐるが、その馬と車とが餘りに道に幅をして置かれてあるので、通つて行く人は、皆なそれを避けて、路の泥濘になつてゐるところを拾つて歩かなければならなかつた。その女も矢張そのそばの泥濘をよけて通つた。

その休茶屋から土手にかゝつて行く間は、一條の路しかついでゐない五六町の長い田圃で、そこには夕日が明るくさしわたつてゐるので、向うの土手乃至土手附近にある雑木林が深く暗く繫つて見えてゐるのに比して、思ひ切つて明るくキラキラして、そこを靜かに一步一步歩いて行くその女の姿は、さながら金色の空氣の中に浮き出すやうに見えた。



其向うの雑木林近く行つた時、土手の方から一人の商人風の男が下りて來たが、それと摩れ違はうとして、ふと思ひついたやうに、

『あそこから土手ですね。川までまだ餘程ありますか？』

かうその女は訊いた。

『もう五六町。』

かうかの商人風の男は早口に言ひ捨て、すれ違つた。

何も知らないから、何とも言はなかつたけれども、もしそれと知つたら、その聞かれた男は、抑揚のない單調な空虚なその聲の調子に驚いたであらう。またその顔の赤い中に一種喪心したやうな、または昂奮したやうな表情を見落すことはなかつたであらう。何故なら、それは死神に取憑かれたやうなかの女で、汽車を下りた時は、まだそれほど思ひ詰めてはるなかつたけれど、次第に行くべき道を脇にそれて、それより他には、何うにもかうにも行くべき路がないやうに、段々と思ひ込んだお園であつたからである。今やかの女の心と體の周圍には、山の旦那や、Tばかりではなく、その他の男もすべて皆執念くからみついて來てゐて此方から出て行く恨みと、向うからやつて來る恨みとが十重二十重に細かく解き難く結ばれて、振放さうにも振放すことが出來ずに、その魂を虐んでゐるのであつた。そしてその苦惱と嗔恚とを離れるには、何うしても、その考へを實行するより他に爲方がないやうな氣がした。

何うして、再びあの川添ひの旅舎に行つて働くことなどがこの身に出來よう。何を樂しみに？ 何を目的に？ 空虚な、がらんとした、縋るものとは一握の藁すらないその荒涼とした人生の流れの中に？

(何うしてもそれより他はない。それが私の拙ない運命に相應してゐる。さうしたなら、聞いた人は可哀相に思つて呉れるだらう。恨んでゐる男も女も、その恨みを捨て、呉れるだらう。) こんなことを何遍も何遍も繰返しながら、お園は土手添ひの暗い雑木林の中の路へと入つて行つた。

## 五十七

雑木林を通り越して、だら／＼と土手の上に登つて行くと、急にあたりが明るくなつて、篠竹のかなりに太く生えた藪が半ば白く半ば青くそこに連つてゐるのをお園は見た。運送車や荷車の轍の跡を縦横に印した路は、川の流れにつれ、土手の屈曲につれて、幾重にもうねうねと折れ曲つて通じてゐるが、少し行くと、左側の篠竹の藪は、いつか緑のまださう深くない麥の畑に變つて、その下に、矢張半ば藪や木立に蔽はれた川の水が、一ところさびしく錆色に流れてゐるのが見えた。

お園は思はず立留つた。そしてそれとなくあたりを見廻した。

さびしい街道には、誰も人の姿は見えなかつた。夕日がただ藪の隙間から線を成してさし添つてゐるばかりであつた。急にお園は、自分の歩いてゐる街道から、麥の畑の縁についてゐる細い畠道の方へと入



つて行つたが、そのまゝ川の岸に下りて行く路を求めるやうにして、ぐんぐん川に面した低い笹藪に添つて歩いて行つた。立留つたり、立留つて考へたり、また歩き出したり、深く流れてゐる川を覗くやうにしたり、誰か見てゐるものはないかといふやうにあたりを見廻したりしてゐる姿が、夕日の明るくさした光線の中にはつきりと浮き出すやうに此方から見えた。

かなり遠くまで、その姿が小さく見えるあたりまで、お園は低い笹藪に添つて歩いて行つた。

しかし、川が深く穿たれて流れてゐる此處等あたりでは、何處まで行つても、笹藪と木立との間をわけて川の岸に下りて行くやうな路は見當らぬらしく、好い加減行つたのを引返して、やがてお園が此方に戻つて来るのが見えた。

ふと、機廻りの歸りらしい、澁紙で張つた大きな籠を乗せた荷車が、向うからガタガタと音させてやつて来るのをお園は眼にした。と、急に慌てたやうに、またはあやしまれるのを恐れるやうにして、かの女は急いでその畠道から再び街道の方へと出て来た。

荷車を曳いて来たのは、商人風の中年の男で、あと押しに十三四の小僧を伴れて来てゐたが、酌婦らしい若い女が畑の中にうろうろしてゐるのをちよつとあやしむといふやうにして、梶棒を留めて、凝とそれを見てゐたが、そのまゝお園が此方に出て来たのを見て、何か小僧と顔を見合せて言つて笑つて、再び車をガタガタと街道に響かせて曳いて行つた。

溜息がひとり手にお園には出て来た。

(もう少し先に行つたら、もつと好い場所があるかも知れない。)

かう思ひながら、お園はまたすたくと歩いて行つた。

少し行くと、今度は街道が土手とわかれて、再びだら／＼とこんもりした杉の森の中に下りて行つてゐるのをお園は見た。かの女はちよつと立留つて考へて見たが、矢張それについて下りて行くより他に爲方がないので、そのまゝそれを森の中へと下りて行くと、やがて正面は、川に、川に架けた舟橋に、その少し手前に、別に細い矢張川に赴くらしい路があるのを発見したお園は、そのまゝ急いで其方へと入つて行つた。

それは漁師達の川狩に行くやうな路であつた。やがてかの女はその前に、すぐ前に、たぶたぶと水の漲つた瀬の早い大きな川が、渦をつくつて凄じく流れて行つてゐるのを目にした。街道からつゞいた船橋の一部もそこからそれとはつきり指された。漁師達の舟も一隻二隻岸に繋がれて水に漾つてゐた。夕日は静かにあたりを染めた。

## 五十八

凝とお園は河の面を眺めた。まだあたりは明るかつたけれども、幸ひにその附近に漁師もやつて來な



かつたので、誰にも妨げられずに長い間かの女は其處に立つてゐることが出来た。しかしそのまま飛び込まうとする氣にもなれなかつた。川は微かな瀬をそこにつくつて、低く囁くやうに流れては渦を巻き、渦を巻いては又徐かに流れた。

水の面にさした夕日の名残は、次第に色が褪めて、オレンジから褐色になり、鼠色になり、次第に暗碧の色にならうとしてゐたが、しかも對岸の折れ曲つた土手の上の淡竹の藪には、日が落ちた後の餘照がまだいくらかさし残つてゐて、既に薄暮の色は舟橋あたりに微白く迫つて來てゐるに拘はらず、まだ何處か明るいやうな感じがしてゐた。半ば孕んだ帆が一つ、竹藪の傍を掠めるやうにして、ギイと徐に梶の音をたて、通つた。

今が時だ……とお園は思つた。と、急に悲しくなつて來た。かの女は總身の痙攣するやうなのを覺えた。しかしそれは、身を投げる、死ぬるといふ悲哀ではなくて、それすらかの女には實行出来ないといふ悲哀であつた。かうした眞似をしなければならぬといふ悲哀であつた。次第にかの女はとても實行の出来ない死神の誘惑から目覺めて來た。

かの女は長い間、凝と水の面を見詰めてゐたことを思ひ出した。その深さうな暗碧な水が、急ちかの女をこの世の羈絆から、悲哀から、面倒な心の煩悶から、空虚なさびしい前途から救つて呉れると思つたことを思ひ出した。しかもそれを敢てさせる激情はもうかの女の體に残つてゐなかつたことを思ひ出

した。かの女はまだ死を思ひ返したのではなかつたけれども、また別に歩くといふ意志もなかつたのであるけれども、唯ふら／＼と其處から歩き出して、またもとの街道の方へと出て來た。

船橋の處に來た時には、日はもうとつぷりと暮れて、さつきまでさし残つてゐた竹藪の微かな餘照も消え、水にさびしく映つてゐた夕の雲の影も消えて、茫と微白く薄暮の色があたりを包んだ。對岸には、夕暮の煙や、人家や、人聲や、岸に繋いでゐる船や、チラチラかゞやく灯などがたゞ／＼と渦を巻いてゐるのをかの女は目にした。

船橋を渡りかけて、丁度その半ばに及ぼうとした頃、ふとまたかの女は、(いつそこのまゝ)と思つて、立留つて、並んだ船橋の舟に低く囁いて渦を巻いて流れてゐる川の面を覗くやうにした。

夕の星のキラキラ水に映つてゐるのが見えた。

併し矢張實行は出来なかつた。つゞいてこんなことをしてゐるかの女を自分で客觀したやうな心持が何處からともなく湧き出して來た。自分で自分が可哀相なやうな氣が盛に胸につき上げて來た。

(さうだ。死ななくつても好い。これから生れ變つた氣で、命拾ひをした氣で働く方が本當だ。)ほつとお園は呼吸をつくやうな氣がした。恐ろしい暗いところから辛うじて浮び上つて來たやうな氣がした。生き返つたやうな氣がした。

と、對岸にごた／＼と微白くかたまつて見えてゐる人家や人聲や灯が急に新しい世界でも見附けたか



のやうになつかしくなつて來た。兎に角そこまでは急いで行かなければならぬと思つて、船橋の半ばから先は、お園は橋板を鳴らすやうにしてすたく渡つて行つた。

## 五十九

橋を渡り終つて、お園はほつと呼吸をついた。此時には、さつきとは考へが丸で違つて、何うしてあの停車場で下りてあの土手をわざ／＼あんな眞似をして通つて來ただらうと思つた。自分ながら不思議なやうな氣がした。あれが人のよく言ふ死神に取憑かれたのかも知れない。あれでもしかすれば、この身は死んで了つてゐたかも知れない。かう思ふと、何となく恐ろしい、後が振返られるやうな、またゾツと寒氣がするやうな氣がして、あたりに既に近く見えてゐる灯や人影や人聲の方へ一刻も早く近寄つて行かなければならぬやうに思はれた。

そこには樂けに笑ふ聲がする。何か低く囁いてゐる聲がする。明るい灯が見える。冬にも拘らず店の大和障子を半ば明けて、温かさうな煙と空氣と人の息とを漲らしてゐる家などもある。誰も彼も『好いお晩になりました、』と言つて平和に睦しく團欒して夕飯の膳に向つてゐる。お園はかの女が經て來たさつきの世界とは丸で別な世界にでも來たやうな氣がした。かの女には今まで曾てこれほど灯がなつかしく、人聲が力強く感じられたことはなかつた。

明るい灯の並んだ家並の前に来て、お園はまたほつと呼吸をついた。

(あれで死んで了つては、それこそ犬死だ。好かつた、好かつた、死ななくつて好かつた。命拾ひをした。)

かう口にまで出して言つた。

(死んだッて好い氣味だ位にしか思ひやしない……。それにしても何うしてあんな氣になつたか。)

お園は一途にそれを思ひ詰めて、東京の兄弟のことすら思はなかつたことを不思議にした。と、いろいろな事がたゞ／＼と一つになつて頭に簇つて見えた。Tの顔も見えた。川沿の旅舎の主人の顔も見えた。二歩三歩歩いて行つたが、ふとかの女は自分が非常に空腹であるのに氣がついた。さつきトロコに乗る時、午飯を食はうとして、とてもそれが咽喉に通じさうにもないと思つてよして以來、今までの女には腹が空いたなどといふことは殆ど念頭に浮ばなかつたのである。(さうだ。お腹が空いた筈だ。朝食べたきり、何にも食べないんだもの。)急に、かの女は何處かそこらに夕飯を食べさせて呉れるやうなところはないかと思つてあたりを見廻した。

薄暮は既に夜になつて、冬の暖かい晩によく生ずる薄い白い夜霧が、茫と微かにあたりを包んだ。その中から此方へやつて來る人や車の氣勢がした。

飲食店をその附近に發見するについては、お園は別に多くの手間を要さなかつた。暫く行くと、其處



に、右側に、殊に灯の明るくかゝやいた家があつて、それは鯉鈍、蕎麥、その他何でも食はせて呉れるやうな家であると云ふことがやがてわかつた。覗いて見ると、入口の向うには、鮪の半身が吊してあるのに明るい灯がさし、厨の奥にある大きな扁平たい釜には、湯氣が暖かく渦巻くやうに漲り靡き、空腹の胃の腑を刺戟せずには置かないやうな酒の香や食物の匂ひがあたりに満ちわたつた。そのまゝお園は少し開いた大和障子の狭い間から身を振るやうにして入つて行つた。

『入らつしやい。』

厨のところに立つて見てゐた中年の此處の上さんらしい女がかう言つてかの女を迎へた。傍には徳利を二本も三本も並べて既にかなりに酔つてゐるらしい労働者らしい客があつたが、それも眼を睜るやうにして、突然入つて来た若い綺麗なお園を見上げた。

上さんはやがて火鉢をかの女の腰を掛けたその側に運んで来た。

## 六十

鯉鈍のあついのを二杯續けて注文して食つて、それで漸く人心地がついたやうになつたが、急に思ひ出したやうに一本つけて貰ふ氣になつて、その他に別に刺身と煮魚を持つて来て貰ふことにした。

酒はさう好きな方ではない。温泉宿にゐる時分には、男の相手をして七八杯、時にはもつと飲んでい

やに笑ひ上戸になつて朋輩に笑はれたり何かしたことは始終あつたが、しかし今まで獨りで酒を飲まうなど、思つたことはなかつた。それが不思議にも今日は一杯飲んで見たくなつた。危なく命を殞さうとしたのを兎に角免れて来たといふこともあり、酒でも飲んだら、ちつとはむしやくしやする腹の蟲を静める方便にもならうかともかの女は思つたのであつた。それに、隣りに、何も彼も忘れたやうにして、旨さうに盃を甜り甜り飲んでゐる客の状態もかの女にさうした心を誘つた。

その酒の出来て来る間に、ちよつと思ひ附いたやうに、煙草を袂にさぐつて見たが、今朝行く時に、買った朝日は、いつかあら方吸ひ盡したと見えて、あとには一本しか残つてゐなかつた。お園はそれに火をつけて、のんきさうに徐かに吸つたが、しかもあとがなくては心細いといふやうに、そこらにうろうろしてゐる此家の子供らしい十位になる女の兒に、

『此の近所に、煙草を賣る家はない？』

と首を傾けてやさしく訊いて見た。

女の兒はきまりがわるさうに、急には返事も出来ずにゐたが、それを厨から見てゐた上さんは、『すぐそこにあります……。一軒置いて隣に。』かう早口に言つたが、

『お前、ね、好い兒だからお客さんに買つて来てお上げ、ね、好い兒だから。』

かう續けて女の兒に言つた。



『買って来て呉れる？』お園も首を傾けて、手で女の兒の頭を撫でながら、『好い兒ね。買って来て呉れるのね。それぢや、ね、買って来て頂戴ね。』かう言つて帯の間から財布を出して、五十錢札を一枚渡して朝日を二つ買って来て貰ふことを頼んだ。

女の兒は素直に出て行つた。

お園はさつき土手の上あたりで考へたとは、丸で違つたなつかし味を他人に感じた。人は皆かう自分にやさしいものであるといふやうな氣がした。

嬉しいやうな、生き返つたやうな、生々した心持が胸の底から浮き上つて來た。そこに、女の兒は煙草を買つて戻つて來た。

『好い兒だね、よくお使いをして呉れましたね。これを上げますよ。』釣錢の中に雜つてゐた白銅一つを女の兒の手に載せると、女の兒は貰つて好いかわるいかわからないので、後退りして母親の方を見た。

『そんなことしねで下さいよ。』

かう上さんはそれを見て言つた。

『少しばかりですよ。』

『お氣の毒なね……』かう言つたが、『お前、お禮を言ふんだよ、お客様に……』

女の兒は黙つて頭を下けて、それをつかんだまゝ、嬉しさうにして向うに行つた。お園も嬉しかつた。

やがてそこに上さんが酒と肴とを運んで來たので、お園は訊いた。

『T町までは、此處から、何の位ありますか。』

『一里には近う御座います、二十二三町位のもです。』

『車はあるでせうか？』

『一臺、此處にもあるにはあるんですけども、何うしましたか。』

かう言つて後を返るやうにした。

六十一

『一臺しきやないんですか？』

『汽車が出來ない中は、随分あつただけけれど、今は乗手が多くないもんだな……。一臺あるのも、百姓半分にやつてゐるんだ。』かう上さんは言つて、もう一度後を返返つて、奥の方にゐる十六七になる、さつきの女の兒の兄らしい男の兒に向つて、『作造、政ン許へ行つて訊いて上げな。お客様、T町まで車が要るツて言ふだで、行くか何うかツて？』

男の兒は素直に立つて此方へ出て來た。

『お氣の毒ですね。』



『なアに、すぐだで……。五六軒先だでな。だがな、るれば好いがさ。』  
出て行く男の兒の方に向つては、

『ゐたらな、すぐ支度して來うツてな。お客様、女衆だから、夜道は不用心だから、成るべく行つて呉れツてな。』

かう深切に上さんは言つて、そのまゝ、厨の方へと行つた。お園は他人の深切が更に深くその身に染みるやうな氣がした。お園は一杯二杯盃を口に當て、見た。酒は地酒だと見えて、一種いやな臭ひがして、わるく舌に反撥した。

五六軒先と言ふのに拘らず、男の兒は容易に歸つて來なかつた。どうしたかと思つて待つてゐるとやがて、『おつかア、政ア何處さがしてもゐねえや。』かう言つて入つて來た。

『ゐねえか、困つたな。』

『此處には旅籠屋はないんですか？』

何なら、此處に泊つて、明日ゆつくり出かけて行つても好いと思つたお園は、更にかう言つて、上さんに訊いた。

『旅籠屋も、元は澤山あつたんだが、今はねえなア。』間を置いて、『でも、夜道でも、お前さん、そんなに淋しくはねえよ。村もあるし、人家もあるしな、それに一本路だで、真直に行きさへすれや、いや

でもT町だで。』

爲方がなければさうしやうとお園は思ひながらまた盃を口に當てた。夜道だつて、歩いたことはないではない。不知案内の他郷だからこそ、何だか無氣味なやうな氣もするけれど、温泉場になる頃には、一里位夜道をしたことはいくらもある。それにしても死神に取憑かれたとは言へ、愚かな真似をしたものだ。あそこで汽車を下りさへしなければ、今時分はT町に行つてゆつくりしてゐられたのに……。こんなことを思つてゐると、ふと、

『今晚は——』かう言つて、大和障子を明けて靜かに入つて來たものがあつた。見ると三十一二位の脊の高い、色の白い男で、焦茶色の中折帽子をかぶつて、茶色がかつた外套をはおつてゐたが下からはセルの袴が見えて、メリヤスの下穿きにつま皮のついた日和下駄を穿いてゐるのがお園の眼についた。

日頃、懇意であり、また尊敬してゐる間柄であるらしく、『まア、お上んなさい。』とか何とか言つて、上框のところの上さんは火鉢を運んで來たり何かしてゐたが、

『今日は遅いんですね。』

『なアに少しばかり話があつて、今まで學校に残つてゐたもんだから。』

『會議ですか。』

『會議ッて言ふほどのこともないんだけどね……。面倒臭くつてな。』



『御苦勞ですね。』

『饅飩でも一杯食つて行くかな。少し腹が減つて來た。』ポケットから袋は出さず一本だけ朝日をつまみ出して、それに火をつけてスパスバ吸ひながら、『作造君何うした。出來が好いな。數學は一番だ、お上さん樂みだ。』

『いつも御厄介にばかりなつてほんにすまねえと思つてゐるだアな。』

上さんは莞爾しながらこんなことを言つた。男はその時始めてそこに若い綺麗な女のゐるのに氣が附いたといふやうにしてお園を見た。

六十二

『御病人はいかがですか。』

かう上さんが訊くと、

『いや、もう、どうも捗々しくなつて困りものさ……。』

こんなことをその男は言つた。お園は聞くともなく聞いてゐたのであつたが、しかもその小學校の先生は、校長次席の訓導位で、長年この附近に勤めてゐるらしく、病人と言ふのはその細君であることなども段々飲み込めて來た。

やがて上さんの持つて行つた饅飩をお代りして食つたりなどしてゐたが、急に、

『お上さん氣の毒だが、提燈を一つ貸して呉れないかね。途中に、少し道のわるいところがあつたから……。』

『え、え、よう御座んすとも……。』

かう上さんは言つたが、ふと、氣がついたやうに、お園の方を向いて、

『あ、丁度好い……。お客さん、先生さんに一緒に行つて貰ひなさるが好い。ぢき、T町の少し手前までいらつしやる方なんだから……。』かう言つて、更にその教員の方に向つて、お園に代つて、一緒に行つて貰ふことを頼んだ。生憎車のないことや、不知案内の女の夜道は心細いことなどを附け加へながら。

『え、好いですとも……。』

教員はかう氣輕に言つて、またお園の方を見た。お園も好い道伴れを得たことを喜ばずにはゐられなかつた。『何うも御迷惑でせうけども、さう願へれば本當に結構なのですが……。』かうお園は愛嬌ある笑顔を漲らせながらいくらか立つて頼むやうにした。

『あそこまで一緒に行つて貰ひさへすれやな、T町はもうすぐだから續いてゐるやうなもんだでな。』好い事をしたといふやうに、上さんはかうお園に言つた。



『何うも難有う。今も今、淋しいけども、爲方がないから、一人でほつほつ行かうかなんて思つてゐた處なんですよ。行きつけたところなら、一里位、なんでもないんですけども、丸で知らない初めての路なんですから。』

『T町まで行くんですか。』

かう今度は教員がお園に訊いた。

『え、あそこまで参れば、停車場前に知つた家がありますから。』かうした女一人でこんなところに来てるのを半ば辯解するやうに、

『汽車で行く筈だつたんですけども、ちよつとそこに用があつたもんですから……。』

『え、好う御座んすとも……。私だつて一人で行くよりか、路伴れがある方が好い。』こんなことを言ひながら、奥から上さんが出して來て呉れた弓張提燈をひろけて見て、

『ヤ、蠟燭まで借りて行つちや氣の毒だな……。』

『いゝえ、好いんだとも……。』

『でも……。』

『もう一本上げやうかね。これぢや足りねえかも知れねえ。』  
立つて奥に行かうとするのを、

『結構、結構、これだけあれや十分だ……。』蠟燭を出して見て、『それぢや、蠟燭まで借りて行くかな。』

『えゝ、えゝ、何うかさうなすつて……。』

食つた饅頭の金は度々かうしてやつて來て、かけにしてあるらしく、そのまゝ教員は、蹲み加減になつて、蠟燭にマッチを摩つたが、いくらか髻の延びた顔はやがて點ぜられた灯に青白く照されて見えた。

『ぢや、何うかお願ひいたします。』かうお園は言つて、勘定をしたり茶代を置いたりして、一緒に出かける支度をした。

## 六十三

『何うも御迷惑で御座いますね。』かうお園が言つて其處を出てから、夕闇の中を次第に人家の灯にも人聲にも遠ざかつて行くやうな路を、二人は半ば沈黙しつゝ半ば途切れ途切れに話しつゝ後先になつて歩いた。提灯の光は歩いて行くその周圍だけを明るく照した。

『歩き方が早くはありやしませんか。』

『いゝえ。』

かうお園は言つたけれども、女の足で男と並んで歩くのは、かなりの努力であるらしく、次第に呼吸がはずんで來るのを教員は見て、



『もう少し、ゆつくり行きませう。無理だ……。』

こんなことを笑つて言ひながら、成るだけ静かに歩くやうにした。

『御迷惑ですね。』

『なアに……。近いんだから、緩くり歩いたつてわけはありませんよ。』

『一里には近いんですつてね。』

『そんなにあるもんですか。この間は半里ツて昔から言つたところですよ。でも、半里には少し遠い……。』

成ほど闇では下駄を踏み込みさうな、一步一步拾ふやうにしなれば通れないやうな泥濘が其處にあつた。さうした處に出會ふと、その度毎に、教員は提燈を高く舉げて、後からついて来る女の路を照すやうにしてやつた。

『それ、それ、此方が路が好い。』と言つたりした。

『成ほど、これちや提灯なしでは歩けませんね。』

『え、今朝、来る時、見て置いたから、それであそこに寄つて、提燈を借りて来たんですが、闇ぢやちよつとまごつきますよ。まだこれから先に一箇所これよりわるいところがありますよ。汽車が出来てから、土木で餘り構はないもんだから、路はすつかりわるくなつちやつた。』

『何うしてもねえ。』

二人はまた黙つて歩いた。

しかし、そんなにお饒舌ではないといふこと、しつかりした堅さうな人であるといふこと、温泉宿のあるあたりの教員と比べてはちつともわる摺れがしてゐないといふこと、始めはいくらか無氣味なやうな氣がしたけれども、次第にさうした心持は除れて行つて、今では却つて頼りになるやうに思はれて来たことなどが、黙つて歩いてゐる中にも、ひとり手にお園の心に染み込んで来た。

川の土手近く、いくらか勾配がついてゐるが、歩いて行くにつれて、次第にさつき向う岸で見た様な篠竹の薄暗いガサコソした藪がその兩側にあらはれ出して来た。そしてその藪の向うには、こんもりした林が闇の壁か何ぞのやうに暗く深く連なりわたつてゐた。空の星のキラキラ閃めくのも何となく無氣味であつた。

『さびしいところですね。』

思はずかうお園が言ふと、

『なアに、ちよつとの間ですよ。土手ですからね。これを向うに下りさへすれや、もう村ですから。』

『とても、私一人なんかでは、通つては来られませんね。』

『なアに……。』



別に氣にも留めぬといふ風で、教員は提灯を振り振り歩いた。と、向うからほつりと提灯が一つあらはれ出して、此方に徐かに動いて來るのが見えた。何だか芝居の舞臺にでもありさうに思はれてお園は氣味がわるかつた。しかし近づいて見ると、何でもなかつた。それは中年の農家の女であつた。向うでも氣味がわるいと見えて、『今晚は——』などと挨拶して摺れ違つて行つた。

六十四

もう一箇所あると言つた泥濘のところをやがて來た。それは向うに出て行かうすと土手の下り際で、兩側はさびしい篠竹の藪、前は路がぐるぐ折れ曲つて、そのまゝ下りて行つてゐるのであつたが、提灯を翳すと、眞中の水溜りに空の星がチラチラ映つて動いてゐるのがはつきりと見えた。

『此處ですよ、今朝來る時、ひどいと思つたのは——。』

かう言ひながら、それでも教員は、ちよつと見ては、さうした足溜りがあるかと危まれるやうなところを提灯を下にごむやうにつきつけつゝ、『私についていらつしやい。此方が好い筈だ……。』と言つたり、『それ、それ、そつちは駄目……。そつちは水溜りですよ。』と教へたりして、一步一步下駄を踏入れでは抜き、抜いては踏入れるといふやうにして辛うじて拾つて歩いて行つたが、少し行くと、その先のところにも、何うしても跨がなければならぬ幅二尺ほどの水溜りがあつた。仕方がないので、教員はその

まゝ一飛びに、それを向うに躍り越えた。すぐ提灯を此方にさしつけて、

『それ、そこは飛ばなくつちや駄目ですよ。水ですよ。』

男について何うやらかうやらそこまではやつて來たものゝ、此處に來てそれを見ると、お園は何うすることも出来ないやうにして躊躇した。

『ぴよんと一息にお飛びなさい。』

『……………』

『飛ばませんか。』

『随分大きな水溜りですね。』

飛ばうにも飛ばさうにはお園に思はれなかつた。

『飛ばませんか。』

仕方がない、下駄や足袋なんか何うなつたつてかまはない。やがてお園はかう覺悟をしたらしく、裾を大きくまくり上げて、つゞいて赤いメリンスの腰巻を帯のところに端折りにかゝつた。それを此方で見てるた教員は、

『何うするんです?』

『入つて行きますよ。水は深くはないでせうね。』



『待つた、待つた!』

急に教員は押しめて、『下駄や、足袋をぬらしちやつまらない。待つた、待つた。今、好いことをするから。』かう言つて、提灯を片手に翳したまゝ、そこに半ば水溜りの中にあらはれてゐる小さな石に足を寄せて、動くか動かないかを試して見てから、そのまゝ手を長く女の方へと伸ばした。

『そら、かうしてゐるから、私の手を持つて一呼吸にお飛びなさい。何アにわけはありませんよ。』

『さうでせうかしら。』

いくらか躊躇してかう言つてゐたが、やがてお園は男の延した手を堅くしつかりと攫んで、男に引張られるやうにして、思ひ切つて飛んだ。飛び得たことはそれで飛び得たけれど、勢ひ込んだ力に伴れられて、危く前に踏みさうになつて、引張られて、男の體にしつかり抱き着いて了つた。

『まアひどいとこ!』

かう慌て、男から離れて言つて、『とても一人でなんか通れやしませんね。』

『下駄や足袋は汚しはしませんでしたか。』

『え、難有う。』振返つて見て、『大丈夫です……。お蔭さまで……。まア、こはかつたこと。』お園はほつと呼吸をつくやうにしたが、『本當に貴方がゐて下さつたればこそ……。貴方こそ好い迷惑ですね。』

『なアに……。もう、これから先は、こんなところはありませぬ。もうあとは路はすつかり乾いてゐるから。』

るから。』

かう言つて、教員はまた先に立つて歩き出した。

## 六十五

それから急に親しさが増したといふやうにして、教員は色々なことを聞き出した。今までだるま位にしかお園を思つてゐなかつたらしいかれは、『あ、さうですか。A町のN屋にゐるんですか。あそこは割合に堅い家だ。』と言つてその近所の事情にも明るいやうな口をきいた。

『あそこいら、お存じですか?』

『あのぢき川下の小學校に三年もゐたんですからね。』

『さうですか。』

『あの家には、よく行つたもんです。僕のゐたところからは少し遠すぎるけれど、他に近所にさうしたところがないので、新年の宴會などはよくあそこでやりましたよ。お鶴ツていふ肥つた年増がゐましたが、今まだ、ゐますか。』

『存じません。』

『もうゐないかな……。あゝいふところは移り替りが早いですからね。今は、それぢや、あなたと外にま



だるるんですか。』

『もう一人、私より前からある人がをります。』

『あその家庭は面白いでせう。』

『さア、面白いって別に……』

『商賣は堅くやつてゐるし、女中にも無理にだるまの眞似なんかさせないけれども、代々、主人が女好きでね。』

『そんなことはないでせう。』

『さうかね、まだ知らないですかね。あの隠居は何人女房を替へたか知れないやうな人ですしね、今の主人だつて、あれで随分女にかけてはいろんなことがあるんですよ。』

『隠居さんはそんな話ですけども、旦那の方はそんなことはないでせう。堅い方ですもの……。』  
かう言ふと、教員は笑つて、

『それぢや此頃堅くしてゐるんですよ。今は何うか知らないけども、私の行く時分には、あの町の中に妾の様にしてゐた女があつてね。上さん、妬いて困つてゐましたよ。』

『さうですかね。そんな風なところはちつとも見えませんがね。』

『さういふ人が却つてさういふことをするもんですよ。』

こんな話をしながら歩いて、『ぢやお友達もあの近所にいくらもおありになりませうから、今度來たら是非お寄り下さい。かうしてお世話になつたお禮といふお禮は出來ないかも知れませんが……。』など、お園は言つた。次第にお園の故郷の話や、かうした他郷に來るやうになつた話や、身の上話に近い話などが段々二人の口の上つて來た。

『さうですか、Iの温泉場にゐたんですよ、』などと教員は言つた。

お園の方でも、次第に馴々しくその教員の生活などにまで深く入つて行つた。

こんなことをきくのも、餘り無厭のやうな氣がしたが、何處かで訊いて見たいやうな氣がしたので、

『さう申せば、奥さん御病氣なんですつてね。』

『何うしてそんなこと知つてゐるんです？』

『だつて、さつきあそこで御自分で、おつしやつてゐらしたぢやありませんか。』

『さうでしたかな……。』『早くもきき附けたもんだな』といふ風に暫し考へて、『何うもしやうがないんですよ、もう……。』

『御病氣は？』

『もう、何うせ、長くはない病氣なんだけど……。可哀相だからね。來てまだ一年と少しか経たないんだから。』



話の様子では、その病める細君は、その教員と一度何處かで同じ小學校に女教員をつとめてゐて、女の方から戀をして、そして漸く一緒になつたばかりで、その病氣が出たらしかつた。

## 六十六

『ぢや、もうどつとおよつてゐらつしやるんですか。』

『いゝえ、さうでもありませんがね、何うも、あの病氣ばかりは治る見込がないんだから困りますよ。』

『本當ですネ……。何うかしてお治りになりませんかね。』

『何うもね。』

子供が出来なかつたのが却つて好かつたものゝ、またその出来てゐないのが可哀相なやうな處もあるなどと教員は話した。かなり深い細君思ひで、その病床の世話なども深切にしてやつてゐるらしかつた。(矢張お互ひに最初から思ひ合つただけに、兩方で思ひ合つてゐらつしやるんですね。羨ましいやうね。)こんな言葉がつい口先まで出かゝつて來たけれども、しかしそれを表に出して言ふやうな軽い氣分にはなれなかつた。

かの女がかうして女の身で、一人淋しい夜道をしなければならぬ理由を男から訊かれた時にはお園は餘程詳しくその話をしやうかと思つたけれど、流石にそれは言はずに、さつき上さんにも言つたやう

に、川向うに知つてゐる國の人が來てゐて、それを訪ねてゆくりなく遅くなつたことにかの女は話した。土手を下りて了ふと、果して路は平かに、よく乾いて、もはやさつきのやうな泥濘は何處にも見出されなかつた。遠い近い村の灯がチラチラとあちこちに見え出して來て、車の軋る音なども遠く聞えた。

『此處等のやうな道なら、提灯なんか借りなくつても歩けるけれど……。』

『本當ですとも、これなら、女でも一人で歩けますけども、さつきのやうな路ではねえ、水溜りのあつたところでは、これはとても駄目だと思ひましたよ。』

『あそこはいつもあゝだが……。此頃では、ことに酷い……。』

かう教員は自分で言ふやうに言つて、暫くして『ぢや、今夜はT町で泊るんですね。』

『車があればと思ふんですけどももうありますまい。あつても行くのをいやがりますからねえ。』

『まア、泊つて、明日の朝、早く歸る方が好う御座んすね。……これで、K町までの軌道でも出來るとA町に行くには餘程便利になりますけれどもねえ。』

『もう、出來るんでせう。』

『今年の秋までには開通させるつもりで、工事を急いでゐるさうですけども、矢張、來年になるでせうね。』

こんな話をしながら二人は歩いた。いつか潤い田畠は盡きて、前には二三軒茅葺屋根が黒く闇を劃つ



て見え、つゞいて大和障子の明るい家が見え、村の金持らしい檜の高い角刈の垣を取り廻した大きな邸宅が見え、それから少し行くと、またその村は盡きて、向うにいくらか高く明るい灯の多く簇がつてるのお園を見た。

『あれが、町ですか。』

『え、さうです。』

『あなたは？』

『僕は、もう少し行つたところから右に入るんです。』其方の方に黒い杜やら人家やらのごたぐと連なつてゐるのを指さして、『あそこです、僕のゐる處は——』

『何ッていふ村ですの？』

『T村。』

『貴方のお名前は？』

『僕？』笑つて、『僕は杉山ッて言ふんです。』

『大變お世話になりましたのね。』忽ち逢つて忽ち別れなければならないのが悲しいといふやうな調子でお園は言つた。

六十七

『もうT町はそこですかね。』

かう教員は指したが、やがてそのわかれ道のところにやつて来て、

『それぢや……』

『何うも難有う御座いました。ではあつちにお出になることがあつたら、何うかお寄り下さいまし。』

『え……難有う……』

『奥さんもお大事になさいまし。』

かう言つてお園は別れた。と、再び一人になつたといふさびしさが溢るゝやうに胸に押上げて来て、種々なことがごたぐと一緒に集まつて渦を卷いた。それを押へてお園はすたぐと灯に向つて歩いたが、振返ると、その教員の持つた提灯が闇にほつつり一つ浮かぶやうに揺いて行くのがはつきりと指さゝれた。

町に入らうとする低い坂の上で振返つた時には、その提灯は最早ずつと遠く小さく、向うに黒くこんもりと見えてゐる村落近くなつてゐるが、そこらに稚樹の影の低い林藪があるらしく、隠れたと思ふとまた見え、見えたと思ふとまた隠れた。



最後に振返つた時には、もうその小さななつかしい提灯の火も見えなかつた。

お園は何か夢のやうな気がした。ふと不治の病の床に歸りの遅い夫を待つてゐる若い細君が見えた。ついで、あの土手の上の水溜りを飛んで男に抱着いた時の光景が歴々と浮んだ。自分ながら驚かる、ほど種々なことのあつた日である。朝、トロコで出かけて行つた時の自分と、そこから出て來た時の自分と、川の畔に立つてどつと暗碧な水面を見詰めて立つてゐた自分とは丸で別な人間のやうに思はれる。また長い年月の間にほつほつ起つた光景のやうに離れ離れに考へられる。遠い遠いある日とある日の出來事を夢か何かで一つ一つ貫いて見たやうな気がする。ふとわれに返つて、(でも好かつた。あそこで死ななくて好かつた。……あそこで死んではそれこそ犬死だ。)かう思つて見た。

(何うしてあんな氣になつたらう。)かう思つて見た。

山の旦那と喧嘩して出て來たのは、ずつと遠い昔のやうな氣がして居りながら、それが今日の午前であるのが不思議だつた。孤獨のさびしさと嫉妬と恨みとは依然として心に絡み附いてはゐるけれども、しかし最早それに捉へられるやうなことはなかつた。停車場から土手を通つて、川に面して立つた、それから薄暮に舟橋を渡つて、かうして此處まで辛うじてやつて來たといふことが、かの女と旦那との間に、有効に、再び涉ることの出來ない安全な大きな渠をつくつたやうな氣がした。

(もうあの人も家に歸つたらう。病んだ細君は喜んでゐるだらう。何の彼のと、深切に世話をしてや

つてゐることだらう。)かう思ふと、自分の知らない家ではあるけれども、その小さな家庭の光景が歴々と眼に見えるやうに思はれた。自分には、この年になつても、まださうしてやさしくして呉れる夫と言ふものがない……。お園にはちやんときまつた夫を持つて、家庭をつくるやうな位置にこれまだ一度もその身が置かれてゐなかつたことが悲しかつた。何んな貧しいものでも、皆な一人づつ、夫を持ち家庭を持つて、明るい灯の團欒の中に冬の夜を過ぎしてゐるではないか。自分のやうにかうして寒い闇の夜を縫るものもなく歩いてゐるものは一人だつてないではないか。

しかしお園はそれを振放すやうにして思ひ直した。もうかの女はさうした悲哀に捉へられる身ではなかつた筈である。生れ變り生き歸つた身である筈である。氣がつくと、お園は既にT町の明るい灯の街頭近く來てゐた。

## 六十八

何でも停車場は、町の西の外れにあるのは知つてゐたけれども、夜なのと、入つて來た路が別の方であつたのとで、そこまで來ても、ちよつとその位置がわからなかつた。それに、行つても行つても、此前訪ねて來たM屋の方へ曲る路がやつて來ないので、摺れ違つた男に、『停車場は?』と訊いて見た。教へられて、始めてその大通りの四辻を通り越して、ずつと此方まで來て了つたことがわかつた。で、